
MEMORY GAME

鴉日和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MEMORY GAME

【Nコード】

N77430

【作者名】

鴉日和

【あらすじ】

目が覚めると、木造の教室。

黒板に綴られたゲームのルール。

鎖に繋がれた13人の記憶喪失者。

復讐鬼“14人目の誰か”。

「ようこそ、懺悔の部屋へ。キミ達にはゲームに生き残り、罪を思い出して欲しい」

俺は一体、誰なのか。

START MOTION

「お前は自分が生まれた時のこと、覚えてるか？」

彼は神妙な雰囲気顔を顔に漂わせて、人指し指で右の頬を幾度となく引つかいた。

僕が首を横に振ると、彼はフツ、と頬を緩ませる。

「そりやそうだな。俺だつて覚えちゃいない」

曖昧な笑みを浮かべた彼の顔は、どこか物悲しげで。

「でもそんなこと、もう終わりだ。人類の夢がこれで叶うんだ。なあ？」

だけど、やって来なかった。

彼の言う理想郷は、未だ存在していない。

でも、それでいい。そんなもの要らない。人類の夢なんて、僕は知らない。

復讐したい。ただそれだけなんだ。

分かってくれる？

分からないよね？

分かりたくない？

分からせたいから

げーむすたーと。

1・開眼

昼村京介は目を開けた。最初に映り込んだ景色は、教室。

目の前にはロッカーがあり、その上に連絡用の小さな黒板がある。自分が寝ていたのは、コンクリートでは無く木の床であることが手から伝わる感触で理解できた。

しかしこの状況は全く理解できない。

重たい体を持ち上げようとして、違和感に気づく。両手首が離れない。

慌てて視線をそこへ持つて行くと、鈍く光る手錠が昼村の手首にしっかりと装着されていた。手錠からは鎖が延びている。

その先を目線で追うと、ぴったりとくっつき合うように2つのローラーが置かれていた。動かないように木の床に固定されている。

そしてそのローラーに、鎖の先が巻き付けられていた。

「は？ 何これ」

そう呟いて、上体を起こす。

辺りを見回すと、他に十数の人間が昼村と同じ行動を取っていた。それぞれの顔は恐怖、不安に彩られている。

昼村はふと、教室前方の黒板に目を向けた。

そこには黒板とは対照的な白い字で大きく“掴み取る”と書かれ、その下に何やら細かい文字で説明文が付け足されていた。

掴み取るゲーム

“ 掴み取る ”

- ・プレイヤーは13人。全員に手錠をしてもらう。（全ての手錠は部屋の中央のローラーに巻き付けられている。）
- ・手錠を外す鍵はプレイヤーの背中に貼り付けられている。
- ・プレイヤーの中に1人だけ“ ジョーカー ” が紛れている。ジョーカーの背中には鍵が張り付けられていない。
- ・13人の手錠はどの鍵でも外せる。
- ・一度でも鍵を使うとその鍵は手錠から抜けなくなる。
- ・ゲーム開始から60秒後、部屋の中央に置かれたローラーが手錠の鎖を巻き取り始める。

さあ、脱落者は誰か。

2・序章（前編）

「……は？」

昼村は絶句した。

——分からない。今何が起きている？という事だ？

昼村は“現状”の理由を探る為に“過去”の行動を思いだそうとする。

が。

その行為を制止するように大きな音が教室に響いた。

まるでバイクのエンジン音の様な音。

周囲の視線が……もちろん昼村の視線も、その音の出所へと向かう。

——それは部屋の中央。2つのローラーから発せられていた。

右側のローラーは右に、左側のローラーは左に凄まじい勢いで回転している。

「うわぁっ！！」

瞬間、誰かの絶叫が響き、同時に昼村の手首が部屋の中央へ引っ張られる。

その時初めて、昼村を含むその場の全員がこの“ゲーム”の意図を理解した。

つまり60秒後、この鎖は完全にローラーに巻き取られる。そうなれば鎖に繋がっている手錠を2つのローラーは粉碎する。

やがて手首が、腕が、身体が2つのローラーに巻き取られるのだ。

「くそっ!!」

再び大声が響く。

その方向に首を向けると、大柄の男が隣の男から鍵を奪いとって
いた。

大柄の男は鍵を口に加えると、あまり自由の効かない手首につけ
られた手錠の鍵穴にそれを差し込んだ。

——金属音がして、手錠が男の手から落ち、酷く不格好な落下音
を教室に響かせた。

大柄の男は息を荒くしたまま、やがて何かに気づいたように自分
の背中に手を回す。そしてその背中にテープで張り付けられた鍵を
見つけると、

ほらよ！

と言わんばかりに床にその鍵を投げつけた。鍵は二度三度とバウ
ンドし、部屋の隅に転がる。

——それが、それが合図だった。

「うおおおおっ!!」

坊主頭の男が鍵目掛けて走り出す。

手錠のかけられた手首を精一杯 前方へ突き出し、部屋の隅にだ
け焦点を合わせて。

それを見てか見ずにか、また数人が立ち上がる。その瞬間、坊主
頭が派手に転倒した。

「ぐっ!？」

そんな奇声を上げて坊主頭は自分の手錠を見る。

既に鎖全体から1/6ほどがローラーに巻き取られている。

坊主頭が必死に部屋の隅の鍵に手を伸ばすが、もう届く気配は無く、無情にも手錠のかけられた手首は部屋の中央へと引っ張られていく。

やがて、後から来た別の男が這いつくばったままの坊主頭の背から鍵を奪取する。

そしてその男が鍵を口に加えようとしている間に坊主頭も負けじと男の背から鍵をもぎ取る。

その光景を呆然と見ていた金髪の少女も、壁にもたれ掛かっていた白髪の少年も、遅れて立ち上がりやがてその1つの場所へと集合する。

「おいっ!」「くそっ!」「やめろ!」「うぐっ」「ぎゃあ」
ちらほらとそんな声が聞こえてくる。

啞然としていた昼村も咄嗟に立ち上がり、ふらふらとよろけながら鍵の奪い合いが起きている地帯へ歩いて行った。

いつの間にか教室にいた全員がそこで鍵を奪い合っている。

——なんだこれは。何が起こっている？

他の人間の鍵を奪おうと夢中になり、背中が無防備になっている少年に昼村は手を伸ばす。

——そこにある鍵を掴み、テープごと剥がそうと力を込めたその瞬間、何者かに頭を殴られる。

「うぐっ!？」

予期せず頭に走った衝撃によるめいた隙に、掴みかけていた鍵を奪われてしまう。

昼村は殴られた、鈍い痛みの続くコメカミを抑えながら他の鍵を探す。

鎖の長さはもう半分を切っている。

自分を殴った相手を確認している暇も無い。

足元に誰かの手錠が落ちている。昼村はそれを拾い上げる。

手錠の鍵穴に差し込まれたままになっている鍵を抜こうとするが、抜けない。

引っ張ろうが回そうが、抜けないのである。

「くそお!!」

昼村はその手錠を床に思い切り叩きつける。

と、同時に、手首が部屋の中央へ更に引っ張られ、体がぐらつく。その間も2つのローラーは鎖を巻き取り続けている。

——もうこうなってしまうば、誰が“ジョーカー”であつたのか等、全てうやむやだ。まあ、最初から“ジョーカー”という存在は鍵の数を減らす為に作られたものだろうから、それが“誰なのか”というのは大した意味を持たないのだろうか……。

しかしそこまで考えた後、昼村は“あること”を見てしまう。ふと、脳裏に疑念が浮かぶ。

——待て。違う。違うぞ。これは……違う。さっき、俺を殴った男は、まさか……

そして鍵を奪う手をピタリと止め、部屋を見渡す。

「どこだ、どこかにあるハズだ。」

数秒して、昼村はお目当ての物を見つける。

それは、時計。残り時間を指し示す時計だ。

デジタル式のタイマーが黒板の上に取り付けられている。

1秒、また1秒、オレンジ色に光る数字が時間を刻んでいく。

残り時間は——19秒。

そこで、そこまで来て昼村は確信した。
間違いない。と。

——耳元で手錠が外れる音がして、昼村は我に返る。

荒い呼吸音が聞こえる。残されたプレイヤーは、昼村を含め後2人。

タイマーが動く。——後15秒。

3・序章（後編）

「くっ！！」

昼村は慌てて鍵を探す。

目の前の男——俺ともう1人の、まだ手錠を外せていない黒髪の少年。

その背中に、鍵は無い。

「鍵っ！！ 鍵はどこだ！！」

「昼村は徐に立ち上がる。

鎖の長さはもう5/6。

2人の目の前、直ぐそこにはローラー……死が迫っている。

「うがああ！！」

黒髪の少年が雄叫びをあげながら部屋の隅に視線を送る。

そこにはまだ未使用の鍵が無造作に置かれていた。

一番最初に脱出した男が床に叩きつけた鍵だ。

当然、部屋の隅のそれは短くなった今の鎖では届きそうもない。

黒髪の少年はひたすらその鍵に手を伸ばし、唸り続けている。

やがてその様子を観かねたのか、大柄の男が部屋の隅まで駆け出し、鍵を拾い上げる。

「俺に、俺に鍵をつ！！」

「俺だ。俺によこすんだ。」

必死で叫ぶ少年に対し、昼村は至って冷静に大柄の男に交渉する。
男は一瞬だけ動きを止めたが、直ぐに鍵を2人の居る方向へと投げる。

昼村と少年。

鍵は2人の間に、あっけなく落ちる。

——一度、少年と昼村の目が合う。

そして、直ぐにその視線は床の鍵へと向かう。
カチ、と。タイマーがカウントを刻んだ。

「うあああああ、っ!!」

2人の奇声が重なり、そして手が鍵へと伸びる。
鎖が金属音をあげる。その間もローラーは絶えずにエンジン音を
鳴らしている。2人の手が重なる。荒い息がこだまする。

鍵を掴んだのは——少年。

「あああ、ああああ!!」

昼村は発狂し、少年に飛びかかる。
しかし少年はいとも簡単にスルリと昼村を回避し、鍵の柄を口に
加える。

「おおあゝっ!!」

もう一度。

昼村が少年に襲いかかる。

今度は回避することもなく、少年は昼村の腹を一蹴した。昼村が床に這うように墜ちる。

その隙に少年が鍵を手錠に差し込む。

「やめろっ!! 待てっ!!」

這いつくばった姿勢のまま昼村が両手を少年に突き出す。

——その手の一寸先で、少年の手錠は音もたてずに外された。

「あ……あ……あああゝ」

床に落ちる手錠を昼村は目で追う。

やがてそれは、甲高い金属音をあげて床に着地する。

「……うあああああゝ!! ああああゝ!! ああゝ!!」

タイマーの数字が、全て“0”になった。

静まり返った教室に、けたたましいブザー音が鳴り響く。

心なしか、ローラーの発するエンジン音も大きくなった気がした。

「うあゝ あっ嫌だっ嫌だ!! し……しし死……しに」

昼村は必死な形相で辺りを見回すが、誰も目を合わせる者はいない。

ローラーが鎖を巻き取る。鎖が徐々に短くなっていく。

ゲーム開始直後から巻き取られていた鎖は既に9 / 10をきっている。

―昼村の元に明確な“死”が訪れるのに、大した時間は必要なかった。

「あああゝ ああゝ あゝ あああゝ！！ 糞っ！！ ふざけるな！
なんだよこれっ畜生っ！！ 嫌だ嫌だいやだいやだ」

ローラーは数センチ先まで迫ってきている。

昼村は何とか抵抗しようとして残り短い鎖を自分側に引き寄せるが、ローラーの回転の強さにそんな物は何の慰めにもならない。

遂にローラーが昼村の手錠を巻き込む。

「ああっあああゝっ！！」

パツと火花が辺りに飛び散る。

その火花に紛れているのは――鮮血。

ローラーが昼村の手を巻き取り始めたのだ。

「うああっ！！ ぎゃああっあゝあゝっ！！」

昼村の顔が苦痛に歪む。ローラーの隙から血が噴き出る。

「止めろっ！！ 誰か助けてっ！！ こんな…こん、な、な」

息も絶え絶えに昼村は足でローラーを蹴り上げるが、床に固定されたそれは微動だにせず、回転も止まる様子を見せない。

「こんな、訳の、分からな…い所で、し死にたくないっ！！ 嫌だっ！！」

ローラーに巻き込まれていく手首を昼村は必死に引き抜こうとするが、激痛に力が入らない。

やがて、鉄製の手錠が轟音をあげながら変形していく。

——そして腕が装置に飲み込まれ始めると同時に、昼村は気を失った。

ローラーから滴り落ちた血液が木の床を赤黒く染め上げている。その間も昼村の腕の肉を裂き、骨を砕いていたローラーが停止したのは、昼村が気絶してから3分ばかりが過ぎた頃だった。

エンジン音が止むと、教室の中は静けさを取り戻す。

部屋の壁に張り付いている脱出に成功した人間の中には、中央で今起きた凄惨な出来事をただ傍観している者や、直視出来ずに顔を背けて泣き崩れている者、どこか上の空に体を震わせている者もいた。と、不意にあのけたたましいサイレンが再び鳴り響く。

その場の全員が、一瞬体を硬直させてから顔を上げる。

「誰だ！！ どこにいる！？」

坊主頭の男が天井に向かって怒鳴りつけるように叫ぶ。
そこには放送用のスピーカーが設置されている。

——しばらくして、唐突にサイレンが鳴り止む。

そして少しの余韻の後、“誰か”の声が教室に響いた。

《序章は楽しんで頂けたか？ ようこそ。懺悔の部屋へ。キミ達にはゲームに生き残ることで、己の罪を“思い出して欲しい”。》

4・喪失

ブラウン管の向こう側から立ち上る黒煙が、僕の絶望感を増幅させた。

花火？ そんな、ゲームみたいな感覚で。

ああ、長かった、長すぎた。

やっと殺せる。お前らを、殺せる。死に様を拜める。

計画は万全だ。

「罪……だ？」

沈黙の中、吐き出すように大柄の男が呟いた。

《キミ達には私の声が聞こえるだろうが、私にキミ達の声は聞こえない。つまり、キミ達の質問に答えることは私には出来ない。ということを先に言っておこう》

“誰か”は続ける。

《キミ達はめでたく生き残った。生き残ったが、それだけだ。まだ

“生還”を果たしていない。薄々分かっているだろうが、キミ達の中で、“生還”を果たせるのは、たった1人……”

まだ静寂を破らない教室に、追い討ちをかけるように“誰か”の
声は響く。

《これからキミ達には2つ目のゲームをエンジョイしてもらう訳だが、その前に》

そこでスピーカーは一度言葉を区切る。しかしその間は一瞬で終わった。

《休憩時間だ》

「……は？」

誰かの気の抜けた声が響き、その場にいた全員が眉をひそめる。

《よく考えてみたまえ。キミ達はお互いのことを全く知らない。この場で一度、軽い挨拶でもした方が良好だろう？ 状況整理の時間をあげようと言っているんだ》

まくしたてる様に言葉を連ねる“誰か”に、返事をする者は居ない。

《それと、ここから脱出しよう、何て事は考えない方が良好》

その言葉に、金髪の少女が教室の扉に首を向ける。

そこには、木で造られた床とは不釣り合いに重々しく、黒ずんだ鉄の塊が置かれていた。

《この場所は元々、大戦時に兵士達が使用していた古い要塞だ。脱出は容易では無い。さあ、休憩時間は15分。どうか有効に、活用してくれ》

ブツン、とスピーカーから音がして、部屋に再び静寂が訪れた。

「クソがつ!!」

大柄の男が教室の扉に向かって走り出す。

聳え立つ黒い扉のノブを握り、力を込めるが、開かない。

その鉄の塊は押しても引いてもさも当然というように微動だにしないのである。

「ああっ！ 出せっ！ 出せよオイ！」

やがて大柄の男は両手を握り、それを鉄塊に何度も打ちつけながら叫ぶ。

しかし誰が返事をするわけも無く、その場に残ったのは、虚無感だけだった。

男は息切れしながら、ようやく扉を叩く行為をやめる。

そして、酷く上下している肩を大して気にもせず、首を後ろへ向ける。

その視線の先には、圧倒的な存在感を放つ昼村の死体が置かれている。鉄の扉と同じく、昼村はピクリとも動かない。

ただ、死体の周りに飛び散った血液が床に染み込み、赤黒いシミを作っているだけだった。

「う……ええっ……」

ローラーにより肩までがぐちゃぐちゃに潰された昼村を見て白髪の少年が右手を口元まで持ち上げる。

何とか酸っぱい物を押さえ込んだのか、少年はその場につづくまっつてしまった。

それを最後に、教室は重苦しい沈黙に支配される。

カチ、と音がして、タイマーが時間を刻む。

黒髪の少年が、さっきの“ゲーム”に使用されていたタイマーが設置されていた方向へ視線を向ける。

13分47秒。

どうやら今度は、休憩時間とやらの残り時間を示しているらしい。

「チッ……」

小さく舌打ちして、目の辺りまで伸びている髪をかきむしる。

――目の前で人が死んだ。

恐らく自分は、その事に恐怖を覚えているのだろう。
そうだ。戦慄している。

――だが、何故だ。何故だか解らないが、腑に落ちない。

ふと、黒髪の少年が、記憶を辿ろうとして、やっと気付く。

今置かれている、異常過ぎる状況が、“その事”に気付かせるのを遅くしたのか、

もしくは最初からその程度の事だったのか。

どちらなのかは、やはり解らないが。

自分が気づいた事に戦慄し、顔を上げる。

大柄の男と目があった。

少年は吐き出すように、自分が気付いた“異常”をそのまま言葉で表した。

「……思い出せない。自分が、誰なのか……」

一瞬、頭の中がグルリと揺れた気がした。

“誰か”の声が脳内を駆けめぐる。

《罪を“思い出してほしい”》

5・休憩（前書き）

今回はキャラクター紹介がメインだったりそうじゃなかったり

5・休憩

「思い出せない…何も…」

少年の告白に、大柄の男は顔を歪める。

「何を言ってる？ 俺の名前は田所。たどころ 田所 はれひろ 晴広だ。記憶なんて失って…」

「違う！！ 俺だって自分の名前くらい覚えてるっ！！ でも…それ以外…何も…」

田所と名乗った男の言葉を強く否定し、少年は押し黙る。

少年の必死の形相に、只事では無いと感じた田所は、至極簡単そうに“この場所”に来る以前の事を思い出そうとした。

そして、そこでようやく。

ようやく気付く。気付かされる。

“記憶”が無くなっている。と。

それはまるで、脳髓にぽっかりと穴が開いたような奇妙な感覚だった。

「あ……あ……」

田所の鼻筋を脂汗が流れていく。

繰間の言葉に、教室の全員がようやく“その事”に気付いたらしく、皆一様に顔を青くする。

「罪を“思い出せ”…なるほどね、そういうことか」

呆然と立ち尽くす田所の後ろで、少女がポツリと呟いた。

カチ、と、タイマーの音が暫し沈黙の教室に響く。

田所が自分の顔に付着している大粒の汗を腕で拭うと、着ていた黒いジャージが水分を吸収し、更に黒みを増した。

そう言えば、集められた人間は全員が同じ格好をさせられている。

黒いジャージだ。前側にチャックがついており、自由に開けることが出来る。その下には、ジャージ同様に黒色のタンクトップが着せられていた。

——これも“誰か”がやったことなんだろうか。——

「な、なあみんな!!」

田所の思考を、男の声が遮断する。

「ぜ、全部忘れちまつてる訳だから、じじ自己紹介なんて出来ないけどさ、せめて名前くらいでも教えあつとかないか？」

その落ち着かない話し方は、男が既に冷静では無いということを知り、雄弁に物語っていた。

しかし、男とてこんな不安感、並びに不信感を心に抱えたまま次の“ゲーム”を迎えることになるのは真つ平ご免であった。

「……………」

「ご免ではあったのだが、誰も返事をする者はいない。」

「え、えーとな。お、俺は降旗！ ふ降旗^{ふるはた} 真也^{しんや}だ！！ えーと、それからそのー、そうだ！ キミの名前は？」

言葉に困った降旗は、何の前触れも無くうずくまっていた白髪の少年に話を振る。

自分が話しかけられている事に気付かなかったのだろう、少しの間を置いてから少年は小さな声で答える。

「な、中野^{なかの} 太一^{たいち}。俺も名前以外は何も……………」

そこまで言っで、再び黙り込んでしまった中野を見てから、降旗は

「じゃあ、キミは？」

と中野の右隣にいた黒髪の少年に名前を尋ねる。

「うええ？ あ、ああ、俺は、繰間^{くるま}だ。繰間^{くるま} 圭一^{けいち}。それ以外は、さっき言った通り…覚えてない」

記憶を失っていることに気付いてから、半ば放心状態となっていた繰間は少しもってからそう答えた。

「よし、じ、じゃあ次は……」
「連城だ」

次の人間を決めようとしていた降旗より早く、繰間の右隣に立ち
尽くしていた男が声を上げる。

長い黒髪からは鋭い目が覗いていて、その下につつすらとクマが
出来ている。

「名前は連城れんじょう 常夜じょうや。それしか覚えてない」

挑発的な男がそう名乗ると、今度は自然に連城の右隣にいた少女
に視線が行く。

やがてその事に気付いたのか、

「ああ、伊吹いぶき 蓬香ほうか。覚えてるのは私もそれだけ」

と、腰まで伸びた長い金髪をかき回しながらそう言った。

それからは時計回りに、各々が自己紹介…といえる物なのかは分
からないが、とにかく自己紹介を済ませていく。

まずは白いバンダナが特徴的な痩せ形の青年。

「三笠木みかさき 光佑こうすけ。言わずもがな、俺も名前は以外は忘れちゃって
るよ」

親指の爪を噛みながら喋るのはまん丸に太った中年の男。

「か、上岡かみおか 洋大ようだい。僕も、何も思い出せない…」

どうやら、爪を噛むのは癖らしい。

――頭が記憶を無くしてても、癖つてのは体が覚えてるもんなんだな…

他の人間をじっと観察していた田所は、上岡の様子を見てふとそう思った。

「黄村 征一。きむら せいいち 私も覚えているのはそれだけだ」

そう言ったのはオールバックの背広が似合いそうな青年。どこでつけたのか、目の下に大きな火傷の痕がある。

「俺は、鳴嶋 和彦。なるしま かずひこ め、目が覚めたらここにいて、目が覚める前の記憶は無い」

坊主頭の少年はしどろもどろにそう答えた。

「三奈門 大樹。みなかど だいき。それ以外は、皆と同じだ」

小柄の少年が頬を人差し指で撫で繰り返す。

「永羽 敦。ながばね あつし 何が何なのか、これが現実なのかどうかもあやふやだ。……くそっ」

そして最後。

眼鏡をかけた少年がそう呟いた。

田所がタイマーを見上げる。

―残り1分18秒。

残り時間を確認し終わると、田所は目線を下ろし腕を組む。

―記憶が、無い？

最初に死んだあの男もそうだとして、13人全員の記憶を、“誰か”が消し去ったっていうのか？どうやって？――

曖昧な記憶に対する曖昧な疑問が幾つも浮かび上がるが、1つとして理解出来る物はない。

解るのは、自分は今死にかけているということと、現に1人の男が死んだ、ということだけ。

「畜生がつー！」

不安から来る苛立ちによる物か、田所は勢い良く壁を右手で殴りつける。

しかしコンクリートの壁はびくともせず、田所の手には痛みだけが残った。

―死にたくない。

その痛みが、田所にそう実感させた。

そして、訪れた沈黙を見計らった様にあのサイレンが再び教室に鳴り響く。

教室の数名がハツとした様にタイマーを見上げる。

当然、残り時間は0。

つまり、休憩の終わりである。

《休憩時間は有意義に過ごしていただけたか。
それでは早速、次のゲームに取り掛かるう》

やがて、天井のスピーカーからモザイクがかった“誰か”の声が聞こえてきて、その場の全員が一樣に顔を強ばらせる。

《まあ安心したまえ。準備をするのは私1人だ。大切なプレイヤー
諸君に、重労働をさせるつもりは毛頭無い》

相も変わらずまくしたてる様に言葉を並べる“誰か”。

《その間に見る“夢”を忘れない様に。》

―夢？何のことだ？

「お……」

田所が声を出そうとした時だった――教室に、奇妙な音が響いたのは。

それは例えるなら、マイクに向かって大きな声を出した時の、あの嫌な音。

擬音語で表すとするなら、「キーン」。

とにかく、聞くに耐えない気色の悪い音だった。

その瞬間、田所は猛烈な睡魔に襲われる。

瞼が途轍もない程に重たく感じて、よろけ、崩れる。

そして、それを皮きりに次々と倒れ出すプレイヤー達。

「うぐっ……」

そんな言葉にもならない声をあげたのは三奈門。

「うぁ……何が……起き、て……」

これは伊吹。

「くそ……いや……だ……」

繰間がそう呟いたのを最後に、教室に幾度目かの沈黙が訪れた。

——数分して、全員が気絶しているのを確認した後。

“誰か”が重たい腰を上げた……。

「さて、と。次のゲームだ。」

5・休憩（後書き）

田所 晴広
連城 常夜
上岡 洋大
伊吹 蓬香
鳴嶋 和彦
三奈門 大樹
繰間 圭一
永羽 敦
中野 太一
黄村 征一
三笠木 光佑
降旗 真也
× 昼村 京介

さて、ようやく長い長い前置きが終了しちゃいました。

次回から本格的に物語が開始される。…と良いなあ…↑

まあそんな訳で挨拶が遅れてしまいましたが、作者の蛤はまぐしと申しま
す。

まず、ここまで読み進めて頂いたことに厚く感謝致します。

イカを飲み込むタイミングが14になっても分からないこんな私で
すがどうぞこれからも暖かく見守ってやってくださいまし。

6・瑞夢

手を握った。

汗なんてかかない。

焦りは禁物だ。そんな物は、足手まといにしかならない。

しかし、緊張は大切なことだと、俺は思う。

さて、準備に取り掛かろう。

大きな大きな、花火を打ち上げる準備に。

先ほどまで居た教室とはまた別の教室で、鳴嶋は目を覚ました。
その瞬間、自分の身に起きている異常に驚愕する。

自分の手が、何かを握っていることに気付くが、その手が動かない。
い。

今回も手首を縛られているのか、と鳴嶋は思ったが、違う。

—手首だけじゃない。

手首も動かないが、今回は、全身。

全身が言う事を聞かない。

そして鳴嶋は、その異常の原因を探るために、ゆっくり視線を下ろす。

——椅子に座っていた。

一般的なソファの様なその椅子の手すりに、自分の手が置かれている。

そして置かれた手首には、鎖。

手首ごと椅子の足に鎖で縛り付けられている。

更に足も、手首と同じくスネの部分が鎖でソファーにしっかりと固定されていた。

最後に、首。

首はソファに固定されてはいない。

頭だけなら前に倒すことが出来る。

しかし、首にもしっかりと鎖の感触はあった。

——どういうことだ？今度は何が起きている？

疑心か、不安か、不気味なものを感じた鳴嶋は、とっさに顔を上げる。

無造作に床に置かれた薄型のモニターを挟んで、そこに、男の姿があった。

「黄村…さん？」

長めの髪をオールバックにした、落ち着いた印象。
そして何より、目の下にある大きな火傷の痕。その男は、間違いなく黄村 征一である。

しかし、それ以外に人の気配は無い。

どうやら2つ目の“ゲーム”は、鳴嶋と黄村の2人だけで行われる様だ。

——しばらくはお互いの様子をじつと観察していた2人だったが、

「黄村…さん…そ、れ……」

唐突に、鳴嶋の顔が青くなる。

無理もない。とは、まさにこの事だろうか。

鳴嶋と同じく、黄村の両手両足は椅子に固定されている。

そして、首に巻かれている鎖。

それが、鳴嶋を恐怖へと突き落とした原因だった。

鎖は黄村の首の周りをぐるりと一周していて、後ろからその鎖が延びている。

それは、黄村の頭の後ろから真っ直ぐ天井へと延びていた。それを目で追い、天井を見上げると、そこにあるのは、ローラー。

黄村の首を囲んだ鎖は、ローラーに結びつけられていた。

つまり、自分の首の鎖も——あのローラーに…

そして気づく。

鳴嶋と黄村の首に巻き付いた鎖は、“繋がっている”ということに――。

そしてまた、ジリリリとあのサイレンが響き、

《おはよう、お二人共》

“誰か”の声が聞こえてくる。《自分の手が握っている物を、もう確認したか？》

“誰か”のその言葉に鳴嶋は自分がずっと握っていた物に目をやる。

「なんだよ、これ……」

そして、絶句。

鳴嶋の手の中に合ったのは、リモコン。

黒ずんだそのリモコンには、別々の色をした3つのスイッチがつけられていた。

スイッチは上からそれぞれ、赤色、黄色、青色の順番に縦に並んでいる

そして何より、鳴嶋が絶句した理由は、スイッチに描かれているマークだった。

赤色のスイッチには、握り拳。

黄色のスイッチには、中指と人差し指を立て、それ以外の指を折り畳んだ手の形。

そして青色のスイッチには、指を全て開いた手の平が刻印されている。

「これは、まさか…」

即ち、グー、チョキ、パー。

《今からキミ達に行って貰うのは、変則じゃんけんだ》

さも愉快そうな声で、“誰か”は続ける。

《黒板に、ゲームのルール詳細が記載してある。30秒後に、ゲームスタートだ。

いいか、キミ達の手元にあるその道具は、何かを救うものではない。他を殺すものだ。それを“忘れるな”》

それを最後に、声は途切れた。

黄村は、そして鳴嶋も、ほぼ同時に黒板へと首を向ける。

吊られるゲーム

“吊られる”

- ・プレイヤーは生を“掴み取った”12名の内2名。

- ・椅子に拘束され、向かい合った状態でゲームスタートとなる。

- ・1分に一度、お互いのプレイヤーに渡してあるリモコンでじゃんけんを行う。

プレイヤーは自分が出そうと決めた“手”のマークが描かれたスイッチを押すことで、その“手”を勝負に使用することが出来る。

(じゃんけんの勝敗は、プレイヤー2人の間に置かれたモニターが報告する。)

- ・“手”の選択時間は10秒。その間にどの“手”を出すか決定しなかった場合、3つの中からランダムで1つを選択し、プレイヤーの意志に関係なく強制的にその“手”を勝負に使用する。

- ・1つの“手”は1度しか使用できない。

(1度使用した“手”はスイッチを押しても反応しない。)

- ・あいこの場合、その勝負はノーカウントとなる。

- ・この方式で勝負を繰り返し、先に2回負けた方がゲーム敗者。

- ・ゲーム終了後、天井に設置されたローラーが回転し、敗者の首に繋がった鎖を巻き取り始め、敗者を絞殺する。

・尚、何らかの理由でゲームが続行不可能になった場合は両プレイヤーが絞殺の対象となる。

さあ、脱落者は誰か。

7・捜査

時間は少し遡り、3ヶ月程前。
場所は東京の都心部。

「これで3件目か……。まったく、相変わらず奇妙な現場だな……」

とある廃墟の一室で、捜査一課の池神いけがみは小さくそう呟いた。

その目の前には男の死体が横たわっている。

無惨にも左手首を切り取られた状態で。

―切り取られた手首は、廃墟の壁際にポツリと置かれていた。

そしてその部屋の隅に、もう1つの死体。

こっちは額を銃で打ち抜かれている。

更に、2つの死体の中央には“奇妙な”手錠が無造作に捨てられていた。

というのも、手錠の片側が血塗れになっているのだ。血に塗れたその手錠の内側からは、鋭い刃が突き出ている。

どうやら、あの男はこの奇妙な手錠によって左手首を切断されたらしい。

「警部、私達が踏み込んだ時、この部屋は外側から施錠されていて完全な密室でしたので、被害者達は中に閉じこめられていた模様です。それと、今回の“ゲーム”のルールはあちらに……」

池神の隣に立っていた若い女の刑事が指を右側に向ける。

池神は男の死体から目を離し、女の指差した方向へ視線を移す。

そこにあつたのは、壁。

他の捜査官達がコンクリートの壁をカメラに納めている。

その無機質な薄汚れた白い壁に、何かで引つ掻いた様な文字がびっしりと書かれていた。

☐ “盗み取る”

・佐伯 亮の左手と、柊 美幸の右手は1つの手錠で繋がせてもらった。
った。

・その手錠は只の手錠では無く、一定の操作により内側に仕掛けられた刃が作動し、着用者の手首を切断する代物である。

・手錠を外す鍵はポケットに入っている。しかし、自分のポケットに入っている鍵は自分の手錠を外す鍵では無い。佐伯の鍵は柊の手錠を、柊の鍵は佐伯の手錠を外す為の物。

・どちらか片方が手錠を外した場合、もう片方の手錠が作動し、鍵を盗み遅れた人間の手首は切断される。

・制限時間は120秒。それまでに2人共が生きていた場合、両方の手錠が作動する。

さあ、脱落者は誰か。」

「被害者二名は昔某電気会社でプログラマーとして勤務していましたが、数年前にリストラされた模様で、現在は窃盗を繰り返して生計をたてていた様です」

壁に書かれた“ルール”を見て呆然としている池神に、女はきびきびと話していく。

「恐らく今回の“ゲーム”勝者は柊 美幸であると思われます。仕掛けが作動した手錠に付着していた血液は、佐伯の物と一致しているのです」

女がそこまで説明するが、池神の眉間にはシワが出来ていた。

「ならば、どうして？ “ゲーム”に勝ったハズの柊がどうして殺されているんだ？」

「それは…まだ、分かりません」

池神の指摘に、女は目を背ける。

「つたく、署に戻るぞ湊谷^{みなとや}。資料の中にまだ何か残っているかもしれない」

「はっ！！」

湊谷と呼ばれた女の刑事は池神の言葉に勢い良く返事をし、廃墟の部屋を後にした。

カチリと、タイマーが動き出した。

鳴嶋は黒板から目を離し、タイマーを探す。いや、実際には探す間も無い程すぐに見つかった。

それは目の前に置かれたモニター。

鳴嶋と黄村の間に佇むモニターが、オレンジ色の文字を映し出している。

——56秒。と。

恐らく、これが0になった時、“勝負”の時間が開始されるのだろう。

鳴嶋は考える。

——じゃんけん？最初に出しやすいとか言われてたのは何だ？
グーか？

でもこれは直接的に手を動かして行う訳じゃない。勝負はあくまでも機械越しだ。

どうする？どうすればいい？——

考えは一向に答えに辿り着かない。

そんな中。

「なんだよ……！！ このゲームは……！！」

まだ一言も言葉を発していなかった黄村の声が教室に轟いた。

「どうしたん……です、か？」

黄村の顔を見た鳴嶋は、その張り詰めた表情に言葉を詰まらせる。

そして、黄村は鳴嶋をキッと睨むと、吐き捨てる様に叫んだ。

「終わらない……。この勝負、終わらないぞっ……！！」

8・模索

どこまでも青い空は、綺麗だと思った。
同時に、私は少しだけ胸を撫で下ろす。

——こんな空を壊さないで良かった…と。

私が壊すのは快晴の青空では無い。漆黒の夜空だ。

リーダー曰わく、“花火”は夜の方が見栄えするから。らしいのだが——。

「終わらない…終わらない……」

やがて、黄村は力が抜けた様にボソボソとそう呟く。

「どういうことです？ 黄村さん!!」

鳴嶋の呼びかけに、黄村は顔を上げ、悟った様な口調で話し始めた。

「こ、の…ゲーム。要は、3回勝負のじゃんけんと差して変わらない物と思っていた…が、これは、違うつ…」

一旦そこで言葉を区切り、黄村は生唾を飲み込む。

「簡単な事だ。仮に、そうだな…私が、グーを出したとする。そしてキミはチョキを出したとしよう。

つまり、最初の勝負は私の勝ちという訳だ」

黄村の説明を受けて、冷や汗を流しながらも鳴嶋は無言で頷く。

「このゲームは、1つの“手”を一度しか使用出来ない。

私はグー、キミはチョキを使ったのだから、私に残された“手”はパーとチョキ。

キミに残された“手”はパーとグー……」

「あ、ああっ！！」

そこまで。

そこまでで、鳴嶋が驚嘆の声を上げる。

「こうな、ったら…黄村さんは…パーを出せば、負けなくなるっ！！」

「だが…それだけじゃない……」

鳴嶋の声とは対照的な、深く沈んだ口調で黄村は話を次へと進める。

「“あいこはノーカウント”。

このルールが、このゲームのキラーポイントだ」

黄村は一旦言葉を区切り、息継ぎをしてからまた口を開く。

「あいこはノーカウント。

つまりあいこになった場合、“手”は“使用されていなかったことになる”。

こうなった場合…何が起きるか…」

鳴嶋の体がピクリと反応する。

「あ…あいこ…あいこだ！　ずっと…ずっとあいこに…！！」

そう。

黄村に残された“手”がパーとチョキ。

鳴嶋に残された“手”がパーとグーなら、

黄村は必ずパーを出す。

何故ならば、鳴嶋の“手”はパーとグーのみ。

つまりパーを出せば負けが無くなるのだ。

そして当然、鳴嶋もその事に気付く。

するとどうなるか。

鳴嶋は黄村がパーを出すと分かっている。

しかし自分はチョキを持っていない。

ならば、出す“手”は1つ。

パー。

黄村、鳴嶋。共にパー。

“あいこはノーカウント”。
つまり、その勝負は無かったことになる。

黄村は次も必ずパーを出す。パーを出せば負けないのだから。
鳴嶋も変わらずパーを出す。パーを出さねば負けるのだから。

「このゲームは…終わらない」

止めを刺すかの如く、黄村がポツリと呟いた。

「なんだよそれ…こんな…の…ゲームじゃ…ねーだろ…」

縛り付けられた手首が握っているリモコンに焦点を合わせながら、
鳴嶋は脱力した様に言葉を吐き出す。

——リモコン？

話を終えた黄村の脳裏に、ふとある考えが浮かび上がる。
そして天井に吊り下げられたローラーを…いや、正確にはそのローラーに巻きついた鎖を見上げて、ニヤリと口の右端を歪ませた。

《第1回戦を開始します。第1回戦を開始します。
今から10秒の間に、リモコンのスイッチから1つ選択して下さい。
10秒後、勝負の結果を画面上に発表します》

2人の目の前に置かれたモニターから機械的な女性の声が響く。

同時に、そのモニターの画面に10とカウントが表示された。

と思えば、早くもカウントは9へと変わる。

「ぐっ……!!」

すり潰す様な声を上げ、鳴嶋はリモコンを強く握りしめる。

9 犯人（前書き）

今回は丸々捜査側の話

9・犯人

“選ぶ”

・キミの目の前には3つの棺が置かれている。

・それぞれの棺の中には、キミは覚えていないだろうがキミの大切な人間が閉じ込められている。

・棺は外側からしか開けることが出来ない。

・棺の中には火炎放射機が設置されていて、一定の行動により作動中の人間を焼き殺す。

・キミが開けることが出来る棺は1つのみ。
1つの棺を開けると残りの2つは焼失する。

さあ、脱落者は誰か。

——約3ヶ月前。

机の上にはばらまかれた少ない資料を見ながら、池神はうーんと唸る。

「これが奴の起こした最初の事件です。最も、現場が発見されていないだけで“ゲーム”はもつと以前から行われていた可能性もあります」

湊谷が池神に缶コーヒ―を渡しながらそう切り出し、続ける。

「現場は練馬区の中部に位置する閉鎖されたショッピングモールの地下倉庫で、やはり外側から鍵がかけられていました。

被害者は

迎已^{むかい} 準^{じゅん} 25歳。

菊川^{きくがわ}

渚^{なぎさ} 23歳。

春宮^{はるみや}

勝^{すぐる} 22歳。

栗澤^{くりさわ}

真^{まこと} 27歳。

その内、春宮と栗澤は焼死体となって発見されています」

「焼かれていない棺の中には菊川の髪の毛が残されていた…。つまり、迎已がこのゲームの“選択者”ってわけだな」

池神が湊谷の説明に付け足す形で答え、資料を1枚捲る。

そこには、一枚のメモを写した写真。

キミを救う者をキミは救えるか。

そう書かれている。

「そのメモは、棺から解放された菊川の死体が握っていた物です」

「…菊川は脱出に成功したハズなのに殺されていたんだっただな。確か…額を撃ち抜かれて」

メモの写真をまじまじと見つめながら喋る池神に、

「“選択者”と思われる迎已は首をナイフで一突きされてショック死していました。」

凶器と思われるナイフには菊川の指紋が付着していたので、迎已を殺害したのは菊川であるかと……」

と湊谷。

「となると、菊川を殺したのはこの“ゲーム”の首謀者つーことになるな。
で、このゲームの被害者達の関係は？」

池神は持っていた資料を机に置き直し、コーヒーを啜る。

「確か…全員が空港会社の社員だったと思われます。
…そういえば警部、それについて少々面白い事が」

「面白い事？」

コーヒーを飲み干した池神が、湊谷の言葉に反応を見せる。

「はい。これは後の聞き込みで判明した事実なのですが、実は迎已準という人間は棺に閉じこめられていた3人から強烈な恨みを買っています」

ピクリと、池神の眉が揺れる。

「なるほど。迎已が自分を救ってくれたにも関わらず、菊川が迎已

を殺した理由はそういうことか」

池神は納得したように頷き、続ける。

「しかし奴も性格が悪いな。棺の中に入っているのが自分に殺意を抱いている人間だなんて、迎巳は思いもしなかっただろう」

そこで、机に置き直した資料を遠目で見ていた池神に、ふと疑問が浮かぶ。

そしてその資料を手に取り顔に近づけ、

「迎巳の身長は…179…って、結構な大男じゃねえか。それに比べて、菊川の身長は152…」

と、被害者の情報欄を凝視して呟く。

「小柄な女が…こんな大男の首を一突きに出来るか？それに…迎巳だって棺から出てきた菊川が自分が殺意を抱かれていること位知っているハズだ。油断なんて有り得ない……」

池神はもう一度、散らばった資料を手元に手繰り寄せる。

そして二枚、三枚と目を通し、やがてピタリと手を止める。

その資料に記載されているのは“ゲームのルール”。

地下倉庫の天井にびっしり書かれていた物である。

そのルールの一部に、池神は言い知れぬ不可解な感覚を覚えた。

・それぞれの棺の中には、キミは覚えていないだろうがキミの大

切な人が閉じ込められている。

“キミは覚えていないだろうが”

「覚えていない…？覚えて……
み…なとや……」

囁く様な声の後に、池神は湊谷の方向へと顔を向ける。

「なんでしょう？」

池神の鬼気迫った表情に驚きながらもそう言葉を返す湊谷に、

「今まで起きた4つのゲーム…被害者の職業は何だ？」

と尋ねる。

「え？つと…確か…」

空港会社社員に、機械技師…それと、プログラマーです。ただ、プログラマーの2人はリストラされていて…」

「…そのプログラマーの…勤めていた会社は…？」

湊谷の解答を途中で遮り、新たな疑問を投げかける。

「社名は…確か“ワーカー”。ワーカー電気です」

そして、池神はその返答を最初から知っていたかの様に顔をしかませ、重たそうに口を開いた。

「犯人の……目星がついた」

10・勝負

首にキツくキツく巻きついた鎖は、ローラーが巻き取らなくても自分を窒息死させようとしているのでは無いかと、2人は思わずにいられなかった。

黄村さんは「パーが必勝になった場合は本当にパーを出すつもりなのか？」

さっきの説明は俺にそれを出させる為の布石？

いや、その前に一回戦だ。この勝負は何としても勝ちたい。

一度でも勝っていれば、二回戦以降の勝負はうんと楽になる。

何を出してくる？黄村さんはどのスイッチの上に指を置いている？

パーだ。パー。一回戦目はパーを出すつもりか？

それとも見せかけ？俺にチヨキを出させて自分はグーを出すつもりか？ どっちだ？ どっちだ？

裏の裏の裏の裏の——

鳴嶋の思考は物凄い速さで回転する。

第一回戦まで後5秒。そして4、3。

「ぐ……う……」

黄村さんはもうスイッチを押しているのかもしれない。

自分がスイッチを押す瞬間を見られたらそれで勝負はおしまいだ。どのスイッチを押したのかを目撃されてしまえば、敗北は免れない。

じゃあ黄村さんは俺がスイッチを押すのを待っているのか？

そうなんだとしたら俺は今スイッチを押すべきでは無いのか？
どうする？

慎重というよりは臆病というのか。

結局、鳴嶋は勝負の時間中スイッチを押さなかった。

つまり鳴嶋の出す“手”はランダムで決定されるということだ。

冷や汗を流しながらも冷静を保つ黄村が押したのはチヨキ。
残り2秒での決断だった。

黄村がチヨキを選んだ事に、何か思惑があった訳ではない。

しかし黄村は、内心では笑っていた。

気は触れていない。まあ今にでも狂ってしまいそうな緊張感を感じていたが。

それでも――。

《勝負時間は終了です。勝負時間は終了です。

これより勝負の結果を発表を致します。

黄村様――――チヨキ》

モニター左側に二本の指を広げた手の形が表示される。

次は右側。鳴嶋の“手”。

表示されるのは、

《鳴嶋様――――パー》

パー。パー。

モニター右側に五指全てを広げた“手”が表示される。

「あ…」

そう呟いたのは鳴嶋。

《よって第一回戦、黄村様の勝利となります》

そして、アナウンスがそう告げた瞬間に。黄村が——動いた。
いや、正確には…動かしたというべきかもしれない。
少し間を置いて乾いた音が響き、乾いた声が聞こえる。

「…あ…なに…やってんの？」

「狩屋^{かりや} 真一^{しんいち}。少し前行方不明になった…伝説のプログラマーだ」

「行方不明？そいつが…この一連の事件の黒幕だっていうんですか？」

池神の言葉に少なからず疑問を抱いた湊谷はその眉間にシワを寄せる。

池神は口元の短い髭をジャリジャリといじりながら記憶を探る。

「1年前に忽然と失踪したシステムエンジニアだ。」

その技術力と知識量から天才と呼ばれていたらしい。
俺も実際には会った事は無いんだが…その……」

思い出したことをそのまま口にしていた池神だったが突然言葉を
噛み砕く。

「その…何ですか？」

湊谷がそう問いかけると、

「いや、何でも無い。」

と黙り込んでしまった。

その理由は、自分の考えがあまりに馬鹿らしい事に気付いたから
である。

しかし、その考えが馬鹿げていたとしても、狩屋真一がこの事件
に関与しているのは間違いないだろう。

何故なら――。

「湊谷、ちょっと出るぞ。狩屋については車で話す。」

思考を一時中断し、池神は椅子の背に掛けてあったコートを羽織
る。

「はあ…」

イマイチ池神の考えが理解出来なあ湊谷は曖昧な返答をして池神
の後ろをついていく。

「…メモリーズ・ノヴァ。」

ポツリと池神がそう呟いたのを、聞いた者はいない。

11・達成

「何…して……………」

黄村が動かしたのは、自身の首。

ローラーを通して1つに繋がった鎖は、片方がローラーから離れるともう片方はローラーに引き寄せられる。

つまり、椅子に拘束されている黄村は唯一動かせる首を前側に倒すことで鎖を引っ張り、鳴嶋の首を締め上げたのである。

無論、それは黄村の喉にも負荷を与える。

その証拠に首を元の位置まで戻した黄村は大きく咳き込んだ。

しかし咳き込みながらも、その口は上に歪んでいる。

気が狂った訳では無い。

——目的を達成したから。

首を締め上げられた鳴嶋も黄村が首を戻したことで締め上げから解放され、同じく大きく咳き込む。

その手には…無い。本来握ってあるハズの“選択権”が。

「あ…ああ……………」

鳴嶋が驚愕の声をあげ、わなわなと唇を震わせる。
その目線の先には、黒光りする長方形の機械。

——リモコン。

不意に首を締め上げられた衝撃で手からこぼれてしまったりモコ
ン。

命綱とも言うべき物。

「あ…あ…！」

ガチガチと歯をこすり合わせる鳴嶋。

冷や汗に塗れた顔を上げると、正面には黄村の姿。

黒く、不気味に、得体の知れない笑顔を見せつけて。一言。

「わ…たしの…勝ちだっ…！」

「伝説の…プログラマー…？」

僅かな振動が続く車の助手席で、湊谷は聞き返した。

その質問を受け、運転席の池神は片手でハンドルを握りながら訝
しげな顔を作る。

「…実際には俺も会った事は無いが…署内で何度か噂になった事がある。

彼は“天才プログラマー”だと」

「警察と関わりのある人間なんですか？」

「ああ。犯人であることは確実なのに物理的証拠が揃っていない…
なんて時に、警察は彼の力を借りていた」

「…どういうことですか？」

「“記憶”だ」

交差点の赤信号に車を停止した池神はコートのポケットから煙草を取り出し、くわえる。

「奴は…記憶を操れた」

「う…あ…ぐ…」

《1分後、第二回戦を開始します。》

鳴嶋の声とも呼べぬ呻きを掻き消す様にモニターの声は淡々と言葉を繰り返す。

そして再びモニターの数字は60へと変化。

上の空に齒を震わす鳴嶋の眼前には、狂喜の笑みを浮かべる黄村。

第一回戦、鳴嶋はパー、黄村はチョキを出した。

つまり鳴嶋に残された“手”はグーとチョキで、黄村に残された“手”はグーとパー。

こうなってしまうえば黄村はグーを出せば負けが無い。

そして、選択権——リモコンを失った鳴嶋。

スイッチを押さなかった場合、勝負に使用する“手”はランダムで決定される。第二回戦、第三回戦と鳴嶋の“手”がランダムで選択されれば、いずれは必ずチョキが使用される筈だ。

黄村は鳴嶋がチョキを選択するまでグーを出し続ければ良いだけのこと。

もし第二回戦に鳴嶋がランダムでグーを選択したとしても、黄村も同じグーを出す以上それは必ずあいこ。

つまりノーカウント。やり直しだ。

鎖を引いた喉に鈍い痛みを感じながらも、黄村は勝利の確信を得る。

——勝負は決した。鳴嶋の死は確定だ。と。

それは確かな事だ。

しかし、それだけで終わりでは無かった。

《これより第二回戦を開始致します》

モニターがそう告げた時、黄村は気付いていなかった。気付くべきだった。

彼の――狂気に。

12・狂気

「分かるか！？ 私の勝ちだっ！！ お前の負けだ！！」

怒鳴る様に黄村がまくしたてるが、対する鳴嶋はただ沈黙している。

「何だ？ 死に直面して放心状態か！？ それとも走馬灯でも見てるってか！？ はは、いやいや何も覚えてないんだっとなあ！！」

椅子に拘束された肢体を揺らす黄村の高笑いが教室に響きわたり、思い出した様にスイッチを押す。

無論、押したのはチヨキのスイッチ。

「ふへ… ははは、は…」

勝利：則ち“生”を確信した黄村は力を抜いてだらしない、凶悪な笑顔を作る。

《勝負時間は終了です。勝負時間は終了です。これより勝負結果を発表します》

リモコンを失った鳴嶋はモニターの声にも反応せず、ただ顔をうつむけている。

まあ、首の鎖の所為で大して下を向く事は出来ないのだが…それでも相手に対して表情を隠す位には出来たのかもしれない。

「ふへ…」

鳴嶋が小さく笑ったことなんて、黄村は気付きもしなかった。

《黄村様—— チヨキ。

鳴嶋様—— チヨキ》

「ぐうつ!？」

そんな呻き声が聞こえたのは、モニターの声が結果を言い終わるか終わらぬかの境目だった。

「や…めろっ!! 何して…」

《よって、第二回戦はいこ。ノーカウントとなりま…》

「やめ…ろおお…おっ!！」

その呻きはやがて苦悶の叫びへ変貌して、モニターの声と重なり、掻き消す。

その叫びの主は——黄村。

首を締め付ける鎖に、縛られたままの四肢をばたつかせている。言つまでもなく、鎖が独りでに首を締め上げる訳が無い。つまりそれを実行したのは、鳴嶋だ。

《1分後に第三回戦を開始します》

「や…ろ…何して…!!！」

最早ろくに声も出せない黄村の視線の先には、自分と同じく椅子に座った鳴嶋が俯いている。

精一杯に頭を下ろして、首に巻きついた鎖を引っ張りながら。

引つ張られた鎖は、天井にぶら下げられたローラーを通して黄村の首を締め上げる。

つまり、黄村の行った行動を鳴嶋はそのままやり返したのである。当然、行動が同じならその目的も黄村と同じ。

鳴嶋の目当ては、黄村の手にある“選択権”。

自分が床に放ってしまった…リモコンだ。

「う…おおお…」

黄村もその事に瞬時に気付き、手放すまいと右手のリモコンを強く握りしめていたが、やがて声の力と共に腕の力も抜けていく。

「な、るしまああ!!」

そう叫んだ時だった。

軽い金属が木の床に落ちる、酷く不格好な音が阿鼻叫喚の教室に響いたのは。

「あ…」

依然として首を締め上げている鎖の事などアウトオブ眼中に、黄村の黒目が手からこぼれたりリモコンに向く。

同時に、自身の首に限界を感じた鳴嶋は頭を元の高さまで戻す。

黄村はようやく鎖から解放されたが、その目は虚ろ。

「いやいや…え？」

喉を痛めたのか、ガラガラに噎れた^{しわが}黄村の声。

「な、は? いや…え？」

現状が飲み込めない黄村に、鳴嶋が顔を上げる。

――笑顔。

その影のかかった狂気に満ちた笑顔は、せき込みながら……途切れ途切れに言葉を連ねた。

「自分は死ぬ筈が、な……無いって……そう思ってただろ？ 俺だけ……
……おお俺だけ！！ ふへは……はは……はははひっ！！」
あははははは

教室に響く鳴嶋の狂った笑い。

と、

激昂する黄村の怒声。

あはははははあははははあはひひひはははあははははは
はあははははふははははははあはあははははあひはひふは
ははは「ざっけんじゃねええええっ！！」ははははははあはは
ひははは「何でだっ！？ こんなことしてもお前が死ぬのは同じだ
ろうがっ！！」あははひはははは「意味あるのかよっ！？ 死ぬん
だから死ぬよっ！！ 1人で！！ 死ぬばいいだろ！！」あははは
「ちくしょうがちくしょうがちくしょうが」あは「ま
だだっまだだまだだ！！」は「まだ俺が死ぬとは決まってるない！！
お前がチヨキで俺がパーなんていう状況にならない限りっ！！死ぬ
のはお前だけだ！！勝手に死ぬ！！」

《勝負の時間です。 勝負の時間です》

モニターの数字が三度60へ変わる。

「あんたは死ぬよ」

鳴嶋が唐突に口を開く。

「ふざける！！ お前に俺の生死を決められてたまるか！！」

今にも鎖を引きちぎらんばかりの剣幕で黄村は鳴嶋を睨みつける。

「いや、あんたは死ぬね。正確にはあんたも。だ。もちろん俺も死ぬ」

「黙れ！！」

「あんたいつから一人称が“俺”に変わってるんだ？ 最初は“私”だったろう？ 自分を見失ってるんだよ。そんなんでは生き残れる訳が無い」

「黙れって言うてんだ！！ お前こそ人格が入れ替わったみたいに調子づきやがって！！」「ああ。入れ替わったぜ。あんたのお陰でな。感謝してるよ」

ピクリと、黄村の動きが止まる。

「何を、言ってる？」

その言葉に鳴嶋は曖昧な笑顔を见せて、再び口を開いた。

「恐怖したらよ、思い出しまったぜ。自分の正体」

その曖昧な笑みが、再び狂気に満ちた笑顔に変貌する。

「なっ……」

「そうさ、思い出した。自分の正体も、あんたの正体も、そこで……これは多分だが……この場所に居る理由^{わけ}もな」

「あんたの正体もだと？　じゃあお前は……俺の事を知ってたのか！？」

「ああ。よく知ってるぜ。あんただけじゃ無い。死んだ昼村も、降旗さんも、田所さんもな」

「……知り合いだったってのか？　俺たち……全員？」

「ああ。そしてこの“ゲーム”とやらを仕組んだ犯人もおおよそ検討がついた……」

「……誰だっ！？　教えて！！」

「……くくっ……奴だよ。あの野郎、生きてやがったんだ……」

《勝負時間は終了です。勝負時間は終了です。それでは勝負の結果を発表します》

「奴って誰だ！？」

最早モニターの声も、黄村の耳にも届かない。

《黄村様————パー》

「あの天才だ。」

《鳴嶋様》――《

「狩屋 真一だよ」

《チヨキ。よって、この勝負…鳴嶋の勝利となります。

――しかしこれにより両プレイヤーの“手”がグーのみとな
ってしまいました。

あいこの場合はノーカウント。つまり、両者がグーのみではゲーム
が続行不可能です。ゲームルールは覚えていますよね？》

「あ…」

黄村のその声は、モニターに対する物が、鳴嶋に対する物が。

恐らくは、両方。

狩屋 真一という名前に対する反応と、ゲームルールに対する反
応。

…ゆっくり、黄村の首が黒板の方へと向く。

・尚、何らかの理由でゲームが続行不可能になった場合は両プレ
イヤーを絞殺の対象とする。

「ぐ…う…」

理解していた。

黄村はこのルールの事もきちんと解っていた。

お前だけ死ね、というさっきの発言も、両者が死ぬ可能性が無い
と出てこない言葉だ。

しかし、それでも。ルールを確認したのは。

——認めたくなかったからだろう。

己の身に降りかかった…粉うことなき“死”を。

「あつはは、だから言つたろ？ あんたも死ぬってね」

呆然とする黄村に、鳴嶋はそう呟いてから、笑った。

あははははははははは。

13・道連

そこは、大戦時代に傭兵を収容していた古びた校舎。

今は誰も見向きもしない、廃校だ。

一見すると木造だが、中はかなり本格的な骨組みで建設されているかなり丈夫。

その校舎の一角。目立たない部屋に、小型のノートパソコンがスピーカーに接続されていた。

画面には、大きな“目”。

その目の名前は、ノヴァ。

とある天才が作り出した、1つの夢を叶える為のプログラム。

《ゲーム敗者の処理を開始します。まずは黄村様》

モニターは相も変わらず淡白で無機質な声のまま、黄村に死刑を宣告する。

黄村に言葉は無かった。

言うつもりも無かったし、何か言いたくても言葉が口から吐き出せなかったのかもしれない。

“さあ、脱落者は誰か”

ルール説明のこの部分が、“脱落者はどちらか”では無く“脱落者は誰か”となっていたのは、この為だろうか。というのは考え過ぎだろうか。

—— “誰か” はこうなる事を予測していたのか？

少し間を置いて、天井のローラーが左側に回転を始め、黄村の思考を止める。

昼村が死んだ時と同じ…あのエンジンの音が部屋にこだまする。鎖を巻き取り始めてから数秒が経過して、黄村の四肢を縛り付けていた椅子の鎖が外される。

黄村はそのまま動く様になった足で立ち上がり、動く様になった手で首の鎖も頭から抜こうと試みるが、既に鎖は首に食い込んでいて顎が邪魔をする。

「…鳴嶋」

それが。

それが黄村の最期の言葉だった。

鎖が首を持ち上げるまでになり、遂に黄村の足が地面から離れる。

「がああああゝあゝあっ！！」

激痛に、黄村が断末魔の声をあげる。

しかし自身が出す声でさえも、今の黄村には聞こえていないだろう。

「う…がっああああ！！あああああああ！！ ああああああ…」

鎖を両手で搔き毟りながらもがいていた黄村だったが、やがて首に走っていた青筋が無くなり、赤が混ざった胃液が口から零れる。見開いていた黒目が大きくなり、黄村の両手がプランと垂れ下がった。

そしてエンジン音が途絶える。

その一部始終を見ていた鳴嶋は不快そうに眉をひそめながらモニターに顔を向ける。

30秒程度が経過して、再びモニターの声が響いた。

《次は鳴嶋様の処理です。さようなら》

チツ、と舌打ちをして鳴嶋は天井を見上げる。

その瞬間、エンジンの音が再起動し、ローラーが右に回転し始める。

ローラーは黄村を吊上げた時に鳴嶋の方に弛んだ鎖をぐんぐんと巻き取っていき、やがて鳴嶋の首を引き上げていく。

椅子の拘束が解除され、同時に鳴嶋が立ち上がる。

そして、徐々に徐々に。鳴嶋の体は宙へと浮き上がった。

ローラーを通して鎖は繋がっているため、鳴嶋が持ち上がると黄村の死体は逆に床へと下がってくる。

その黄村の死体を見て、鳴嶋は最期にこう呟いた。

「ざまあ… みやがれ。 糞野郎」

—— 鳴嶋と黄村の間にあった確執… 因縁を知る者は、ここには居ない。

《ゲーム終了です。敗者：黄村様、鳴嶋様。両者共に窒息死》

13・道連（後書き）

ジャンケン編完結。

田所 晴広

連城 常夜

上岡 洋大

伊吹 蓬香

× 鳴嶋 和彦

三奈門 大樹

繰間 圭一

永羽 敦

中野 太一

× 黄村 征一

三笠木 光佑

降旗 真也

× 昼村 京介

14・情報（前書き）

遅くなって申し訳ないです。

全ては年賀状のお返しとか親戚周りとかが悪いのであって自分は悪くな（ry

おや、誰か来たようだ…

14・情報

3ヶ月前。

高く聳^{そび}えるガラス張りのビル。

天辺には、赤い“W”の文字と共にワーカー電気と書かれた看板を乗っけている。

そう。ここはワーカー電気本社である。

その応接室にて。

「どうも。この度は突然けしかけてきてすみません」

池神は用意されているソファに腰掛けると不敵な笑みを浮かべてそう挨拶をし、頭を下げた。

「部下の湊谷と申します」

続けて湊谷も深く頭を下げながら、池神の隣に腰を下ろす。

「それで、今日はどのようなご用件が？」

背広姿で中年太りが目立つ、オールバックのワーカー電気社長…
明石^{あかし}_{みのる} 登は麦茶の入ったコップを片手に早々に話を切り出した。

「じゃ、単刀直入に言いますが…。今日は狩屋 真一について伺いに来ました」

池神の口から放たれた人名に、明石はピタリと動きを止める。

「狩屋が…どうかしたんでしょうか」

その硬直からいち早く立ち直った明石は、ゆっくりと尋ね返す。

「いえ、特に何かをしたという証拠は無いに等しいんですが…。まあ、今起きている連続猟奇殺人に彼が関与している可能性がありましてね。

あくまで、そう。これはあくまで“参考程度”にお聞きしたい」

池神は笑みを浮かべたまま、明石への質問を続ける。

「狩屋 真一は1年程前…この会社に勤めていたそうですね」

「はい。彼はとても優秀なスタッフでした」

そう言ってコップを机に置き、腕を組む明石。

湊谷は手帳を取り出し、明石の発言を書き込む素振りを見せる。

「しかし狩屋はわずか1ヶ月で退社してしまった…」と

「ええ。何でもアメリカへ渡る用が出来た…とか何とかで。向こうについたらこっちにも連絡をよこすとも言っていました…」

「結局それ以降連絡は無く、消息が掴めなくなった。という訳ですね」

池神が締めくくる形で言った言葉に、明石は無言で頷いた。

「それでは、狩屋 真一に何か変わったはありましたか？内面的や身体的な特徴…例えば癖みたいな物」 手帳とペンを片手に、今度は湊谷が口を開く。

「癖、か…何せ短い間の付き合いでしたから…特には…あ、そういえば！」

ぼそぼそと何かを呟いてから、何かを思い出した明石は机に身を乗り出す。

「彼は右腕に大きな手術痕がありましたよ」

「手術痕？ 一体どんな？」

「いや、私もちらつと見た程度で、彼も全く説明してくれなかったので詳しくは解りませんが…確か二の腕辺りに大きな縫い目があった様な…」

記憶の奥にある狩屋を思い出そうとしてか、うんうんと唸る明石。

「腕に手術痕ね…じゃ、我々はこの辺でお暇させて頂きます」

池神が短い髭を触りながら席を立つ。

それを聞いて、湊谷も手帳とペンをポケットにしまい立ち上がった。

「本日はご協力、ありがとうございました」

再び頭を下げてから、湊谷と池神は応接室を後にする。

2人が部屋から居なくなるのを見届けてから明石はふうと溜め息をついて残りの麦茶を一気に飲み干した。そして訝しげに顔をしかめ、呟く。

「もう嗅ぎ付けてきやがったか…しかし狩屋が殺人犯だと？ …ど
ういうことだ……」

——それから1ヶ月後、つまり2ヶ月前。

とある廃材処理工場で、明石は物言わぬ肉塊となって発見された。

15・立体（前書き）

展開しやすい様なゲームを考えてたら、何だか頭の体操クイズみたいなのになってしまいやした。

15・立体

こんなの嫌だ。嫌だ。嫌で、嫌で仕方が無かった。

嫌だけど、嫌なのに、惹かれた。惹かれてしまった。

破壊願望があつたとか、そんな物じゃ無い。断じて違う。

それに花火は好きじゃない。どちらかと言えば嫌いだ。嫌い。嫌だ。

ああ、でも、なんで、どうして、どうしても。

——その花火は、とても綺麗だった。

「ぐっ……」

躁間の目に光が射した。

一瞬、自分の身体に異常が無かった事に安心仕掛けるが、それは思い過ごしに終わる。

——右手首に金属の感覚。鈍い光を見せる銀白色のそれは間違いない手錠だ。

そしてその手錠の片側は、もう1人の男の左手首に繋がれていた。黒の短髪に気弱な印象を受ける垂れた目尻をしたその男は、降旗。まだ目を覚ましていない様だ。

繰間は重たい右手に力を込めてゆつくりと上体を起こし、辺りの状況を確認する。

その部屋の造りは掴み取るゲームが行われた教室と同じ様である。しかし、部屋の中央に昼村の血によるシミが残されていない所を見ると、造りが同じだけで教室自体はさつきとは別と把握出来る。

とは言え、部屋の中央に何も無かった訳ではない。

そこには恐らく、今回のゲームのメインとなるのであろう物体が置かれていた。

それを一言で表すなら、“箱”である。

高さ2m程の巨大な箱。

言い表すなら、電話ボックス。

6面全てが透明になっていて、中の様子は外からでも手に取る様に分かる。

そして、その箱の中身に繰間は驚愕した。

——人だ。

目にかかる程度の白髪をした少年、中野 太一。

箱の中の彼は繰間や降旗と同じく右手に手錠を掛けられていて、反対側は箱の内部に飛び出た円状の突起物に掛けてあり、箱の右側面と左側面に取り付けられている謎のスイッチ。

「出してくれっ!!」

と懇願する中野の声が聞こえる辺りからして、どうやら会話は出

来そうである。

箱の外側に黒色のカードリーダーが取り付けられている事を見ると、恐らくこの箱の開閉にはカードキーが必要なのだろう。

ふと罫間が箱の隣を見やると、そこには机が置かれていた。学校で使われている一般的な形の物で、その上には大量のカードがばらまかれている。

これが箱を開ける為のカードキーだろうか。

「う…ここは？」

不意に響いたそんな声と共に降旗が目を覚まし、罫間の右腕にかかる負担が幾分か楽になる。

「なんだこりゃ…」

箱の中に閉じ込められた中野を見て、降旗が上げた驚きの声が合図だったのか。

《目覚めの気分は如何か。ようこそ、救出の試練へ》

と、“誰か”の声が天井のスピーカーから流れて来る。

《これからキミ達の希薄且つ軽薄な“信頼”という物を試させて貰おう。黒板にはゲームのルールが記載してある。

纏まる事と変わる事。時には逆れば拓ける道が在るという事を“忘れるな”》

相も変わらず“誰か”が一方的に言葉を重ねた後、ブツンという

電子音がしてスピーカーから声は聞こえなくなる。

部屋には沈黙。

3人の視線の先は言うまでもなく黒板。

ゲームの名前は、“開ける”。

開けるゲーム

“開ける”。

- ・プレイヤーは“生”を掴み取った12名の内3名。

- ・繰間の右手と降旗の左手は手錠により繋がれている。

- ・教室中央の箱の内部には中野を閉じ込めた。（中野の右手にも手錠を掛けてある。）

- ・その手錠は特殊な物で、一定の動作により手錠の内側から刃が飛び出し着用者の手首を切断する。

- ・繰間と降旗の手錠を外す鍵は中野が所持し、中野の手錠を外す鍵は繰間が所持している。

- ・箱を開ける方法は1つ。カードリーダーに正しいカードを読み込ませる事。

- ・机の上に置かれた30枚の内に正解のカードが2枚混じっている。（箱を開けるには2枚の正解カードを両方読み込ませる必要がある。）

- ・1度でも間違ったカードを読み込ませた場合、箱は永遠に開けなくなる。

- ・制限時間は15分。

・時間切れになると3人全ての手錠が作動し、手首を切断する。

・正解のカードを示すヒントは、『いのち命ち血あか赤』。

さあ、脱落者は誰か。

16・謎々

違う。僕じゃない。僕じゃないんだ。僕は止めてくれって頼んだ。
んだ。

あんな花火は僕だって望んじやいない。

だって…だってあれには、彼が、狩屋が——くそつ。

「命…血、赤？」

透明な箱の内部から黒板のルールを見ていた中野は、外の2人にも聞こえる様に言葉を漏らした。

繰間には…当然降旗にも、そのヒントの意味は全く解らない。

解らないが、しかし。降旗は何かに気付いた様に箱の隣に置かれた机へと歩き出す。

手錠で繋がっている右腕が不意に引つ張られて我に帰った繰間は、降旗に合わせる様に足を動かした。

「つまりはこの中から、カ、カードを2枚選べば良い訳だろ？」

降旗は巻き散らかされたカードを一束にして冷静を振る舞うが、震える声の方がその本心を正直に語っている。

「何だこれ…番号が書いてある…」

降旗の持つカードを見て繰間はそう呟いた。

その言葉の通り、束になった一番上のカードには青い文字で“ 4 ”と書いてあった。

確かに、と言わんばかりに降旗がカードをめくっていく。

他のカードも、真っ白な背景の真ん中に番号が記されていた。

カードの枚数は全部で30枚。

しかし、1～30の番号が振られている訳では無い。

青い文字の1～10番のカード。

赤い文字の1～10番のカード。

黄色い文字の1～10番のカード。

で、合わせて30枚である。

そして全てのカードの右端には、黒いバーコードがついている。

「どういうことだよ…これ」

カードを手に脱力する降旗を尻目に、繰間は部屋の扉に視線を持つて行く。

その扉はやはり鉄の塊で、とても開けられそうにない。

降旗を手錠越しに引っ張って扉と反対側の壁に取り付けられた窓からの脱出を試みるが、窓の下は断崖絶壁。人間が降りるのは到底不可能だろう。

しかしそれよりも、断崖絶壁…そこはつまり…海である。

窓から見えるのは一面の海。荒れ狂う海。

「この校舎…一体何処に建てられてんだ…？」

「おい！！ 助けてくれっ！！」

置いてけぼりにされると思ったのか、中野が箱の中から救出を求め、繰間の思考を現実へ引き戻す。

「そうだ、繰間…だったか…お前、中野の手錠の鍵を持ってるんじゃないのか？」

中野の様子を見て思い出したのか、降旗がそう尋ねると、その質問に答える形で繰間が自身に着せられている服をまさぐりはじめる。確かに、ズボンの左ポケットから小さな鍵が出て来た。

念の為に繰間は自分の手首に掛けられている手錠にその鍵を突っ込もうとするが、当然の様に開かない。

やはりこの鍵は中野の手錠を開ける為の物なのだろう。

「俺のポケットにも入ってたぞ！ 鍵だ！！」 箱の中から中野が2人に鍵を見せる。

今すぐお互いの鍵を交換してこの手錠を外したいが、それをするにはまず箱を開ける必要がある。

命 血 赤。

黒板の上のタイマーが時間を告げる。
残り13分42秒。

17・報復

2ヶ月前。

チツ、と舌を打って、池神は血塗れの床に寝そべる明石を見下ろした。

首の肉が抉り取られ、皮一枚で繋がっている状態の明石の顔は、開いた瞳孔を天井に向けながら絶命していた。

更にその死体は顎から鼻にかけてが焼け爛れている。

「死体の腐乱状態から見て…恐らく死後二週間は経過しているものと思われます」

ボサボサに伸びきった黒い髪を掻き耂る池神に、湊谷は現場の状況を説明していく。

「今回の現場は廃材処理の一ノ瀬工場^{イチノセ}。犬の散歩をさせていた付近の住人が腐乱臭に気付き死体を発見したとの事で、やはり今回も…“ゲーム”が行われていた模様です」

ゲームのルールは床に書かれていた。

“ 見つける ”。

・ 明石 登の首には小型の爆弾を装着させてもらった。

・ その爆弾を解除する方法は停止スイッチを押す事だけ。

・ 停止スイッチはこの工場内のどこかに1つだけ隠されている。

・ 制限時間は3分。それまでに解除出来なかった場合、キミの首は木っ端微塵だ。

脱落者となるか、そうなるまいか。報復を受け入れる。

「 明石は16日前から忽然と失踪していて、警察に搜索依頼が提出されていました。それと、住人が死体を発見した時は工場の扉は開いていたのですが、明石が脱出していない事を考えると今回もこの部屋は密室だったのだと思われます 」

湊谷の搜索報告をする中、それを聞いているのか聞いていないのか、池神は工場内をキョロキョロと見回している。

天井にライトは設置されてはいるが、いかんせん光が弱く、工場

は薄暗さを保っている。

部屋の隅には古びた木材や鉄骨。

いずれも埃に包まれている事から、長い間使われていなかったという事が良く分かる。

その池神の隣で現場状況をメモしていた湊谷が思い出した様に口を開けた。

「この工場の設計者は名前通り一ノ瀬という男らしいんですが、どうやらこの工場自体は最近別の人間に貸していたらしいんですよ」

その説明を受けて、池神は

「へー、誰に？」

と興味無さげに聞き返す。

「確か…日頸^{ひくび} 握雄^{あくお}って名前だそうで、電話越しに工場の使用許可のやり取りをしたらしいです。

一ノ瀬は契約金が振り込まれていた時点ですんなりと工場を渡したそうで。

それで、この事件が発生してから大急ぎで日頸という人物を捜査したのですが、電話番号は繋がらなくなっているうえに一ノ瀬に教えていた住所もデタラメ。契約金を振り込んだ時の痕跡を辿るうにも、幾つもの銀行を経由している為に足がつかなくなっていて…。

恐らく日頸 握雄という名前も偽名かと思われます」

「ふーん、計画犯罪ってわけね」

今度は床のルールを見つめながら湊谷に合いの手を打っていた池

神は、

「報復を受け入れろ…か」

と続けて呟き、目を細めた。

刻々と時間が過ぎて行く中、教室は重苦しい沈黙に支配されていた。

繰間は、降旗も…もちろん中野も、一様に知恵を振り絞ろうと脳内に考えを張り巡らせるが、その考えは一向に答えへと辿り着かない。

命 血 赤

30枚のカードキー。

2つのピースは全く噛み合わず、手がかりどころか足がかりさえも頭に浮かんでこない。

まさに絶望的な状況で、繰間は歯を悔い締めながら

「嫌だ」

と繰り返すと、カードのばらまかれた学習机にそのまま突っ伏してしまった。

その隣で立ち尽くす降旗は、自身の左手に掛けられた手錠を見つめながら

「誰だ？」

と、ぼやく様に呟き、眉間にシワを寄せる。

―誰だ？

その疑問は、繰間でも、中野でも、自分に対しての物でも無い。目が覚める前、暗闇の中に浮かんだ謎の言葉に対しての物だった。

―だってあれには、彼が、狩屋が―

再度脳裏をよぎったその言葉に、降旗は右手で頭を抑えながら押し出す様な声を出した。

「狩屋って、誰だ？」

18・肖像（前編）

狩屋 真一。

その名を知る者は極めて少人数で、一般の人間は耳にしたことも無いであろう。

しかし、それは彼が特別な人間だったからという訳では無い。

彼は至って普通な人間で、面白ければ腹の底から笑い、ストレスが溜まれば怒り、映画を観て頬を濡らす事もあれば、心靈番組を見て夜にトイレに行けなくなったりもする、とても単純な人柄をしていた。

だがしかし、そんな彼の野望を知っていた人間は、実は誰も居ない。

「全人類の夢が今日叶う」

と、誇らしげに胸をはった彼の本当の目的を、誰も分かっていないのだ。

誰一人も。

「さて、良い加減に答えて貰いましょうか」

2ヶ月前、湊谷は良く通る声で池神を問い詰めた。

「どうして狩屋 真一をそこまで追いかけるのか。狩屋がこの猟奇殺人に関与しているという根拠を、私はまだ聞いてません」

警視庁捜査一課の喫煙所で、机を通してその言葉を受ける池神は煙草を加えたまま苦笑する。

「別に大した理由じゃねーよ。強いて言うなら…勘かな」

「嘘です。勘だけで人を殺人鬼にするなんて警部らしからぬ行為ですよ」

煙に慣れていない湊谷は、喫煙所に充満する肺に悪い空気を吸って軽く咳き込む。

「あれ？ 無茶しない方が良くないのかなー？」

その様子を見て池神は皮肉る口振りを見せるが、

「話を逸らさないで下さい」

と湊谷はそれを一蹴した。

しばしの沈黙の後、池神は口に含んだ煙を盛大に吐き出してから観念した素振りで湊谷に告げる。

「…証拠が揃ってる訳じゃねーんだ。それは明石にも言った。狩屋が今回の事件に関与してる可能性が有るつてのは、100%じゃない。だから、お前以外には捜査の協力を頼んでないし、頼めな

い」

そう前置きしてから本題に入る池神のいつもと違う真剣な顔に、湊谷も思わず心構える。

「8年前だったか。“狩屋が天才として噂になった”ってのは前に話したと思うが、その噂には奇妙なおまけまでくっついてたんだ」

「奇妙なおまけ？」

「そう。狩屋が警察から必要とされる理由はプログラミングの技術だけじゃない、他の何かだ…ってな」

吸いかけの煙草を灰皿に押し付ける池神に、

「どういうことですか？」

と疑問の言葉を投げかける湊谷。
その様子を一見してから、池神は眉を潜めて語り出した。

「昔の事だ。まだ狩屋が警視庁に居た頃、さっきも言った通り狩屋への奇妙な噂が流されていた。

当時はどうでもいいと思って気にも止めなかったが…忘年会で酔った上司が口を滑らせたんだ。

狩屋が警察にとって重要人物である理由は、その卓越したプログラミング技術だけでは無いってな。

まさに噂通りだった訳だ。あの時は思わず笑ったね」

「…何だったんですか、その…本当の理由は…」

「…あいつの創り出したプログラムだよ。
どんな物的証拠よりも絶対的に優位で正確な、犯行の痕跡を証明できる物」

一息置いて、池神は再び開口する。

「“記憶”だ。狩屋の作ったそれは、人間の記憶を蹂躪する事が出来る悪魔的プログラム。確か名前は…メモリーズ・ノヴァ…」

「な、あ…皐間、中野。お前ら、何かこう…変な物を見なかったか？」

降旗は頭を抑えながら失意の2人に問い掛ける。

「変な物？」

中野は力無く返答し、皐間も机から顔を上げる。
その様子を見てから、降旗は続けた。

「ああ、夢みたいなものだ。奴も言ってただろ？
“その間に見る夢を忘れるな”」

「お前は、何か見たのか？」

繰間が目を細める。

「俺は…声を聞いた。自分の声だ。“花火”がどうか“狩屋”がどうか…」

「狩屋？」

降旗の答えに反応を見せたのは中野だった。

少しだけ間を取って箱の中から再び声を上げた中野は、

「狩屋の血で花火を打ち上げる…」

矢継ぎ早にそう呟いた。

19・肖像（後編）

「狩屋の血で花火が打ち上がる。でも、誰も狩屋の死に気付かない」
箱の中から聞こえる中野のこもる声を受けて、降旗はそれを繰り返した。

「狩屋の死に気付かない？ それがお前の聞いた“声”か？」

中野はコクンと首を縦に振った。

それはつまり、己は狩屋を知っているという意味で、同時に狩屋は既に死んでいるという事になる。

しかしその理論を覆す様に、

「でも、狩屋が誰なのかは…覚えてない」

と中野は付け足した。

降旗にも当然の如くそんな人間の記憶は無かったが、
― “誰か” に消されたのだろう。―
と、不安と疑問と焦燥の中で漠然とそう理解する事にした。
考える事を放棄したのだ。

「どうせもう、助からない」

それは紛れも無く降旗の本音であった。

2ヶ月前。

池神の独白に、湊谷は新たな疑問を口にする。

「メモリーズ・ノヴァ…？　それと、今回の事件に何の関係が？」

「…迎已の事件を覚えてるか？　確か…“選ぶゲーム”。奴が最初に起こした事件だ。

そのゲームの資料に入っていたルールの一文に、“キミは覚えていないだろうが”とあった。

最初、棺に入れられているのは迎已自身が覚えていない人間なのかと思ったが、その次の文には“キミの大切な人”とあったし、その3人は迎已に対して殺意を抱く程の恨みを持っていた…」「迎已は記憶を消されていた…と？　でもそれだけで狩屋を首謀者と決めつけるのは…」

「それだけじゃない。狩屋が勤めていた電気会社の元社員、更に社長までもが殺されて、現場に残されたメッセージは“報復を受け入れろ”。

迎已の事件が発覚したのも、狩屋が失踪してから3ヶ月後だ」

「何かの偶然という可能性も…」

「ああ、そうかも知れない。だけど偶然にしちゃ出来過ぎてる。狩屋が一連の殺人事件に関与している気がしてならないんだ」

言葉にどんどん凄みが増していき、最後に池神が結論を述べると、対照的に暫しの沈黙が訪れる。

「…嫌な予感がするんだ。確証が出てきたら上司に掛け合うつもりでいる。だからこの事件…徹底的に調べるぜ」

最後にそう付け加えた池神に、納得した様子の湊谷は無言で頷いた。

制限時間、残り7分24秒。

絶望的な雰囲気支配されつつある教室に、打撃音が響く。

中野が内部から箱を蹴ったのである。

しかしその程度の衝撃で箱が壊れる筈も無く、残るのは更なる虚無感のみ。

「ああああ…出…せ…出してくれっ!!」

両の握り拳を箱の側面にぶつけて、中野は崩れ落ちる。

その様子を見かねてか、降旗は顔を俯けた。

「いやいや、なんで？」

降旗の頭に疑念が浮かぶ。

「なんで他人事みてえに中野の恐怖を達観してんだ？ 箱を開けなきゃ俺たちも死ぬだろう？」

「自分の状況を認めたく無いってかよ……くそっ」

「記憶なんて無い癖して、生存本能は消えないのか」

混乱はマイナスな思考を降旗の頭に植え付ける。

「なんだよそりゃ」

そう言葉を吐き捨ててから脱力すると、

「嫌だ」

相も変わらない繰間の声が聞こえてくる。

「ああやって状況を理解している繰間の方が立派ってか？ 全
く、繰間の言う通りだ。嫌になる。」

嫌になる。

嫌に――

「生きるぞ…!!」

沈みかけた降旗を正気に繋ぎ止めたのは、その一言だった。

立ち上がったのは、繰間。

右手の手錠に一度だけ視線を送って、再び口を開く。

「…死ぬなんて、嫌だろ？」

20・奮起

やれやれだ。

追い詰められて、絶望してから希望を見出す？

下らない。下らなさ過ぎるぜ。

そんなんじゃないだろ。

意味の無い感動なんざ誰もいらない。

もっと狂気に満ちた、最悪の混沌を…。

あーあ、失望したぜ、繰間

お前も結局、人間…か。

——監視者、狩屋はそう思った。

「死ぬなんて嫌だね。俺は生きる」

真っ直ぐな繰間の視線が、降旗を見通す。

「もういいんだよ、どうせ助からない」

「違う！！ちゃんとルール見たのかよ！！このゲームは、成功さえすれば、全員生き残る事が出来る物なんだっ！」

激を飛ばす繰間に、降旗は目を細めて歯を食いしやる。

「だったら……！！ 分かったってーのか！？ この意味不明なクイズの答がよ！」

「分かんねーよ！ だから考えようってんだろ！！ 3人も居るんだ、出来るさ！ 絶対だ！！ そうだろ、中野？」

崩れ落ちていた中野は、突然浴びせられた励ましにふと顔を上げる。

「諦めてんなよ」

凜々しい声。

「絶対生き残るぞ」

やさしい声。

「俺は誰が死ぬのも見たく無いんだ。死ぬなんて、嫌だから」

—— 分からない。

その時の、中野の胸中は、繰間にも分かっていない。

だけど、中野は笑った。ふ、と顔を綻ばせて、その涙塗れのだらしない顔で笑顔を作った。

だからとりあえず、その笑顔の意味を、繰間は「希望を持ってくれた」と思う事にした。

「降旗、お前の目、死んでるぞ」

繰間は真っ直ぐな眼のまま降旗の方へと向き直る。

「大丈夫だ。今から、探す。この部屋を隈無く搜索するんだ。動いてたらちよつとは楽になると思うぜ？」

だから協力してくれよ。

そう言いたげに笑う繰間に、言葉を詰まらせた降旗は呆れた様な表情を見せた。

「大した奴だよ。この状況で……」

そして決意を新たにする。
生き残る、と。

——繰間が元からこれ程の熱血漢だったのかと言われると、その答はNOになるだろう。

記憶を無くす、ということとはつまり、自身が今まで積み重ねて来た経験を喪失することになり、イコールそれは“人格”を無くすという事に繋がる。

吊られるゲームで記憶が復活した鳴嶋の人相が変化したのも、それが原因だ。

この状況で人格を失った繰間が、最終的にどういった結果を残すのか——というのはさて置いて。

その繰間を、中野は箱の内部から見つめていた。

笑っているのか、哀しんでいるのか、良く分からない表情を浮かべて、ついさつき自分を励まし、奮い立たせてくれた繰間を傍観する中野は、

「繰間…お前は……」

小さくそう呟いた。

その虫の様な声は誰の耳に届く事も無く、箱の壁にぶつかって掻き消えた。

20・奮起（後書き）

繰間「お米食べろ」

21・正解

「これからキミ達の、希薄且つ軽薄な信頼という物を試させて貰おう。」

残り時間2分14秒。

繰間の提案で、ロッカーの中、掃除箱、黒板のチョーク箱に及ぶまで隈無く教室を探し回ったが、残った物といえば疲労感で、増した物は絶望感。

制限時間が0へと近づけば近づく程、タイマーが時間を刻む音がいよいよ大きくなっていく様な錯覚を受ける。

「何も無かったぞ…次は何をするんだ？」

焦りに拍車のかかった降旗が急かす様に繰間を問い詰める。

「命 血 …」

その言葉を受けて自問を繰り返す。

命 血 赤。

赤？

赤だから赤のカード？ いやいやそんなに単純で良いのか？

大体、赤のカードだとしても1〜10の内どれを選べば良い？
正解カードは2枚。2枚。

——答の見えない疑問は、浮かび上がっては消え、また浮上しては消滅していく。

悩み続ける繰間を不安と疑心の眼で見つめる中野は、相変わらず良く分からない表情を浮かべたまま。

「大丈夫だ。絶対に見つけ出す」

誰に何かを言われた訳でも無いのに、繰間は皆を安心させようと独り言の様に呟いた。

大丈夫。

その言葉は根拠など一欠片も混入していない紛う事なき強がりだった。

その証拠に、何一つとして提案も無いまま、残り時間は1分を迎えてしまう。

55秒、50秒、45、40。

自身の寿命を刻むそのカウントダウンに、繰間の額を汗が伝った時だった。

「何だこれ？」

絶望の教室に、そんな降旗の声が響いたのは。

繰間の首が、中野の視線が、一様にそこへ向かう。

――降旗が握っていたのは、紙切れ。

「ポケットに入ってた」

一言、震える声を出す降旗の手から、繰間がその紙を奪い取る。

『私の言葉を信じる』

鉛筆書きの黒い文字で、そこにはそう書かれていた。

「私の…言葉？」

繰間の脳内を思考が駆け巡る。

私？ 私って誰？ “誰か”？

“誰か”の言葉を信じる？

“誰か”は何を言っていた？

――纏まる事と、変わる事。

時には…時には――

繰間は顔を上げた。

瞬間、そのキツと引きつった顔を戻す事もせずに黒板へとダッシュする。

手錠で繋がった降旗が、不意に引つ張られて少しバランスを崩すが、お構いなし。

そして黒板に辿り着いた繰間は息もつかずにチョークを握り、一心不乱に何かを書き殴り始めた。

残り時間、18秒。

そして、そして。

「降旗あつ!! 赤のカードつ!! 赤のカードの…1と2だ
つ!!」

繰間の大声が、教室に木霊した。

22・誤解

「早くっ！！ 赤の1と2だっ！！ 早くしてくれ！！」

繰間の大声はそう続いた。

残り時間15秒。

繰間の導き出したその答が、正解か誤解か。

そんな判断を迫られるよりも、繰間の声の迫力に押し切られた降旗は、手錠が掛かったままの左手を底いながら学習机に向かい、カードの束から赤いカードキーのNo.1とNo.2を抜き取った。

残り10秒。

降旗が箱へと駆け出し、繋がれている繰間もその妨げにならぬ様に降旗と同様足を踏み出す。

残り9秒。

降旗が黒く光るカードリーダーに赤の1を読み込ませる。箱は反応無し。

残り7秒。

続いて赤の2もリード。

箱に反応——あり。

残り6秒。

箱の下部に取り付けられた小さなガラスの小窓が開く。
しかし喜ぶ暇も無く、繰間がその小窓から箱の内部へと手錠の鍵を投げ込んだ。

残り4秒。

それに反応して、中野も小窓から繰間へ鍵を受け渡す。

残り3秒。

降旗と中野が鍵を手錠に差込み、回す。

―手錠から金属音がして、手錠から抜いた鍵を繰間に渡す。

残り1秒。

鍵を回し、その手錠からも金属音が発せられたのを耳にした繰間は胸をなでおろす。

残り0秒。

鍵が回された手錠は刃が反応する事なく、ただ沈黙している。
荒い息が続く教室で、最初に喉を鳴らしたのは繰間だった。

「勝ったぞ…！」

その昂揚した声が、歓声の合図。

嬉々とした降旗の叫びが部屋に響き渡る。

制限時間を過ぎても生きている。それはつまりゲームに勝利したのだと、降旗はそう考えたからだ。

まだ手首から外れていない凶器の事など頭から飛ばして、ただ生存への喜びを噛みしめる。

「なんで赤の1と2だったんだ？　あの状況の何処でそれに気付いた？」

その余韻を噛み締めてから、降旗は繰間に当然の疑問を投げ渡した。

「ああ、降旗のポケットに入ってた、“私の言葉を信じろ”ってメモ。

それをポケットに入れたのは、間違い無く“誰か”だろ？」

そう言って繰間はメモを皆に掲げる。

「そうになると、“誰か”の言葉つてのはゲームの開始直前に言われたあの意味不明な台詞つてことになる訳でだな」

「纏まる事と変わる事…遡れば道は拓かれるってあれか？」

降旗が真新しい記憶を脳内から引っ張り出すと、繰間はそれに頷いてから黒板の方まで歩いていく。

引っ張られる降旗も、それに続く。

「そう。1つ1つ解読していくと、纏まる事…つまり、命血赤の言葉を全てまとめて」

命血赤

「次に、これを“変える”から、ひらがなか、カタカナに変換するんだと考えた。でも、ひらがなカタカナだと次の段階でどうしても詰まっちゃうんだ。つまりここでの正解は、ローマ字だ」

黒板にチヨークを打ちつける音が響く。

命血赤↓INOTITIAKA

「そして最後に、こいつを“遡る”…つまり逆から読むと…」

命血赤↓INOTITIAKA↓AKAITITONI

「ああっ！」

降旗が感嘆の声を上げ、それに被さる様に繰間が笑った。

「くく、AKAITITONI、赤1と2だっ！」

手に付着したチヨークの粉をはたき落とす繰間は、そのまま続ける。

「“誰か”も言ってたろ？ “信頼”を試す…って。まさかそれが奴の言葉を信じてるって意味だとはギリギリまで気づかなかったよ」

俺たちの勝ちだ。

最後にそう付け加えた繰間を、降旗は素直に認めた。

凄い奴だ。あの状況下、たった数秒でそれだけの思考を働かせる事が出来るなど、もはや人間の業では無い…と。

しかし、その賞賛は中野の声に止められる事になる。

「違う。誤解だ、繰間。」

箱の中から繰間と降旗に向けられたのは、悲しい眼。

「…何言ってるんだ？ もうゲームは終わったんだ。俺たちは勝ったんだよ」

諭す様な口調の繰間を、きっぱりと否定して中野が言い放つ。

「違う…ゲームはまだ終わって無いんだよ」

23・逆転

「…何言ってんだ？」

言葉を詰まらせるのは瞬間。

対する中野は、手錠のかかっていない左手をおもむろにジャージのポケットへと突っ込む。

「一番最初に目が覚めたのは俺だったろ？　その時、箱の中にコイツがあっただ」

引き抜いた左手が握りしめていたのは、小型のカセットテープ。

“お前の立場について”

鉛筆が何かでそう書かれた白い紙が貼られた銀色のそれには、きちんとテープが入れている。

「何だよそれ…」

降旗が声を漏らすと同時に、中野がカセットテープの再生ボタンを押した。

モザイクのかかった気味の悪い“誰か”の言葉が、箱の中からくぐもって聞こえてくる。

《おはよう、中野 太一。まずは今から始まるゲームのルールを確認して貰おうか。その中からでも黒板は見えるハズだ》

カセットから数秒の沈黙。

《さて、状況が理解出来たか？　このゲーム中、お前は外へと出ら

れない。しかしゲームを成立させる為とはいえ、箱の中に閉じこめられたままというのは、お前にとって少し不利になるだろう。だから私は、お前に立場逆転のチャンスを与えよう」

“誰か”の声は弾む。

《箱の側面を見る。右側面には赤いスイッチ、左側面には青いスイッチが用意してある》

ドクン、と繰間の心臓が脈を打つ。

——ゲーム中に使われる事の無かった、赤と青のスイッチ。気にも止めなかったが、まさか——

《もしもキミ達3人がこの“開けるゲーム”に勝利した場合、その時点から第2ラウンドが開始される。簡単な話だ。赤のスイッチを押した場合、そこで眠っている繰間と、降旗の手錠が作動し、キミは箱の中から解放される。青のスイッチはその逆だ。キミの手錠が作動し、繰間と降旗は手錠から解放される》

降旗の顔が見る見る青ざめる。

《キミ達の信頼はどれ程の物なのか。試させて貰おう》

中野の親指が停止ボタンを押し、“誰か”の声もテープと共に止まる。

その表情はどこか虚ろに。

「聞き終わると同時に繰間が目を覚ましたから、慌ててポケットの中に突っ込んだんだ」

「知ってたつてのか！！ 最初っから！？」

中野の独白に、激昂する降旗。そして、その様子を傍観する繰間。時計が針を刻む音に、3人はタイマーが設置されている場所へと視線をやる。

黒板の上。スピーカーの隣で示されているオレンジ色の数字は、5分。

――5分が過ぎるとどうなる？――

全員に浮かんだ疑問。

いや、考えるまでも無い、か。

タイムアップは、つまり死亡を表す。制限時間内に中野がスイッチを押さなかった場合、教室内3人の手錠が作動するのは間違いが無いハズだ。

もっとも、制限時間5分というのは少し多過ぎるように感じる。

普通の人間ならば、それこそ一切の躊躇無く自身を助ける赤のスイッチを押すだろう。5分等いらぬ。1分でも充分だ。

「説得しろってか？」

ぼそりと、誰にも聞こえない程の小さな声で繰間は呟く。

「5分を使って、自分を助けるように説得しろってか？ 中野が死ぬように説得しろってか？ ふざけるな。こんなの後出しじゃんけんだ。聞いてない。聞いてないぞ……」

その呟きは次第に大きく、力強く変化していく。

「結局…誰かが死ななきゃいけない…そんなの…」

嫌だ？

——嫌？

その様子を静かに見守る監視者“狩屋”は、誰にも見られぬ様にふう、と溜め息を漏らし、そして口を開いた。

「第2ラウンド、スタートだ」

23・逆転（後書き）

合宿から還って来やした。

激しい筋肉痛に見舞われてやす。

サロnpasさんお世話になります。

24・幕引

制限時間、残り4分18秒。

頬を伝った冷や汗が木の床に作った黒いシミを見つめながら、降旗は唇ごと歯を食いしばった。

口内に広がる鉄の味と、鈍い痛み。

死にたく無い。

そう思っているのは確かな事だ。しかし、言葉が出て来ない。

今まさに自分を殺そうとしている人間に、何と声をかければ良い？
どんな遺言を残せば良い？

「殺せ」

唐突に後ろから響いたのは、繰間の声。

「赤のスイッチを押せば良いさ。降旗には悪いが、な」

「おいおい、何言ってるんだ？ 俺は死にたくねえぞ」

繰間の死、それはつまり同じ手錠に繋がれた降旗の死にも等しい。降旗が否定するのは当然の事だ。

「…ま、それは中野が決める事だが…俺は自分を『殺せ』って言った訳じゃないぜ」

すべてを悟っていたかの様な繰間の表情に、熱気が戻っていく。

「“誰か”を『殺せ』って言ったんだ」

その言葉に中野の眉がピクリと反応を見せる。

「お前はこのゲームに生き残って、“誰か”を殺して欲しい。敵を討ってくれよ、な。絶対だ」

箱の中で、中野の左手が小刻みに震え出す。

「だから、お前は生きてくれ」

最後に繰間は、笑いながら親指を立てて見せた。

――死に対する恐怖が無い訳ではない。その行為は、繰間に出来る精一杯の強がり。今から自身を殺す中野へ、これから次のゲームへ挑む事になるであろう中野へ対する、最後の思いやりだった。

しかし、その繰間の心中にははつきりとした“諦め”が根付いている。

中野が選択権を握った以上、自分が助かる可能性は無に等しい、と。

復讐。敵討ち。

理屈も根拠も存在しないが、その行為に意味はある。

繰間は最後に、それを望んだ。

降旗も、悟る。

もう逃げ出す事の出来ない、死。

万に一つ、自分が生き残る可能性は無いであろうと言うことを。この状況でようやく悟る。

そして中野へと顔を向けて、自嘲気味に笑みを作った。

「中野。てめえ、しくじったら呪い殺すぞ。“誰か”をぶっ殺せ」

「あ…」

中野は震えた左手をおもむろに持ち上げ、震えた声で詰まる様に言葉を押し出した。

「ごめ…お、ね…」

左手がスイッチに伸びる。

「殺…す」

左手がスイッチにかかる。

「なんて、出来ない」

左手が力を込めた。

「俺、誰…も、殺したく、ねえよ」

左手がスイッチを押す。

左手がスイッチを押した。

左手が、青いスイッチを。

青いスイッチを。

「中野…？」

その行動に、繰間は困惑し、混乱した。

「中野っ？ 何で？」

降旗も繰間と同様、今日の前で起きた矛盾を脳内で処理しきれずに呆然としている。

「俺…」

箱の中から中野の涙声が響き、同時に、その右手にかけられた手錠から規則的な甲高い電子音が発せられる。

青色のスイッチは、中野を殺し、繰間と降旗を解放する物。

「中野っ！！ お前、何で！？」

繰間は箱に張り付く様な形で中野を問い詰める。

両手の平をガラスに打ち付ける。手錠に繋がっている右腕も関係なく、それすらも忘れて。

「お前達が必死でゲームに挑んでる中で、俺はずっと考えてた。俺を助けてくれるのは他ならぬお前らなのに、俺はお前らを殺す事になるかも知れない…」

次第に間隔が狭まって行く電子音を尻目に、中野の独白は続く。

「途中で打ち明けようとしたけど、怖くて、出来なかった。ゲームを諦めて、放棄されるのが、怖くて。出来なかった」

繰間の左手と中野の左手が、箱のガラス越しにピタリと重なった。

「…ごめん、繰間、降旗」

最期にそれだけを呟くと、一瞬だけ電子音が強く響き、そして刃

が飛び出た。

繰間も降旗も声を上げる暇さえ無く、しかし何故かとてもスローモーションに、ゆっくりと鮮血を撒き散らしながら。

中野の手だったそれは、切断された右手首は、やたらと軽々しい、不格好な音をたてて、箱の底面へと落下した。

そして右手を失った中野は、一度だけビクンと身体を震わせると前のめりに倒れ込んだ。

自身が作り上げた血溜まりへ、大袈裟にダイブする。直後に響く、溜め息。

繰間の総ての余力が隠ったその透明な気体と共に、

「あ、あ、あ、あ、あ、あ」

箱に左手を抑えつけたまま、ガクンと膝をつく。

手錠からびー、と機械音が発せられて、同時に繰間と降旗は今日の前で中野を殺戮した凶器から解放される。

「い、や…嫌、だ。嫌だ嫌だ」

押し殺した声の後、自由となった両腕で顔を覆い隠し、その場にうずくまる。

「死んだ、死んだ！？ 死んだっ！！」

「まったく、嫌になるぜ」

頭の内側に、声が響く。

―誰かが死ぬと誰かが不安になるだろう？　でも、誰かを殺さなきゃ俺らは生きていけないんだ―

聞き覚えのある、声が響く。

―忘れんなよ、繰間。お前が持つてるそれは、自分を救う物じゃない。他を殺す物だ―

何故だか覚えている、声が響く。

―さてと、じゃあ行くか。でっかい“花火”を打ち上げに―

記憶は失ったハズなのに、声が響く。

―狩屋には、悪いけど―

「ああああああああっ！　中野、死ぬな、見たくない、死ぬな
！」

脳内にこだまする声なんて無視して、ただ中野の死亡に身を震わせる繰間。

その後ろで、ひくひくと顔を引きつらせる降旗。

恐怖？　絶望？　安堵？　で、その頬は涙に濡れている。

《ゲーム終了です。ゲーム終了です》

今までとは違う、“誰か”の声では無い女のアナウンスがスピーカーから叫喚の教室に侵入する。

《敗者…中野様、手首切断により失血死またはショック死。勝者…

繰間様、降旗様、第2休憩の後、次のゲームへと進んで頂きます》

「畜生めが!!」

そのアナウンスに対して、繰間は怒りをぶちまける。

「中野との、約束だ! “誰か” 知らねえが、お前は、俺が、ぶっ殺す!!」

そして、そう啖呵をきった瞬間、あの嫌な音が2人を襲った。

休憩の終わりを告げた、キーンというあの不気味な音。

その音が耳から2人の脳内に侵入すると、とてつもない不快な感覚に襲われる。

まるで頭の中をぐちゃぐちゃにかき混ぜられる様な、気味の悪い刺激。

やがてそれは、抑えきれない“睡魔”へと変貌する。

「ぐ…あつ…」

降旗が呻き、同時に倒れる。

繰間はまた、ぐるぐると回る頭の中で声を聞いた。

「これは黄村にも言った事だが、焦りは禁物だ。ただどまあ、緊張は大切だと思うぜ」

「誰だ?」

薄れ行く意識の中に響くその声は、明らかに聞いた事のある物。

「繰間、お前の弱さは、その性格だな」

「あ」

そして、思い出した。

黒く塗り潰された視界の中で、その声の主の名前を呼ぶ。

「田所…」

田所、晴広。頭の中の声は、確かに田所のそれである。

田所が、黒幕？ 腹に抱えた一物の疑問——というよりは不安というべきその感情が、今後どう響くのかはまた別の話として、少なくとも。

少なくとも田所は、黒幕では無いだろう。

何故ならたった今から、田所のゲームがスタートしたから。

24・幕引（後書き）

どや顔クイズ編終了

25・発端

「ゴキブリって良く分からないよな」

「……………急に何？」

「だってあれだけの生命力を持っていながら、草履で叩かれたら即死しちゃうんだぜ」

「…まあ…そうだね」

「数万年も姿を変えずに生きていらしいけど、それなら身体を硬くする様な進化をとげりや良いと思うんだが…数万年ありや出来るだろう？」

「…別に硬くなくても困らないからじゃ無い？」

「それだけじゃ無い。奴らは“不快害虫”という屈辱的なレッテルを貼られていてだな。人間に対して特に危害を加える訳じゃあ無いのに、『気持ち悪いから』って理由で害虫扱いされてるんだぜ」

「…じゃあ真一はゴキブリを殺したこと無いの？」

「いいや、あるに決まってるだろ」

「それまたどうして？」

「だって、気持ち悪いじゃん。あいつら」

10ヶ月前か11ヶ月前か、とにかく約1年前の大阪の空港で、

「ほんじゃ、ちょっくら行ってきます」

と、狩屋 真一は何処か落ち着かない様子でそう一礼し、見送りに来ていた人間に背を向ける。

そんな彼を、慌てて止める見送り。

「ちよつと待った、鞆、忘れてるよ」

見送りは床に放置されたままの鞆を拾い上げ、振り向いた彼に手渡した。

「いや、すみません——日頸さん」

日頸。そう呼ばれた見送りから、彼は恥ずかしげに頭を掻きながらその鞆を受け取った。

「うるせー、その名前で呼ぶな」

見送りはそう怒りながらも苦い笑みを浮かべ、続ける。

「ってか、なんでそんなにそわそわしてんの？　ちよつとアメリカに行くくらいで、そんなに緊張する事でもないでしょ」

「いや、それは…あの…」

彼は鞆を肩にかけてから、見送りの問いに少し挙動不審に答える。

「便所行きたいんすよ」

「さっさと行ってこいっ！！」

予想外の言葉に声を荒げた見送りは、彼の頭を小突いて出発を促

す。

「んじゃ、今度こそ行ってきます」

やはりソワソワした様子で早口に挨拶を済ませた後、大きな鞆を肩に担いで彼は飛行機に向かって行った（先にトイレに向かったかも知れない）。

広いロビーに残された見送りは目を細め、居なくなった彼に思いを巡らせた。

明るく、陽気で、脳天気だった彼。そんな彼を慕い、世話を見てきた自分。

彼と暮らした日々が、次々と頭を駆け抜けていく。

まるで一足早い走馬灯の様だ。

しかしそんな彼と別れても、不思議と涙は出なかった。

彼はきっと、また自分に会えると思っっているだろう。

そんな事は、もう無いのに。

「悪いね」

誰も聞いていないのに、ぽつりと呟いたその声は、やっぱり誰にも届く事なく、

「お前には最期まで、生き抜いて欲しかった」

アナウンスにかき消された。

《アメリカ行き政府専用機、間もなく出発となります。お忘れ物の無い様、お気をつけ下さい》

アメリカ。

それから数日後、絶望の中で、狩屋は復讐を決意する。

25・発端（後書き）

田所 晴広
連城 常夜
上岡 洋大
伊吹 蓬香
× 鳴嶋 和彦
三奈門 大樹
繰間 圭一
永羽 敦
× 中野 太一
× 黄村 征一
三笠木 光佑
降旗 真也
× 昼村 京介

次から残酷描写のオンパレードになるので、苦手な方は要注意。

26・鉄板（前書き）

開けるゲームが後半ちょっとダレて来たので、今回のゲームは展開早めを心掛けます。

26・鉄板

この国あ、もう駄目だ。 駄目駄目駄目駄目。

何もかも、駄目。

帰ってこない、返ってこない、還ってこない年金を払う為に働いて。

毎日毎日ブラウン管からは「誠意を持って」とか「全力で」とか、冗談にしか聞こえない馬鹿げた政治家達の声。

もううんざりだ。 駄目なんだよ。

だから募ったんだ。 だから集ったんだ。 同志。

この国を根本からリメイクするという、同じ志しを持った仲間が。

田所は目を覚ますと、重たい頭を抑えながらゆっくりと立ち上がった。 相も変わらず、今自分がどういった状況に陥っているのか全く分からない。

身体の至る所に不自然を感じたので、とりあえず田所は両腕に視線を落とす。

そこには錆の一つも見当たらない真新しい鎖が巻き付いていた。それは胴体も両足も同様、2重に巻き付いており、鎖の先端は自身の後ろ側へと伸びている。

その鎖を目で追いながら、田所は首を後ろへ回す。

壁、というよりは、鉄板と表現した方がしっくりくるであろう物

がそこに佇んでいた。

自分の背中からおよそ50cmほど離れた位置にある、田所の身長より一回り大きい、高さ190cm、幅100cm程度の大きさのその鉄板には5つの小さな穴が空いており、両腕と両足、それと腰から伸びた5本の鎖がその穴にそれぞれ通されている。

しかし、その鉄板の一番恐ろしい部分は、無数に突き立てられた棘であろう。

棘。

その言葉から受けるインパクトは大きくないかも知れないが、鉄板には槍の先端の様な鋭い棘が全面に渡って取り付けられていたのである。

そのおびただしい量の槍の先端が、田所の背中に向かって鉄板に生えている。こんな物が背中に突き立てられたら一溜まりも無いであらう。

田所はその恐怖から目を逸らす様に首を前へ戻すと、次は教室の内部を見渡した。

田所から向かって右側にある廊下側の扉には、掴み取るゲームの時と同じ様な鉄の塊が置かれていて、左側の窓には重々しい鉄格子。

——結局脱出は容易では無いのか、と脱力しかけた瞬間、田所の視界に扉が映りこんだ。

自身の真正面。ロッカーが並んでいるのを見ると、恐らくは教室の後ろ側。

掃除用具入れの隣に、木製の扉が設置されている。その扉には、鉄の塊など置かれていない。鍵もついていない様だ。

あの扉からならば脱出が出来るかも知れない、と単純に考えた訳では無い。ここまで周到な準備をしている犯人が、まさか脱出用の扉を封鎖し忘れるなど、幾ら何でもあり得ない。

しかし、今はその扉以外に手がかりは無さそうだ。

田所はとりあえず両腕と腰の拘束を取っ払うために右腕の鎖を掴むが、そこでようやく鎖には南京錠がかかっているという事実気付く。

それは左の腕も同じで、一重目と二重目を繋ぐ様にかけられたそれは、力ずくでは開けられそうもない。

それなら、と鎖を腕から引っこ抜こうと試みるが、手首の骨が邪魔をして上手く鎖が通らない。腰は腰骨が、足は足首が、いずれも鎖から脱出させまいと田所の邪魔をする。

じゃあどうやって脱出しろって言うんだよ。

頭に浮かんだ当たり前の疑問は、しかし数秒もたたずして解決する事となる。

鍵が落ちていた。

自分の足から50cmあまり離れた場所に、ぽつりと。

―あれが鎖を外す南京錠の鍵、か？ いや、そうに違いない―

もう何も疑わずに、田所は自身の前に放ってあるその鍵へと走り出した。

鎖の所為で上手く走る事は出来ないのでは、と危惧していた田所だったが、何て事はなかった。この鎖、引っ張れば鉄板に空いた穴からいくらかでも出て来る。これなら鍵を取るのも楽勝そうだ。

少し安堵した田所は、何のためらいもなく右足を前に踏み出す。その瞬間だった。

「うあ、何だっ！？ なになに？」

田所のダッシュはその声と共に停止する。しかし、声の主は田所では無い。

「だ、誰か居るのか？」

この部屋に自分以外の人間が居た事に少し驚きつつも、田所は至って冷静にそう問いかけた。

「あんた、その声は確か、田所…か？」

声は鉄板の裏から聞こえてくる。どうやらこの棘だらけの壁の向こう側に居るらしい。

言葉にせず頭の中で状況を把握しつつ、田所はその声の主を判別する。

「三笠木…だな？」

三笠木 みかさき 光佑 こうすけ 田所の耳に届いた声は、頭にバンダナを巻いていたあの青年の物だ。

三笠木、お前今、動ける状況か？

田所がそう尋ねようと喉に力を込めた時、

《おはよう、不運な囚人達よ》

と、“誰か”の声が降りかかった。

「おい、これ何がどうなってるんだよ！！ 説明しろっ！！」

悠長な“誰か”の言葉に激昂する三笠木。

《まあ、落ち着け。短気は損気とは良く言った物だ》

それを宥める“誰か”に田所は只ならぬ違和感を覚える。が、その理由は解らない。

《お前達2人は今日招かれた13人のプレイヤーの中で、私が最も忌み嫌う人間だ。自分がここに居る理由をキミ達は“覚えていない”だろうが、それは確かに存在する。このゲームに参加する人間は、何も無作為に選ばれた物では無いのだからな》

静かに言葉を連ねる“誰か”は、ゆつくりと。
自身の口からゲームのルールを説明し始めた。

殺し回るゲーム

“ 殺し回る ”

- ・プレイヤーは生を“ 掴み取った ” 12名の内5名。

- ・まず田所と三笠木のゲームを行い、勝者は槍の鉄板から解放される。

- ・解放された勝者は掃除用具入れの隣にある扉から次の部屋へ向かい、そこに幽閉されている次のプレイヤーと新たなゲームをするもらう。

- ・この方法を繰り返し、ゲームは全部で5つ。

- ・どんな手を使おうと構わない。全てのゲームに生き残り、最後の部屋に置かれた勝利スイッチを押した物を勝者とする。

さあ、脱落者は誰か。

27・失踪（前書き）

御陰様でPVアクセスが10,000を突破致しました。有り難う御座います。

次の目標は50,000！

しかしそこに辿り着く前には絶対にこの話終わってと思うんだ。
r z

27・失踪

時間は大きく動いて、一週間前。

池神はデスクにばらまかれた資料を一束に纏めると、大きな背伸びを1つして見せた。窓にはもう太陽の光が差し込み始めている。

ワーカー電気の社長、明石が死んでから、それに関連すると思われる事件は何1つも起こっていない。

事件が起きないに越した事は無いのだが、しかしそれに比例する様に捜査もまた息詰まっていたのだった。

「ちよつとは休まないと、身体壊しちゃいますよ」

一睡もしてないでしょう。

と付け加えて、湊谷も池神の隣に腰を下ろした。

「しかし、急に止まりましたね。この犯行」

先ほど池神が束ねた資料を手にとって、ポツリと呟く湊谷に、

「もしかしたら」

と池神は口を開き、続ける。

「止まったんじゃないくて、終わったのかも知れない」

「…明石が最後の標的だったのかも、ということですか？」

「ああ、動機は相変わらずサッパリだがな」

両手の平を上に向けて首を振る池神に、湊谷は首をすくめると、その時。

「池神警部、湊谷警部補！！」

扉が開ききるのも待たずに大声を上げ、若い男が部屋へと突入してくる。

かなり急いでやって来た様子で、肩は上下し、鼻筋には汗が流れている。

「おー、室伏、^{むろぶし}どうしたそんなに血相変えて」

池神がその只ならぬ雰囲気^{きふく}に声をかけると、室伏と呼ばれた若い刑事は乱れた呼吸を整えながら2人にこう伝えた。

「田所 晴広と三笠木 光佑が…失踪しました…！！」

「失踪ッ！？」

その報告に、池神と湊谷は声を揃えて立ち上がる。

—— 田所と、三笠木。彼らの失踪に警察が焦燥したのは、彼らが警察関係の人間だったからでは無い。

むしろ、逆。

田所 晴広と三笠木 光佑は、現在指名手配中の犯罪者である。

「それから、精神病棟からも——」

続く室伏の言葉に、池神は再び目を見開いた。

「奴も、居なくなつたと、報告が――」

——鎖に繋がれた三笠木は、“誰か”の告げたゲームルールに納得がいけないと言いたげに開口する。

「ちょっと待て、それは、つまり、このゲームに勝ったとしても、後4つもゲームが残ってるって事かよ……？」

《ああ、そういうことだ。中々察しがいいな、三笠木 光佑》

説明されたルールは、つまり、ゲームは5つも用意されているという事。

全てをクリアし、最後の部屋に辿り着かなくてはならない、という事。

やはり、理解出来ない。

どれだけ頭で理解しようとも、何故自分がこんな事をしなければならぬのか、記憶に無いからだ。

「1つ、聞きたい。こんなことをする理由——動機は何だ？」

《最初の休憩時間に言ったハズだ。その様な質問に答える事は出来ない。まあ、答えるつもりは無い、といった分が的を射ているかな》

その答になっていない答に、田所は何かを確信した様子を見せた。

「おい！　んで、今から何すりゃ良いんだよっ」

鉄板の向こう側から、田所に届く三笠木の声は、わずかながら震

えている。

《キミ達是不運だ、と、さっき私は告げた訳だが——申し訳無い、それは訂正しよう》

少しの間が空き、再び“誰か”は話し出す。

《不運では、無い。自業自得だ！ キミ達の過去の行動が、今の状況…窮地を創り出している…！！》

少しずつ力んで行く“誰か”の言葉に、田所も、三笠木も言い知れぬ迫力を感じる。

《だから、今からキミ達が始める、この“殺し回るゲーム”は…最悪だ！！ 他のプレイヤーがチャレンジしているゲームとは比べ物にもならないっ！！ なぜなら、私はキミ達の事を憎んでいるから！ 恨んでいるから！ 今日集めたプレイヤー達の中で、キミ達2人に対する復讐心が最も強いからだ…！！》

「つぎっけんな！！ だったら教える！ 俺がお前に何をした！？ それを忘れさせたのは、お前だろうが！」

《だったら教える、か。支離滅裂、滅茶苦茶だな。言っただろう？ ゲームに生き残り罪を思い出せと。ならば勝てばいい。生き残ればいいんだ。そしたら嫌でも思い出す、キミ達の愚かな原罪をね》

——この国のリメイク。

田所が、遠い意識の中で聞いたのはそんな言葉だった。

―だから集ったんだ、同志、仲間を―

その“この国のリメイク”が“誰か”の動機、目的と関係があるのなら、それはつまり自分には同志、仲間が居たという事になる。

―田所は直ぐに理解した。今回集められた記憶喪失者達は、只単に“誰か”の復讐対象という訳では無いということに。つまり、同志なのだ。

田所が、三笠木を含めた記憶喪失者達と仲間だった、という事実。それが一体どんな仲間で、日本をリメイクする為に何をしたのか、というのは相変わらず田所の記憶にありはしないのだが。

《さて、それでは本題だ。キミ達に今か、行つて貰うゲーム。状況からもう気付いているかも知れないが、実に単純なルールだ》

先程までの迫力はどこへ消えたのか、一変して愉快的な口調の“誰か”は喉を鳴らして笑った後、再び息を吸った。

《そうだな、名付けるなら、走る。“走るゲーム”だ》

最初の部屋 - 走る -

・プレイヤーは田所 晴広と三笠木 光佑。

・2人はお互いに背を向けて立っている状態で、その間には厚い鉄壁を設置した（鉄壁の両面は全体に無数の剣山が突き立っている）。

・2人の右腕左腕、右脚左脚、そして腰の計5箇所は鎖で巻き付けられ、その鎖は南京錠で固定されている。

・更に2人の鎖は鉄壁に空けた穴を通して繋がっており、片方が前へ進むには片方が後ろへと退かなければならない様になっている。

・いち早く目の前に置かれた鍵を手に入れ、先に鎖から脱出した人間が勝者。

・尚、鎖の全長は100cmで、プレイヤーから鍵までの距離は50cmとなっている。

さあ、脱落者は…？

29・刺殺（前編）

《以上でルールの説明は終了だ。身なり構わず生きる事に執着しろ》
ぶつん、と電子音が教室に木霊して、そして風の音が聞こえる様な沈黙が訪れる。

その中で、

「え…？ 鎖が、繋がってる？」

怪訝そうな声を上げたのは、三笠木だった。
そして三笠木は声に出さぬ様に思考する。

―鎖の全長が1m？ って事は、俺と田所で半分ずつだから、今俺の所にある鎖は50cmってこつたる…いや、最初田所に引っ張られたつばいからもうちよい短いかも………引っ張られた？―

そこで、思考は終わる。気付く。このゲームの意味に。
そして、それは田所も同じ。

ゲームの意図を理解した2人がとった行動は1つ。鍵に向かって走る事であった。

鎖の全長は1m。田所から鍵までの距離は50cm。そして、田所と鉄板の距離は1mを半分で割った50cm。

つまり、鉄板から鍵までの総合距離は50+50で100cmと
いうことになる。

ここで肝心になって来るのが、田所が動ける範囲である。

田所の行動範囲は、鎖を全て引っ張ったとして1m。

鉄壁から鍵までの距離と、田所の行動範囲は同数になるのである。
無論、三笠木の方でも、それらの距離と範囲は同じになる。

——それがどういう事かは、2人の行動を見れば一目瞭然である。
ろっ。

「くっそがつ……！！ 何だよこれっ……！！」

行動範囲が鍵に届く限界の距離ならば、つまり。

片方が鍵を取る為には片方が鉄板に張り付かなければならないのだ。

——あの、剣山に。

「うがああ……！！ あああっ……！！」

目の前の鍵を手に入れなければならない。大量の槍先から逃れなければならない。走らなければならない。走らなければならない。

もう限界まで鎖は張っているにも関わらず、無理やり前へと進もうとしている田所の足首に激痛が走る。

しかし抵抗を止めてしまえば、鎖は鉄壁を通して三笠木に引っ張られ、自分は——。

「うあああっ……！！」

部屋に響く三笠木の雄叫び。

向こうに引っ張られるのを阻止するためにギリギリと踏ん張りながら、声を上げ、

「死にたくないっ死にたくないっ死にたくないっ」

食いしばった歯の隙間から讒言（さんごん）の様に叫ぶ。

当然その叫び声は、鉄板の向こう、田所の鼓膜を揺らす。

あのひよる長い身体の何処にこんな馬鹿力が備わっているのか。そう思わずには居られない程の怪力が、田所を徐々に徐々に剣山へと近付けていく。

「ぐ…うつ…！」

必死に抵抗する田所だが、遂には鎖が食い込んだ足首から血が飛び散り、一層力が抜けて行く。

——力が？

田所の頭に、ある策が浮かび上がる。いや、実際には策とも言えぬ程に陳腐な考え。

「だが、さっきの三笠木の叫び声を聞く限り、あいつは今かなり力んでる。おそらく、何も考えてない。只単純に鍵だけを見ているハズだ——」

自身の考えを肯定するそんな思考に後押しされ、田所はその策を実行に移した。

同時に、転ぶ。

「う…おおお！？」

そんな声が無様な上げて、不格好に転ぶ。

——転んだのは、両方。

三笠木も田所も、両者共に転倒。

しかし、いち早く先に立ち上がったのは、田所の方だった。

田所が実行した作戦とは、誰にでも出来る、超がつく程に簡単なものであった。

脱力する。

ただ、それだけである。
しかしその効果は^{てきめん}覲面。

鍵を手に入れる為に全力を尽くしていた三笠木は、田所の力に負けずと踏ん張っていた。

そんな中で田所が全身を力を抜けば、三笠木は勢い余って前方へ崩れ落ちる、という寸法である。

尤も、三笠木が前に転んだ所為で鎖が引つ張られ、田所も三笠木同様転んでしまったのだが。

しかし状況を把握している田所は三笠木よりも素早く転倒に対応できる。

対して、何がどうなっているのか全く理解できない三笠木は立ち上がるどころの話では無い。

「俺の…勝ちだアっ!!」

そんな三笠木を尻目に田所は全力で前へと疾走する。

「な、なん——!!」

突然の事の連続に、何の抵抗も出来ない三笠木はその態勢まま鉄板へと吸い込まれる様に引きずられていく。

「や…めろっ!! 待って!! 待ってくれっ!!」

木の床に爪を立ててそれを拒絶するが、最早そんな物は何の抵抗にもならず。

無情にも、非情にも、三笠木の足の平は槍へと突き刺された。

「うああああ！！ あ、あつ」

途端、三笠木の絶叫が響く。

「くたばれ……！！ 頼むっ！！ くたばれ……！！」

その悲鳴を掻き消す様な大声を上げながら、更に前へ進む力を強める田所。

三笠木はあまりの痛みに抵抗する力等失っていて、田所により胴体と両腕の鎖が引つ張られ、その身体が持ち上がる。

「があああああ！！」

そしてそのまま鎖は引つ張られ、槍は腰に突き刺さる。

それでも田所は力を緩める事無く、ただひたすらに前のめりに体重をかける。

田所が右腕を前に振るうと、三笠木の左腕が剣山に引き寄せられ、左腕を振るえば右腕から鮮血が飛び散る。

「うああああ、あが、ぐ……う……」

次第に三笠木の悲鳴がかすれ始め、やがてそれはゴボゴボとした泡と空気の混じった音へと変わっていった。

——喉に刺さった、か。

そう確認してから、ようやく田所は全身の力を抜いた。

向こう側からの反応は、無い。

田所が後ろを振り向くと、鎖を通す為の5つの穴から血が滴り落ちて
ちている。

それを目視した後、次は首を下へと向ける。

最初の時点で足元から50cm先にあった鍵に向かって、たった
今50cm前進して来たのだ。1つの命を犠牲にして。たどり着い
た、自分の命……。

——だが。

「あ、ああっ!?!」

田所の安堵は束の間に終わる。

もう、10cm。

あと、10cm。

まだ、10cm。

南京錠の鍵は、自分の足元からまだ10cm以上離れた場所に放
つてあったのだ。

当然、三笠木の死体は既に限界まで鉄壁に突き刺さっている。

全長1m鎖はこれ以上伸びない為、しゃがむ事は出来ない。

つまり、田所の手は、鍵に、

「届かねええええエエエっ!!」

30・刺殺（後編）

「なん…でっ！！　なんで届かないんだよっ！！　くそ、くそっ！！」

田所は一度後退し、鎖を弛ませてから膝を折り、そして這いつくばる。

その状態のまま鍵に向かって右手を精一杯伸ばすが、やはり届かない。

10cmか、15cmか。

具体的な長さは解らないが、指先が鍵に当たらない。

かと言ってこれ以上鎖は伸びそうも無い。どう足掻いても絶望。どうしろという？

「おい、テメエっ！！　見てんだろ！！　応えろ！　答えろっ！　鎖の長さが足りねえ！　鍵の距離が長すぎるっ！！　アクシデントだろ、これ！！」

冷や汗と脂汗を振りまきながら、慌てふためく田所は“誰か”に説明を訴える。

《アクシデントじゃ、無い》

返ってきた“誰か”の答えは続く。

《鎖の長さはぴったり1m、鉄壁から鍵までの距離はぴったり50cm。間違いは無い。だからキミのそれは、想定内の出来事だ。アクシデントじゃ無い》

「ふざけんな！！　ぴつたりだと！？　そうじゃ無えから今こうな
ってんだろぅがっ！！」

《私は嘘は言わない。嘘はアンフェア…！！　真実だ、鎖の長さも、
鍵までの距離も。何かを見落としているのは、キミ。私の言葉を聞
かないのも、キミ》

“誰か”の台詞は重々しく田所の思考を促す。

「見落としてる…？　何をだ、何を？　鍵までの距離か？　鎖の長
さ？」

届かない鍵に向かって伸ばし続ける右腕を見つめながら、田所は
独り言の様に呟き続ける。

「ぴつたり50cm…ぴつたり1m………あ」

間の抜けた声の後、ハッと目を見開いた田所はゆっくりと立ち上
がる。

「二重！！　二重かつ…！！」

そして右腕の鎖を鷲掴みにして、そう吐き捨てた。

二重。

自身の腕、脚、腰には、それぞれ鎖が“二重”に巻き付けられて
いる。対して鎖の長さはぴつたり1m。

つまりそれは、腕の太さが10cmだった場合、二重に巻き付け
られた鎖は10cm分短くなってしまう、という事になるのだ。

無論、腰回りの太さも脚の太さも、その鎖の長さに影響している。

「んだよ、それよお！！ どうしろってんだ、どうしろって!？」

掴んだままの鎖をむやみやたらに引つ張りながら、田所の脳はぐるぐると回る。

―何か、答があるハズだ。

足りない鎖を伸ばす様な、何か鍵を手に入れる為の方法。

“誰か”はこの状況はアクシデントじゃ無いと言っていた。なら、アクシデントじゃ無いのなら、脱出する方法があるハズ…何かを見落としているんだ俺は。誰かの言葉を聞いていないんだ。

思い出せっ！ “誰か”は何て言っていた？―

「み…」

上体を起こした田所が取った行動は、自身の衣服を脱ぐことだった。

“身なり構わず、生きる事に執着しろ”

そんな“誰か”の言葉が真つ先に頭に飛び込んできたからである。とは言え、腕と脚、腰が鎖で固定されている為に上下の服を脱ぐ事はままならない。

ならば、使えるそれは1つ。靴下だ。一足分の長さが25、6cmの黒い靴下。

その靴下を二足纏めて団子にし、それを引つ掛けて鍵を手繰り寄せる。

これならば、確実に鍵を手に入れる事が出来る。

「だったら、だったら」

その事にようやく気付いて、田所は押し殺す様な声を上げる。

「助かったじゃねえか！！ 2人揃って、鍵を手に入れる事も可能

だっ たっ て事だろう？」

靴下の指先の方を握りしめ、団子になっている部分を鍵に引っかけようと二度三度それを振るうと、やがて鍵は上手い具合に自身の元へと寄つて来る。

その様子を見ながら、這いつくばったまま田所は首を振った。

——いやいや、何言つてんだ。“誰か”の言葉が、“誰か”の言う通りに真実なんだったら、12人の中から生き残れるのは1人だけなんだぞ？ 後悔なんて捨てちまえ！ 生きる事だけ。考えるのは、それだけで良い——

そうこうしている内に右腕で掴み取った鍵を、迷い無く田所は左腕の南京錠へと差し込んだ。

凍てついた金属音と共にフック状の突起が飛び出し、固定されていた鎖が緩くなると、田所は左腕を鎖から引き抜き、今度は右腕の施錠を外す。

そのまま腰、右脚、左脚の順番で拘束を解除した田所は、とりあえず一時的に危機から脱出。勝利した。

しかし、まだそれだけ。

“誰か”の台詞を借りるなら、田所は生存をただけであり、まだ生還を果たしていない。

——不意に、扉のロックが外れる音がした。

掃除用具入れの隣に置かれた木造の扉。

鍵はついていないと思っていたが、電子ロックか何かだろうか。

何にせよその扉が開放されたという事は、“誰か”からの「入れ」という無言の圧力。

しかしその前に、まずはこの部屋を調べる必要があると、田所は窓へと近づいた。

海が、広がっている。

だがそれは綺麗な海では無く、深い青のそれには激しい白の波が立ち、荒れ狂うという表現がぴったりと当てはまる。

窓の直ぐ下は足の掛け場も無い断崖絶壁。落ちてしまえば億に一つも助からないだろう。

「ここは何処だ？ 海？」

“誰か”は、ここは戦時中に兵士を収容した宿舎だと言っていた。そんな場所に見当もつかないが、人目につかない場所であるということは確かであろう。

いずれにせよ、脱出の方法を打ち砕かれた田所はちつと舌を打って180度向き直る。

——鮮血に塗れた三笠木の身体は肢体を不自然に折り曲げ、絶命していた。

恐怖に引きつった眼は大きく見開かれ、黒い血の滴り落ちる口からは槍が飛び出している。

田所はその凄惨な様子にこみ上げる胃液を抑えながら、しかし目を逸らさずに言葉を漏らした。

「俺は、死なない」

再び足を動かし始めた田所は、迷うこと無く掃除用具入れの隣の扉へと一直線に進み、ドアノブに手をかける。

その木造の扉は、力をこめると何の抵抗も無く簡単に開いた。木の軋む嫌な音が耳を突き刺すが、そんな物はお構いなしだ。

《さて、突然だが重要な報告だ。心して聞いてくれ、田所 晴広、

三奈門 大樹》

扉が閉まるのも待たずに聞こえてきたのは、“誰か”の声だった。

部屋の中央には質素なパイプ椅子が置かれていて、その上に、黒の短髪に小柄な男、三奈門が座っている。

笑っているのか、泣いているのか、怒っているのか。どれともとれる様に喉を鳴らす三奈門からは、何か異質な雰囲気漂っているが、そんな事はお構いなしに“誰か”は続ける。

《キミ達の身体の中には、悪魔が住み着いているんだ。食べ物を消化する胃袋の中に、決して消えない魔物が居る》

愉快痛快と言いたげなその口調に殺意を覚えながらも、田所は、三奈門も、その言葉に一樣に耳を傾ける。

《今から始まるゲームは、天使と同居するその悪魔を先に退治した方が勝ちという、これまた極めて単純明快なルールだ。“奪うゲーム”なんて名前は、どうだろう》

第二の部屋　・奪う・

・プレイヤーは田所　晴広と三奈門　大樹。

・今回のゲームを行う5人の胃の中には、直径5cmの小型の爆弾が埋め込まれている（爆発した場合、胃周辺の重要器官が破壊され間違いなく即死する）。

・爆弾には時間制限があり、田所が扉を開けた瞬間から秒読みが開始されている。制限時間は20分。

・この爆弾を解除するのは最後の部屋となり、今現在爆弾を解除する方法は、無い。

・勝利条件は、相手の爆弾を起爆させる事。

・爆弾の起爆スイッチは部屋のとある場所に2つ隠されている（赤いスイッチは田所の爆弾を、青いスイッチは三奈門の爆弾を爆発させる）。

・ゲームをクリアしなければ、次の部屋へ通じる扉は開かない。

・尚、爆弾が爆発した時の対象者の生死は問わない。

さあ、脱落者は…？

31・爆殺（前編）

なるほど、それなら確かに一網打尽だ。この腐敗を叩き治せる、良いアイデア……。当面の問題は、どうやって“それ”を仕掛けるか、だな。

《特別ヒントだ。教室の後ろ側に並んだロッカーのどれかに、身を守る物が入っている。無論、1つだけだ》

それを最後に、“誰か”の声はあっさりと途切れた。

「奪う……？」

同時に、田所は覚えた違和感をそのまま口にする。相手——三奈門の胃の中にある爆弾を起爆させる為のスイッチを、この教室の中から見つける。このゲームの概要はこんなものだろう。

しかし、それならば、“奪う”はおかしい。“探す”や“見つける”が妥当であろう。

「何を奪うってんだ？」

二言目が田所の口からこぼれた瞬間、三奈門が突然立ち上がった。同時に、甲高い金属音が教室に木霊する。

その金属音の正体は、パイプ椅子の後ろに落ちていた手錠。恐らく、田所が教室に入ってくるまで部屋を探索できない様に両足を拘

束されていたのだろう。

が、田所がそれに気を奪われた隙に、立ち上がった三奈門は一気に教室後方のロッカーへと走り出した。そして、5つ並んだ縦に長い灰色の箱を、右から順番に開けていく。

それを見てから“誰か”の出した特別ヒント、『ロッカーに身を守る物を隠した』を思い出し、田所も三奈門同様にロッカーへ向かった。左端から順に開いていく。

「ああ！？　なんだよこれっ！」

2つめの扉に手をかけた時、三奈門の驚愕が耳へと伝わり、それに応じて田所の視線が三奈門の手に握られている物へと向けられる。鋭く光る、少し長めの銀色の刃に、木製の柄。それはまさしく、果物ナイフ。5つのロッカーの真ん中に、その凶器が隠されていたのだ。

「こんなもんで、どうしろってーんだよ！」

右手に握ったナイフを凝視しながら、三奈門は唇を噛みしめる。言うまでもなく、三奈門が、田所が期待していたのは、スイッチである。ロッカーの中に勝負を決するスイッチが入っていれば、ものの1分で勝負はついたであろう。しかし、それでは無かった。

田所は右端から2つ目まで、三奈門は左端から真ん中までのロッカーを漁ったが、その凶器以外に出てきた物は無い。

「ちょっと待てよ、だって、それじゃあ」

教室に在る物といえば、5つのロッカーを除けば、後はパイプ椅子と例の果物ナイフ。それから、2人のプレイヤーのみ。

「スイッチは、どこ？」

力無く呟いた後、田所は辺りを見回すが、やはり何も無い。等間隔に敷かれた木の板で構成された色味の無い床に、相変わらずバカでかい鉄塊が置かれた教室の入り口。荒れ狂う海を眺める事ができる窓。

そして、恐らく次の部屋へ続いているのであろう木製の扉がロッカーの右隣に取り付けられている位である。その扉はロックがかかっているらしく、力いっぱい押しても引いても微動だにしなかった。どれをとつても、スイッチを隠せそうな場所とは思えない。

チツと舌を鳴らしてから座り込むも、田所の頭にスイッチの在処等浮かんでくる筈も無く、ふと、もう1度部屋全体を見回してみる。

「タイマーが、無い」

制限時間は10分。しかし、それを知らせるタイマーが、この教室には設置されていないのだ。

最悪。

“誰か”が口にした言葉が脳裏をよぎる。そう、田所と三笠木は、実はこのゲームを最悪のポジションでスタートしている。

この部屋は、5つある部屋の内の2つ目の部屋である。三奈門のスタートは、この2つ目の部屋だ。つまり、最初のゲームから始まる田所は5つのゲームをクリアしなければならないのに対して、三奈門は4つでOKという事になる。

つまり3つ目の部屋からスタートのプレイヤーは、3回のクリアで、4つ目の部屋からのプレイヤーは、2回のクリアで最後の部屋までを攻略できるのだ。

この不条理を、“誰か”は当然の報いと言っていたが……。

「くそ、思い出せん！俺は一体、何をした？」

全く働かない脳みそに若干の苛立ちを覚えながらも、田所はゲームの事から逸脱していた思考を元へと戻した、その時。

田所の目が捉えたのは、自身にナイフの刃を向けて突進して来る三奈門だった。

「なっ！？」

突然の事に動揺しながらも田所は何とか立ち上がり、その凶刃を間一髪のところでは避けると、三奈門から目を離さない様に数歩後ろへと下がった。

「てめ、いきなり何すんだっ！！」

鬼気迫る表情の三奈門にも、田所は何ら臆する事無く凄みを聞かせる。

そしてその問いに、三奈門はナイフを田所に向けたまま答えを返した。

「何って決まってるんだろ、分かったんだよ、スイッチの、天使の在処がな——！！」

「分かった？ 何処だっ何処にあるっ！？」

「いやいや、言う訳ねーだろ、そんなの」

頬を伝う脂汗もそのままに、田所は自分に切っ先を向けている三奈門から目を離さず、ひたすらに思考を働かせる。

「いいから、さっさとくたばれよ、なあ、なあっ」

そんな田所の事などまるで関係が無い様に、三奈門は妖しく光る銀色の刃を振りかざして獲物へと距離を詰めていく。

田所の頭には、幾つかの疑問が浮かんでいる。

なぜ自分を直接殺そうと企む？ スイッチを押す事がゲームの勝利条件の筈だ。対戦相手を殺害したところで、それはクリアにはならないだろう。ましてや、人殺しなんていう行為は、幾ら追い詰められていても、やはりやりたくない物だ。スイッチを見つけ、押せば、直接的に手を下さずとも間接的に胃の爆弾がプレイヤーを殺してくれる。

ならば。

ならば、こんな事をする理由が、田所には解らない。

——自分を殺す事が、重要？——

ふと、疑問の中から疑念が芽生える。

——そりゃつまり、自分を殺さなけりゃ、スイッチは手に入らないっつー事で——

「うあああッ!!」

そこまで考えた所で、再び三奈門の突撃。田所の腹部を狙う三奈門は、一心不乱にナイフを振り回し、標的へと素早く接近する。

そして、その腕が一直線に振り下ろされた瞬間、田所は左側へと身を流し、勢い良く空振った三奈門の右手首を掴み取った。

「掴まえたぞコノヤロー」

余裕の笑みを浮かべた田所は、三奈門の握られた手から果物ナイフを奪い取った。

「なるほど、な」

そして、その笑顔を崩さぬままに

「俺も解っちまったぜ、スイッチの……在処」

と、したり顔でそのナイフを左手から右手へと持ち替える。

“身を守る物”を己が手から失った三奈門は、対照的に焦燥した様子で田所に尋ねる。

「……どこで、どうして？」

「どうしてもこうしても、お前が取った不自然な行動が、全てを物語ってるじゃねーか」

田所は余裕の笑みを不敵なものへと一変させると、手ぶらになった左手の親指を立て、その先を自身の胸の中央へと突き指した。

「自身を殺す“爆弾”を悪魔とするなら、自身を救う“スイッチ”はまさに天使だ……悪魔と天使は同居する。つまりスイッチは……爆弾と同じ、胃の中だ」

32・爆殺（後編）

「さて、だから、お前には、さ」

右手のナイフを眼前にまで持ち上げて、少しの戸惑い——躊躇を見せながらも、田所はそれを振り払う様に強く言い放った。

「俺が生きる為に、死んで貰う……！！」

「だ、れが、死ぬかよっ！！　んなとこでよおっ！！」

冷や汗を撒き散らしながら吠えた三奈門は、そのまま田所に向かって駆け出した。

その眼中には田所の持つナイフだけが映し出されている。爆弾のスイッチを、取り出す為のナイフ。相手を殺し、身を守る為の、ナイフ。

「う」

何かを叫ぼうとした三奈門の声は、田所の当て身により制止される。しかしそれでも三奈門は止まらずに、ひたすら田所の右手へと、同じく右手を伸ばし続ける。

「う、ば……！　奪うっ！　返せ！！　生き残るのは！！　俺っ」

滅裂と言葉を吐き出す三奈門の右手を払いのけ、田所は一步だけ右足を踏み込んだ。ナイフを奪おうとギリギリまで接近していた三奈門の懐の中へと潜り込んだ田所は、一瞬。一瞬だけ、強く目をつぶった。

そして、ねじ込む。

左胸、心臓に向かって、思い切り、ナイフを突き刺した。

「あ……っ！！」

声にならない三奈門の呻きが田所の鼓膜を揺さぶるが、右手の力を緩めたりはしない。何か暖かい液体が大量に傷口から溢れ出し、両者を赤色に染めていく。

「俺、は……！ あ、あ」

田所は三奈門と目を合わさない様にひたすらナイフを心臓へと抉り込んだ。

やがて、三奈門がずしりと重たくなつたのを感じると、ようやく田所はその手を放した。一步退がると、絶命した三奈門がずるずると床に崩れ落ち、ものの数秒でその場に血だまりを作り上げる。

その肉塊に、哀れむ様な、哀しむ様な、曖昧な笑みを向けて、田所は小さく呟いた。

「俺は、あ、謝らない、ぞ」

そして、うつむけに倒れた三奈門のそれをひっくり返すと、田所は左胸に刺さったままのナイフを抜き取った。鮮血が飛び散る。

「……っぞ、くぞ、く」

赤黒く染まった木製の柄を両腕で握った田所は、目に涙を浮かべながらそれを三奈門の胸部へと振り下ろした。

肉をえぐる嫌な感触が金属越しに手のひらへと伝わり、田所の口内に胃酸がこみ上げる。

「どっだっ胃、胃、どっ？ どっ、だ」

謔言の様に繰り返しながら、何度も、何度も、何度も。

ひたすら筋を裂き、肉を断ち、骨を避け、ようやくそれらしき臓器が見えたのは、5、6分が過ぎた頃だった。

もう迷い等一切見せずに刃を胃に食い込ませると、ぱっくりと裂かれたそれからは赤みを帯びた液体が少しだけ漏れ、異様な臭いが田所の鼻を突く。

片目を瞑ったまま、左手を胃の中へと突っ込むと、中から球体状の小さな鉄の塊が出て来た。恐らく、というよりは、間違いなく、これが、悪魔。爆弾であろう。

そこに同居している天使は、それから直ぐに見つかった。青いスイッチ。三奈門の爆弾を起爆する、天使。

その突起に親指を掛けると、田所は両足に力を込めて立ち上がり、三奈門の死体から少し離れる。

「終わりだ……！！」

ボツ、と言う小さな爆発音は、肉片が飛び散る瑞々しい音に掻き消された。途端に、扉のロックが解除される。

出来るだけ、田所は三奈門を見ない様にしてその場を立ち去った。何も、感じないように。感じてしまわないように。

——冷徹に、冷酷に、冷静に、なれ。

《さて、それでは次のゲームだ》

扉を開けて、そして閉じた瞬間、鳴り響いたとある音を聞き、田所は猛烈に扉を閉じたしまった事を後悔した。しかし、もう既に入ってきた扉は頑なに閉ざされ、開かない。

「あああああ」

「驚いたか？ 怖いだろう？ しかし、恐れる事はない。大丈夫だ、勝てば良い。勝てば、逃れられる。この恐怖からも、な」

「あああああっ！！」

部屋の真ん中には、ガラスか何かの、仕切り。向こう側に行けない様に、こちら側に来れない様に、部屋を2つに分けている、仕切りだ。

その透明な壁の向こう側に居るのは、メガネの男、ながばね永羽あつし敦。田所と同じく驚愕の表情を浮かべている。理由は、明白だ。

「天井が、お、降りて、下りてっ！！」

赤色のスイッチが取り付けられた天井が、ゆっくり、ゆっくり、下がってくる。下へ、下へ。

《冷静になれ。そうすると見えてくる。散りばめられた不自然に気付き、その意味を理解した人間が、勝者だ。いいか、曖昧な言葉には、裏がある。 “迫るゲーム”——スタート》

第三の部屋 - 迫る -

・プレイヤーは田所 晴広と永羽 敦。

・部屋の中央には巨大な防弾ガラスを仕切りとして設置し、2人を隔離させて貰った。

・ゲーム開始と共に、天井が徐々に降下してくる（尚、仕切りより手前側の天井と奥側の天井は別物である）。

・降下を止める方法は、存在しない。ただ、天井に設置したスイッチを押すことで、次の部屋へと通じる扉のロックが解除される（扉、スイッチは、手前側、奥側とにそれぞれ1つずつ設置されている）。

・どちらかのプレイヤーがスイッチを押した時点で、もう一方のプレイヤーの側にあるスイッチは反応しなくなる。

・天井の高さは2m50cmである。

さあ、脱落者は…？

33・庄殺（前編）

《起爆までの制限時間は、後16分38秒だ》

爆弾を停止させるのは、最後の部屋。つまり後16分以内に最後の部屋に辿り着かないといけない。とは言え、残る部屋は最後を含めても後3つ。何かが無い限り余裕だろう。それよりも、

「ふ、ざけ……」

田所は抑えようの無い感情に言葉を碎きながら、天井を見上げる。何か重々しい音が2人の不安を高める様に鳴り響き、そして部屋全体が僅かに揺れていることを足の平から伝わる振動が教えている。

少しずつ、しかし着実と下方へと向かうその分厚い壁は、恐らく3分もしない内に床へと辿り着くであろう。

まさしく恐怖的なそのシチュエーションの中で、しかし田所は恐怖らしき感情は覚えていなかった。

田所の体格は、ガラスを通して見る永羽のそれよりも明らかに大きい。ならば、焦る必要は無い。何もせずとも、いずれ降りてくる天井のスイッチを押してしまえば、田所の勝ち。それだけのゲームだ。

そして当然と言えば当然、永羽もそれに気付いている。早くも突きつけられた身長差に、汗を垂らし、顔を歪め、部屋中を探っている。

しかし、部屋には開かない扉以外には何も無く、永羽の身長を補助出来そうな者は絶無。

「まてまてまてまて、なん、っで……！！」

そんな状況の中で、上から迫り来る壁を見上げながら絶句する永羽に、田所はふと違和感を覚えた。

——やさしく、ないか？——

田所にとっては、難易度が低い。

永羽にとっては、難易度が高い。

この圧倒的な違いは、アンフェア以外の何物でもないであろう。

だが、実質問題なのはアンフェアとかそういう物ではない。

“誰か”は、田所と三笠木に特大な恨みを抱いていると言っていた。現に田所はこのゲーム中、常に不利な立場でゲームに挑まされているでは無いか。

——ふと見上げると、天井はもう元の位置から30cm程度、降りてきている。もう少し降下すれば、手を伸ばせば届く範囲にまで天井は達するだろう。

「ぐ……」

釈然としない感覚を胸中に抱きながら、それを取り払う様に赤いスイッチへと手を伸ばす田所。

後、少し。少しで、届く、届く。

「ああ！！ くっそが、なんだよそれよおっ！！」

ガラスを通して永羽の声が田所の耳へと侵入する。その、時。

「ぐあっ！！」

そんな声と共に、突然田所の腕がビクンと折れ曲がり、同時に苦痛の表情を浮かべたまま田所は崩れ落ちた。

その光景を横目に見ていた永羽は、一瞬何が何やら分からない顔をしていたが、やがて気付く。

「腕、を……吊った？」

その疑問は一瞬にして確信へと変化し、そしてそれは驚喜へと繋がった。

右腕を吊り、その衝撃で尻餅をついた田所。対し、後10秒もすれば、天井のスイッチは永羽にも届く範囲まで下がってくる。

「よしっ！！　よしっ」

齒を見せて永羽は笑うが、当然、数秒を置いて我に帰った田所も残った左腕を使って立ち上がる。吊ったと思われる右腕をかばいながら、田所は天井に向けて左腕を伸ばした。

ぽーん、と、軽快な音が緊迫感に満ちた部屋へと響き渡る。

——スイッチを、押したのは。

「不運、だったな……田所オ……！！」

永羽、淳だった。

刹那の早さで、永羽が上回った。スイッチを押す、タイミングを。一方の田所は永羽に背を向けているため、その表情は掴めない。

「恨むなら、土壇場で事故った自分の右腕を恨めよ！！　なあ、ええ？」

半ば見下す様にほくそ笑んだ永羽は、安堵に満ちた声のまま、依然として降下を止めない天井からさっさと逃れるために扉へと手をかける。

——ついさつき、永羽は天井のスイッチを押した。それは間違いない。

そしてスイッチを押したのだから、次の部屋への扉は開く。それも間違いはない。

ない、ハズだった。

「あ、れ……？」

永羽の鼻筋を、冷や汗が流れる。

同時に、メガネの奥の小さな瞳が、カツと見開いた。右腕に力を込めて、もう一度、ノブを回してみる。

「いやいや、なん、で？」

もう一度。

「おかしいおかしい、まてまてまてまて」

もう一回。

「何でだ何でだ何でだ何でだ、ひ、ひっ」

ドアは、押しても引いても、開かない。

「ひら、か……開かなっ……い」

その漠然とした絶望に、永羽が声を枯らした瞬間、田所は肩を震わせた。

「ふ、はは、『残念だったな』、だってえ？ そっくり、そのまま、

お返しするぜ、その言葉っ！！」

永羽の方へと振り返った田所は、引きつる様に、笑っていた。

「お前の負けだ、永羽！！」

34・庄殺（後編）

「何でだア！！ 何で開かない！？ 俺は、押したぞっスイッチ！
！ 田所よりも、早く、押した！！ なのに、なんで、なんで」

半狂乱の永羽は、余裕の笑みを浮かべる田所へと視線を向けながらひたすらドアノブを回し続ける。

無論、ガチャガチャと虚しい音が鳴るばかりで扉は微動すらせず
にその場に佇んでいる。

今、自身に何が起こり、そして何が起ころうとしているのか、そんな事等は全くもって脳内に無い永羽を放って、田所は自分の扉へと歩いて行った。

ノブに手をかけて、力を込める。

すると、呆気なく、軽々しく、扉は開いた。その弾みで、部屋にはギシギシと嫌な音が響く。

「……んでっ！！ な、ん……！！」

ガラスの奥の、最早言葉を口にするのもままならない永羽に、田所は冷たい目を向けてその部屋を後にした。

「あ」

一人になった永羽は、一転して静かに首を上を持ち上げた。
迫り来る、天井、止まらない、止まらない、天井。

「うあああああああっ！！」

——ゲームが開始された瞬間から、田所は圧倒的な不自然を感じ取っていた。“誰か”は、田所は常に不利な立場にある、と言って置きながら、今回のゲームは明らかに田所の有利な状況下で開始された。

“誰か”曰わく「嘘はアンフェア」。

つまり、この違和感、不自然は、“誰か”の故意によるものである、ということになる。そこに、“誰か”からのヒント、『曖昧な言葉には、裏がある』を足すと、答はおのずと浮かび上がる。

・降下を止める方法は、存在しない。ただ、天井のスイッチを押すことで、扉のロックが解除される。

このルールには、“天井のスイッチを押すことで、どちらの扉のロックが解除されるのか”は、言及されていない。

——つまり、逆なのだ。スイッチと、扉の関係が。田所側のスイッチを押せば、永羽側の扉が開く様になり、永羽側のスイッチを押せば、田所側の扉が開く様になる。

プレイヤーは、天井のスイッチを押せば自分側の扉が開くのだ、と思い込み、そして結果的に相手の扉を開ける事になる。

永羽よりも体格の大きい田所は、“誰か”の言葉の真意に気付かなければ、永羽よりも先にスイッチを押し、更にさわざわざ自分から永羽の扉を解放し、そして天井に潰される事になる。

結局、田所が、不利な状況から開始されていたゲームだったのだ。尤も、それに気付いた田所は、変に怪しまれない様に腕が吊ったフリをし、永羽に先にスイッチを押させた訳だが、

「う、ああああっ！！ 開けよ、く、あ、開け、開け、開いてくれエー！！」

そんな事を知る余地も無い永羽は、自身に迫るその脅威から何とか逃れようと、ひたすらに扉を叩く。

が、鉄で造られた重々しい扉がその程度で開く訳も無く。
やがて、永羽の身長に、天井が達する。

「ぐっ、う……」

頭頂部に触れた固い、堅いその感触に、永羽は多量の汗を流しながら床に膝をつく。

しかし、それでも直ぐにまた天井はやって来る。永羽、今度は座り込む。ドアノブを破壊し、また天井が頭に触れる。とうとう仰向けに寝転ぶ。天井が、来る。

「ぐ、うう、あああああ」

そこまで来て、ようやく、永羽は感じた。
死、その、リアルな感覚、感触を。

「うあああ、あっ、ぐあああ！！」

眼前に迫る天井を何とか支えようと、永羽は両手を伸ばす。しかし、既に限界。

別の耳から聞くと恐らく快音だろう、骨の碎ける音が辺りに響いた。同時に、鮮血が飛び散る。曲がった骨が皮膚を突き破り、その赤まみれの白いラインが顔をのぞかせた。

「う、お、お！ おお！！ おあああああ……」

天井は永羽の顔にピタリと重なり、永羽の声を封じる。そして、ゆっくり、ゆっくり、その身体を、砕き、潰していった。

《まさかキミが生き残るとは、少し予想外だったな。田所 晴広。
まあ、それはさておき、ここまで来たキミにご褒美を与えよう》

田所が扉を閉めると同時に、“誰か”の声が鳴り響いた。
その教室には、真ん中に机が1つ置いてあり、2つの椅子が添えられている。その内の1つに、まん丸太った体型が印象的な、上岡 洋大が腰掛けていた。しかし、まだ目を覚ましていない。眠っている様子だ。

そして、その机の上には、2つ並べてティーカップが置かれていた。中にそそがれたコーヒーの匂いが、辺りに漂っている。

《ご褒美だ。好きな方を飲むと良い。とはいえ、これもゲームだ。
褒美を受け取るのなら、リスクは払わなければならない》

ティーカップへと近づく田所に、“誰か”は笑った。

《“飲むゲーム”、スタート》

第四の部屋 - 飲む -

・プレイヤーは田所 晴広と上岡 洋大。

・部屋の中央にティーカップを2つ用意した（2つ共コーヒーが並々注がれている）。

・プレイヤー2人にはそれぞれどちらかを選び、飲んで貰う。

・2人両方がコーヒーを飲んだ瞬間、次の部屋への扉が開かれる。

・コーヒーを破棄する等の行為は認められない。部屋を出るためには必ずコーヒーを飲まなくてはならない。

・尚、2つのカップの内どちらか1つに致死量を遙かに上回る量のニコチン毒を混ぜておいた。

さあ、脱落者は……？

35・毒殺（前編）

ちよつとだけ気になるんだ。あいつが、2人居た気がするんだ。嘘じゃない。そう、確か中央病院の中だった。居たんだ、見たんだよ。

——笑ってたんだ。同じ顔で、狩屋が。

《爆弾起爆までの制限時間は、後11分30秒だ。ちなみに、そこで寝ている上岡 洋大は、どっちのカップに毒が入れられているかを知っているぞ》

「は、はあ!？」

《そのカップに毒を入れる記憶とこのゲームのルールを、寝ている間に脳内へ入れておいた。そいつは、起きたら真っ先に毒の入っていないカップを飲むだろうなあ》

突然の宣告に、田所はこれでもかと云う程に目を剥き、口を開ける。

《後、3分程度だ。上岡 洋大が目覚めますまで、3分》

一瞬、強めの電子音が辺りに響いて“誰か”の声は途切れた。

「それって……つまり……」

つまり、上岡が目覚めますまでのたった3分で、どちらのコーヒ

―を飲むか決断しろと言っているに他ならない。

“誰か”の言葉を探ってみるも、今度ばかりはヒントになりそうな物は無い。

そもそも、上岡がどちらのコーヒーに毒を入れられているのか知っている、というのは、どの範囲までを指しているのか、田所には分からない。

仮に、右側のコーヒーに毒が入れられているとしよう。そして上岡に教えられているコーヒーの情報が、『毒入りコーヒーは右側』というものだけならば、ティーカップの位置を左右逆に置き換えるだけで解決するであろう。

しかし、もしもそれ以外なら。例えば、ティーカップについた小さな傷や、シミの様な物で毒入りコーヒーを判断していたのなら、田所にはお手上げた。

ティーカップの中身を入れ替える、という手も有るが、それは実行出来ない。空のティーカップが1つ無いと、中身を入れ替える事は不可能だ。

「――……いや、待て」

瞬間、田所の脳裏にとある出来事が駆け抜けた。数秒の沈黙を終えてから、ふと顔を上げる。

そしておもむろに右側のコーヒーを持ち上げると、依然夢の中の上岡に向けて、確信的な笑みをこぼした。

「……上岡、か」

そして数分が経過し、ゆっくりと上岡は目を覚ました。

しばらく辺りを拳動不審に見回した後音を立てて立ち上がると、窓へと向かい、その風景を確認した。やはり、断崖。逃げられない。それを悟ると、上岡は振り返り様にテーブルを黙視する。自分の座っていたイスの向かい側に、田所が姿勢よく座っている。

そして、その机の上には、ティーカップが2つ。コーヒーはまだ両方満たされている。

何故か記憶の隅に残っているこのゲームのルールに不信感を覚えながらも、上岡はニヤリと不気味な笑顔を作った。

——知っている。

どちらのコーヒーに、毒が入っているか、上岡は知っている。この“飲むゲーム”のルールと、それからその答その物を。

——右だ。右。ティーカップの側面に付けられた、引つかき傷。良く注目してみないと、気付かない。それくらい小さな傷。毒は、右側のコーヒーに注がれている！——

上岡は内心勝ち誇りながらも、その油断、余裕を悟られぬ様に用心しつつ、ゆっくりと今し方自分が寝ていたイスへと巨体をおろした。

毒の在処に、田所はまだ気付いていない。

36・毒殺（後編）

上岡が、今まさにティーカップへと手を延ばす、その機を見計らった一瞬。時間にしてみれば数秒にも満たない、そんな刹那に、相手の出鼻を挫く絶妙なタイミングで田所は行動した。

「ああ？」

その突然の出来事に、上岡は気の抜けた声を上げる。

「お前、さ。知ってるんだって？ どっちが毒入りなのかを。じゃ、色々考えるのもそろそろメンドクサくなってきたし、直接聞いてみようじゃないか」

田所の実行した策は、もはや策と呼べる物かどうか疑問に陥るほどに単純な物だった。

ティーカップを、2つとも取り上げる。

ただ、それだけである。上岡にティーカップを触られないように、2つのティーカップを両手に持ち、自身の胸の前まで持つてくる。

「さあ、教えてくれよ。どっちが毒入り？」

「ほ、ほざくなー!!」

毒入りは右側だと、上岡は知っている。しかし、いくらそれを知っていようと、これは“飲むゲーム”。飲めなければ、意味は無い。逆に考えれば——飲ませなければ良いのだ。

「おいおまえ、何を考えてるっ」

上岡に睨みを効かせながら、上岡は焦った様子も見せずに田所へと問いかける。

「こんな事をして、どうにかなると思っているのか？ お、俺がそのコーヒーを飲めなくなつたからといって、お前に毒入りコーヒーがどつちなのか分かるって訳じゃないんだぞ。睨み合つたまま時間を潰していくつもりか？」

上岡の指摘は正しい。確かに、この行動は田所にとって有利に働くものではない。上岡は答を知り、田所は知らない。そんな現状をずるずると引き延ばしているだけにしか、上岡の目には映らないだろう。

そう、上岡の目には。

「べつに、無意味かどうかはそのうち分かるさ」

しかし対する田所はあっさりと、その質問の答を受け流す。涼しい顔で。

「ちっ」

その態度に、上岡への苛立ちはさらに高まっていく。

——何だ、あの余裕は、その正体は？ この行動の意味は？ 理由は？ 最初は質問責めでもして、俺がボロを出すのを待とうとでも考えているのかと思つたが、そんな様子は無い。だとしたら、何？——

疑念がぐるぐると頭を交差する中で、上岡はぐつと歯を食いしはる。

その様子を、じっと、じっくり、田所は観察していた。まっすぐ

に上岡を射抜くその視線は、何かを望んでいる。

——さあ、早く、早くっ——

吊り上がりそうになる口の端を必死に抑えて、田所は両手に持つティーカップを握り直した。

相変わらず、上岡にその行動の意図は読めない。

——時間を稼いでいる？ いや、違う。時間を稼いだとして、メリットは無い。とにかく、右側のコーヒーを、早く、飲まないと。どうやって飲む？ 力づく？ いや、危険が大きい。どうする、どうする——

結論に行き着かない思考に、上岡の焦りは風船の様に膨張していく。

「く……」

その焦りが、上岡の“それ”を引き出した。

カリカリと、乾いた音が押し黙った教室の雰囲気を一変させた。同時に、田所の顔がみるみると昂揚して行く。

「な、ん……！？」

上岡の顔は、田所のそれとは対照的に蒼白。数秒もがいた後、その重たい体を仰向けに転倒させた。瞳孔が見開く。

「残念だったな、上岡。俺の行動の意味を、お前はもう少し考えるべきだったぜ」

絶命した上岡に向けて言葉を連ねた田所は、両手に持ったコーヒーの内、左側を一気に飲み干した。

——第一休憩の時に見た上岡の癖を、田所は覚えていた。

それは、“親指の爪を噛む”という癖。

おそらく、元から神経質な性格なのであろう上岡を見た時、田所はふと、その事を思い出し、そしてそれを利用する事を思いつく。

コーヒーに混ぜ込まれている毒は、ニコチン毒。

ニコチン毒は毒性の極めて高い神経毒で、体内に入った場合ほぼ即死に近い形で死亡する。それが“致死量を遥かに上回る量”入れられている。

——田所は上岡が寝ている間に、その両手の親指の爪に、右側のコーヒーを塗っておいたのだ。

無論、田所は右側が毒入りであるという事を知らない。しかし、それは関係が無い。

上岡が爪を噛んだ時、何の反応もしなければ、右側のコーヒーには何も入っていないという事になるからだ。

この作戦を実行する為には、2つのコーヒーを確保する必要がある。上岡が爪を噛んだ反応を確認したら、上岡に有無を言わせず、安全なコーヒーを自分が飲むためだ。そして、もう1つ。

上岡を焦らせること。

焦らせ、爪を噛ませるにいたらなければならないからである。

——向かいにある扉のロックが外れる。それと同時に、降りかかってくる“誰か”の声。

《ずぶとく、生き残った訳だ。田所 晴広。安心しろ、もう敵は居ない。その扉の先——最後の部屋には、キミの体内の爆弾を停止するスイッチが置いてある。後はそれを押して、ゲームクリアだ》

ふん、と鼻を鳴らして、田所はドアノブに手をかける。ギイ、と嫌な音が鼓膜をつついて、鉄製の扉が開かれた。

「……あ？」

その部屋を見た瞬間、田所の口から息と同時に言葉が漏れた。

《さあ、後は停止スイッチを押すだけだ。早く押したまえ。まあ……》

扉から見て、一番奥の壁に付けられた、スイッチ。

《どちらが停止スイッチか、分かるのなら……ね》

2つ。

スイッチは、何故か、2つ。

《自分自身の意で自分自身を殺さない様に、せいぜい注意することだ。“押すゲーム”、スタート》

最後の部屋 - 押す -

・プレイヤーは田所 晴広。

・扉を開けて直ぐに見える部屋の一番奥の壁に、停止スイッチが取り付けられている。

・この停止スイッチを押せば胃の中の爆弾は解除され、同時に“殺し回るゲーム”は終了する。

・しかし、部屋に存在するスイッチは、2つ。停止スイッチの他に、起爆スイッチ（2つのスイッチを外見から区別する事は不可能）である。

・当然、起爆スイッチを押してしまった場合、制限時間に関わらず即刻胃の中の爆弾は爆発する。

・制限時間内にスイッチを押さなかった場合も、田所はその場で処刑される。

さあ、脱落者は……？

37・自殺（前編）

「ちょっと待てっ！　なんだよそれ！　当てずっぽうで押せつてのか！？」

《まあ、そういう事だな、武運を祈ろう。制限時間は、後6分20秒だ》

田所の怒声など耳にも入れず、“誰か”はそれだけを伝えたとスピーカーから声を絶った。シーンと、静寂が部屋にのしかかる。とりあえず田所は奥の壁へと足を進め、その2つのスイッチを観察してみる事にする。

床から1m50cmほど上がった場所に、灰色のそれは並んで取り付けられている。スイッチ同士の間隔は、50cmくらいだろう。何一つ違いが見つからない、まるで同じ形の、同じスイッチ。そのどちらかが自分を救い、どちらかが自分を殺す。そう考えると何故かどちらも禍々しく見えてくる。

「……運？　勘？　そんな物で勝負しろっていうのか？　なんだ、それっ。馬鹿げてるぜ」

途方もなく遠くに感じる“生”に、思わず零れたその言葉は、田所に違和感を覚えさせた。

「馬鹿げてる……か、そうじゃ、なーな。最初からだ、馬鹿げてるのは。運も勘もへったくれもねえ」

命を、賭けてる。そして、それを強制させられている。そんな状

況が、最初から馬鹿げてるのだ。

——いつからだ？ ゲームの内容に、勝率を求める様になったのは。すべては“誰か”の手中にあるというのに、いつの間にか俺たちは受け入れ、そして冷静に対処しようとしている……こんな、馬鹿げた状況を——

田所の中で、

「なんだよ、それ」

膨らみつつあった“何か”が、

「そんなんじゃ、ねーだろ」

弾け、消し飛んだ。

「このゲームは、勝てる勝負だ」

田所の視線が真っ直ぐ持ち上がる。そして、一歩踏み出す。

「要は押せばいいんだろ！」

壁にかけられたスイッチへ、手が伸びる。

「このスイッチを、押せばいい！ だったら、だったら！」

スイッチに、田所の大きな手が被さり、

「両方、押すっ！」

両方のスイッチが、押された。

38・自殺（後編）

ぼーん、と、その場の空気には到底見合わない軽快な音が響いて、そして田所は腕をどける。

「思った通りだ……」

田所の身体に、異変は無い。

両方のスイッチ、つまり起爆スイッチを押したのに、爆弾は爆発していない。

「するわけねーよなあ、爆発なんて」

恐らく何処からか様子を伺っているであろう“誰か”に、田所は不敵な笑みを作った。

「そりゃそうさ。爆弾はとくに無効化されてるハズなんだ。だって俺は……」

《コーヒーを飲んだから、だろう？》

田所の言葉に被さる様に、黒板上のスピーカーから正体不明の“誰か”の声が降ってくる。

《爆弾の直径は5cmだ。それはルール説明の時も言ったし、“奪うゲーム”でお前は三奈門の胃の中から出てきたその小さな爆弾を確認している》

さっきまでの“誰か”とは思えぬほど饒舌に、田所の思惑を見透

かしていく“誰か”。

「……そう。それにも関わらず、さっきのゲームで俺はコーヒーを飲んだ。胃の中に水分を流し込んだんだ。たった5cmの爆弾が、それに耐えられるとは思えない」

田所の独白に、やがて“誰か”は押し黙る。

「爆弾が爆発しないのなら、起爆スイッチは在って無いような物。——このゲームの勝利条件は、“停止スイッチを押すこと”、だろ？ だったら両方押せば良かったんだ。どっちが起爆スイッチでも、関係無いんだから」

田所の声が途絶えると、教室に静寂が蔓延る。その重々しい空気を作り出しているのは、無論、“誰か”であろう。

《——正解、だ。田所 晴広》

ただ。“誰か”はそう付け足して、言葉を区切る。

「……ただ？ ただ、なんだよ？」

その言葉に、得体の知れない不安が田所に立ちこめる。そしてそれは、的中した。

《制限時間は、6分20秒だ。それを越えた場合、キミは処刑されると、私は言った》

「それが、どうした？ いくら何でも6分も経ってないハズだ！ 制限時間は間に合って……」

《違う。問題なのは、制限時間じゃない》

「じゃあ何がっ!？」

《——制限時間を過ぎた時、私はどうやってキミを殺したか、だ》

不意に低くなった“誰か”の声に、田所は冷水を背中にかけてられる錯覚を感じた。

——そうだ、そうだ。胃の中の爆弾は、もう爆弾じゃない。それなら、“制限時間内にスイッチを押さなかった場合、田所は処刑される”というあのルールは、どうなるんだ?——

心臓が脈打ち、一転、田所の額に汗が浮かぶ。

「どうということだ!」

《どういう事だと思う? まあ、安心しろ。何にせよこのゲームはキミの勝利だ。今、それについてとやかく言うつもりは無い》

質問を質問で返し、そして話を纏めようとする、そんな“誰か”に納得の行かない疑心を新たに芽生えさせつつ、田所は脱力した。終わった。

安堵というよりは、放心に近い感情が、田所の脳内を染めていく。

《お疲れ様だ、田所 晴広》

《ゲーム終了です。ゲーム終了です》

本心か否か、田所に労いの言葉をかけた後、“誰か”では無い女性の高いアナウンスが部屋に響く。

《敗者……三笠木様、失血死。三奈門様、爆死。永羽様、圧死。上岡様、毒死》

つらつらと、感情無く結果を読み上げていくその機械的な声など耳に入らず、田所は最後の“誰か”の言葉の真意を考えていた。胃の中の爆弾を使わずに、自身を殺す方法。それが一体、何なのか。

《勝者……田所様、このまま第2休憩へと進んでいただきます》

その声が止み、代わりにあの甲高い嫌な音が聞こえてきた時、田所はふと気がついた。

自分が居る、この教室の四隅。その下方から、金属製の円筒が顔を出している。

車のマフラーとでも例えたら伝わりやすいだろう。

「……あれ、何……」

崩れていく意識の中で、田所は考えた。

——毒ガスでも噴射するの、か——

数分して、ピー、とアラーム音が鳴り響き、田所が入ってきた部屋のドアが開けられた。

迷い無く部屋に足を踏み入れる“誰か”は、床に伏して気絶している田所を見て呟いた。

「……重たそうだな、運ぶの」

38・自殺（後編）（後書き）

スプラッタ編終了

39・疑問

3年？ 2年？ どれくらいか忘れてしまっているが、とりあえず、まだ彼が日常を実感出来ていた頃。

「嘘は繰り返せば繰り返すほど、本当に見えてくる」

傷んだ畳の上に座った狩屋は、焦点の定まらない目を開けて呟いた。

「急に何？」

狩屋に向かう様に腰を畳につけていた日頸（と呼ばれている何者か）は、また始まったと言いたげな表情で狩屋を見つめる。

対して、狩屋は少し間を空けてそれに返答した。

「ヒトラーですよ、嘘は大胆なほど群衆を騙しやすいって意味だそうです」

「へえ、それで？」

狩屋のその言葉にあまり興味を持たず、日頸は頭をポリポリと掻きまわった。

「それで？ って、意地の悪い返しかたをしますね」

狩屋が少しばかり顔をしかめると、空虚を描いていたその目に光が差し込む。

「「めん」めん、で、“例のアレ”はどれくらい進んだんだ？」

「……もう少しで完成です。やっとアイツに、恩返しが出来ますよ」

右腕を反対側の腕でばんぽんと叩くと、にい、と口を上に変ませる狩屋。

「ふーん、そっか」

その満足げな狩屋の表情に、日頸は首をすくめた。

その時、一段階低く下がった狩屋の声が、日頸の脳裏を貫いた。

「ところで、日頸さん。一つ気になる事があるんですよ」

その感覚は狩屋独特の物で、こういう時の彼は、普通に対話しているだけなのに、なぜか腹の底に鳥肌が立つ様な錯覚を受ける。

「ん？ なに？」

日頸はその気味の悪い感覚を拭い去ろうとして、無理に明るい声でそう聞き返した。

「これもヒトラーの言葉なんですけどね、“死が苦しいのは一瞬だけである。人はなぜ、その一瞬を耐えられないのか”」

「それが、どうかしたか？」

まったくだ。それがどうしたのか。日頸には分からない。

「どうしてヒトラーは、死の苦しみが一瞬だけだと分かったんでしよう？」

日頃には、分らない。そんなこと、分かるハズも無い。狩屋には、分かるというのか。

「死んだことも無いクセに、ね？」

——ゾッと、鳥肌が体を駆け抜けた。

39・疑問（後書き）

田所 晴広

連城 常夜

× 上岡 洋大

伊吹 蓬香

× 鳴嶋 和彦

× 三奈門 大樹

繰間 圭一

× 永羽 敦

× 中野 太一

× 黄村 征一

× 三笠木 光佑

降旗 真也

× 昼村 京介

さて、そろそろ（ようやく）狩屋 真一を中心に渦巻く大きな事件の謎が解き明かされていきますよー。

40・異常

一週間前。

「奴も、居なくなつたと、報告が――」

その場の空気が静まりかえるのを感じながら、室伏は続ける。

「奴は…… 2人の監視官に拘束された状態で、いつも通り病棟の周囲を散歩させていたのですが、時間になっても帰ってこず、不審に思つた病棟側が散歩コースを探索したら……」

ようやく落ち着きを取り戻した室伏は、依然として上下している肩の力を抜いて、しかし緊張したおもむきのまま話をこう締めくくつた。

「奴について行つた2人の監視官が、死体となつて発見されたそうです」

「……奴は、居なくなつていたのか？」

池神の疑問に、室伏は頷く。

「そりやまた…… 厄介な事になりましたね」

一部始終を黙って聞いていた湊谷が、より真剣な顔でそう言った。

奴。

それが新聞の一面を飾ったのは、一昔前、といっても、人々にはまだ新しい記憶として残っているかもしれない、半年ほど前のことだ。

早朝、集合住宅地のゴミ捨て場で3人の死体が発見されたのが、始まりだった。

死体の身元は、一ノ瀬 孝明（53）、一ノ瀬 涼子（51）、一ノ瀬 フミ（84）。

それぞれの死体は、全て10パーツ以上に解体されており、酷い臭気を放っていたという。

被害者は全員集合住宅の住人で、近所付き合いも概ね良く、周囲から恨まれる理由など皆目見当たらないその一家の死は、ある事で世間を騒がせた。

1人だけ、残された子供が居たのだ。当時21歳の青年はその日、決まったばかりの仕事へと家を出ていて、1人難を逃れた。

翌日、バラバラになった家族を見て、何も言わずに立ち尽くしたという。

——それから程なくして、犯人は捕まった。検察官に動機を尋ねられた時、彼はこう答えた。

「1人、残された子供を見てみたかった。その子供は、家族を全員ぶつ殺した俺に全身全霊の恨みをぶつけるだろうな。考えただけで、ぞくぞくする」

その後の異常な行動、言動を見かねた検察は、彼に精神異常がある可能性を考えた。精神鑑定を終え、結果“異常”と判断された彼は、責任能力の欠落として、精神病棟へと入れられた。

彼の名前は――

《さて、おはよう、連城 常夜、伊吹 蓬香》

目を覚ましたばかりの連城は、しかし醒めきった頭で辺りの状況を見回した。

少し鼻に突く、薬品の臭いが立ちこめているその場所は、恐らく元は理科室の様な場所だったのだろう。

しかし今現在、その場所は、その原型を残してはいなかった。

――鉄製の、分厚い壁の様な物が3つ、横に並んでいる。幅は1m、身の丈は2mくらいだろうか。

それから、モニターらしき物が黒板とは反対側の壁に取り付けられている。

驚くことに、その部屋にあるのはそれだけだった。

そして立ち上がる。連城には手錠も、足枷も、拘束具は何も身に着けられていなかった。しかし、やはり扉があるべき場所には黒ずんだ鉄塊が置かれている。

そして何よりも連城の目を惹いたのは、床に真っ直ぐ引かれた“線”だった。

線？ いや、違う。溝というべきか。

とにかく、教室を半分に区切るように、その黒い線は横たわっていた。

《さて、連城 常夜に伊吹 蓬香。キミ達は今、別々の場所にいる

訳だが》

天井のスピーカーからの“誰か”の声に、連城の意識がそちらへと向けられる。

確かに、この部屋には連城1人しか存在していない。

《キミ達には、同時に、別の場所で、同じゲームに挑んでもらう。何、ルールは簡単だ》

窓がガタガタと鳴り響いた。どうやら強い風が打ち付けているようだ。

《それでは、ゲームを始めよう。黒板を見てください。“鬼役”は、連城 常夜からだ》

「鬼役……？」

ぼそりと、気怠そうに呟いてから、連城は首を黒板の側へとねじ曲げた。

隠れるゲーム

“ 隠れる ”

・プレイヤーは生を“ 掴み取った ” 12名の内2名。

・連城 常夜は、科学実験室、伊吹 蓬香は調理室でゲームスタートとなる。

・それぞれの部屋にはモニターが一つ置かれており、対戦相手の部屋（黒板の上）に仕掛けられたカメラによって、その様子が伺えるようになっている。

・互いの部屋には三つの“ 盾 ” が設置されており、その盾の裏側はカメラからは見えない死角となっている。

互いの部屋の床にはとある細工が施されており、後述の動作により床が抜ける様になっている（互いの部屋は3階に位置しており、床が抜け、転落した場合、まず間違いなく死亡する）。

・ゲーム前、プレイヤーはあらかじめ“ 鬼役 ”と“ 人役 ”に分けられる。

・一分の間、人役の教室に設置されているカメラが停止し、鬼役は人役を監視出来なくなる。その一分間で、人役は鬼役に見つからない場所へと隠れなければならない

・一分後、鬼役は人役の隠れている場所を宣言する。それが正解だった場合、床が開き、人役は落下する。

・人役が生き残った場合、鬼役、人役を交代して再びゲームを開始する。これを勝負が決着するまで繰り返す。

・尚、一分間が経って鬼役が相手の教室をモニターで覗いた時、その画面に人役が映っていた場合、人役はその場で落下する。

さあ、脱落者は誰か。

41・事件

ころせる。ころせるから、俺はお前らに従った。それだけだ。

でも、誰でもよかった、だなんて思っちゃいけないぜ。なあ、三笠木、田所？

俺はお前らの、イカれた愛国心に従ったんだ。それだけ。それだけだ。

《それでは只今より一分間、連城様の部屋に置かれたモニターの電源を切断いたします。伊吹様はなるべく素早くどこかへ隠れるようお願いします。尚、カメラを破壊する行為は禁止です》

機械的な女性のアナウンスが調理室に響く。もつとも、連城のいる化学実験室と同様、その部屋は調理室としての面影を残してはならず、机は全て排除され、すっからかんになった部屋には3つの分厚い鉄壁——盾が並んで設置されている。伊吹は黒板の上に取り付けられたカメラを見上げた。90度くらいの角度で真っ直ぐに前方を向いているレンズは、3つの盾を前方だけ映し出している。盾の裏側は、カメラには——連城の部屋に置かれたモニターにも見えない死角となっている。

そしてアナウンスの言葉を信じるなら、今このカメラは機能を停止しているはずだ。

「床が開く——か」

カメラから目を離した伊吹は、連城の部屋と同じく床に刻まれた黒い溝を一瞥してから、小さく呟いた。恐らくこの溝を中心に床が開くのだろう。

何かにつかまることは出来そうだが、開いた床がいつまでも元の位置に戻ってこなかった場合、腕の力が保たないだろう。

「さて、どうするかな」

伊吹は顔を上げるついでに再びカメラまで視線を持ち上げると、口を上側に歪ませた。

「連城の失踪につきましては、その事実が公然の場にさらされる前に何とかしておきたい、というのが上の考えで――」

一週間前。失踪を遂げた連城の話を終え、室伏は再び落ち着かない様子で頭を掻き毟った。

静まった部屋の外から、バタバタと足音が聞こえる。

「……ちょっと待て。田所と三笠木が失踪したのは、いつだ？」

池神は何か重要なことに気付いたように目を見開き、室伏を見つめる。

「田所、ですか？ 奴は一昨日から姿が消していて……三笠木の失踪報告が入ったのは今日のことです。張り込みをしていた刑事たちが眠っているのが発見されて……“拠点”から、二人がいなくなっていた……と」

室伏が思い出すようにそう答えた後、湊谷が小さく声を漏らした。

「田所、三笠木、連城……？ これって——」

その声はやがて確信を増していくように大きくなっていく。

「まさか、あの事件が関係してるんじゃない……」

数秒の間を置いて、最初に動いたのは室伏。

「そ、その可能性を報告して来ます！」

彼は再び落ち着きを失った声でそう断ると、急ぎ足で部屋から飛び出して行った。幾度目かの沈黙が部屋を覆う中で、池神が静かに立ち上がる。

「静かになったと思ったら、これか。次は何を企んでるのか——」

深いため息を一つ零して、座していた机の引き出しを開ける。中にはいくつかのフロッピーディスクがあり、それぞれに年号が書かれている。

「去年の九月に起きた事件でしたね。あれから、もう一年ですか」

そのフロッピーを凝視しながら湊谷が呟くと、池神は適当に相づちを打ちながら2003年と書かれたフロッピーを取り出した。それをデスクパソコンに入れると、画面にテキストデータがいくつも表示される。

『島津連続放火事件』、『清水団地群獵奇殺人』など、どれもこれも一年前の日本を震撼させた大事件ばかりだ。ちなみに、画面内とところ狭しと並んでいるその事件の犯人達は、未だに捕まっていない。

「2003年、9月……あつた、これだ」

そんな中に、池神らの言う“あの事件”は明記されていた。

2003年9月23日、午前5時30分。

『アメリカ行き政府専用機爆破事件』

42・花火

今から丁度1年前。2003年、8月12日。

「良く聞いてくれ、同士たち」

“拠点”——つまりアジトで、田所は皆の注目を集めるために手を叩いた。

「次の目的を決定した」

薄暗い、工場のような場所に集合している十数人が、一斉にそちらへと顔を向ける。

「これまでの同士たちの活動で、資金はもう集まっている。準備は万全だ」

田所の隣に立っていた三笠木が、不気味な笑い声をあげ、足元に置かれている黒一色のアタッシュケースを慎重に持ち上げた。

「——おいおい、そりゃ」

その中身を真正面で確認した昼村は、言葉を詰まらせた。周りにいた降旗、永羽も、三笠木に近づき、開かれたアタッシュケースに顔を硬直させる。そこに入っていたのは現金などではなく、数十本にも及ぶだろうカラフルな導線が複雑に絡み合った、爆弾であった。

不気味な笑い声を止めないまま、三笠木は話を続けていく。

「9月の24日、大阪の空港からアメリカに向かってある飛行機がでる。そこには暮方くれかた総理大臣の他、数人の政府重要関係者も搭乗する予定なんだそうだ」

「なるほど、そこでその爆弾か」

床にあぐらをかいていた連城が上目遣いにそう言った。その言葉を待っていました、といわんばかりに満足そうな笑みを浮かべ、田所は言い放つ。

「そう。この爆弾で、アメリカ行き政府専用機を爆破する！腐った政治家どもの血で、花火を打ち上げるのだ！」

「なるほど」

その大声が止むか止まぬか、三奈門は至って冷静に田所に賛同した。

「それなら確かに一網打尽だ。この腐敗を叩き直せる。良いアイデア……」

そこで言葉を区切ってから、三奈門はふと顔を上げる。

「当面の問題は、どうやって“それ”を仕掛けるか、だな」

「いや、それを考える必要はない」

三奈門の言葉を遮る様に三笠木は微笑んだ。

「言つたろう？ 準備は万全だ。それについても、もう手は打つてある」

「どんな作戦だ？」

その自信満々の表情に思わず口を開いた昼村はを見て、三笠木はその笑みを一層深くし、答えた。

「ワーカー電気を知ってるか？ あそこに勤めている人間に――」

一つ一つの手順を、順序よく説明していく三笠木の言葉に、工場内は気味の悪い静けさに包まれる。

三笠木の説明が終了すると、一瞬の静寂。

そしてその静寂までもが終わった時、十数人の含み笑いが一斉に響きだした。

中央でその笑い声を聞いている田所は、小さく、小さく、呟いた。

「肥えた豚どもに、天誅を……」

43・発覚

「うい、もしもし？」

真夜中に鳴り響いた電話に起こされて

、日頸と呼ばれる何者かは気怠そうに受話器を持ち上げた。

「もしもしー？ 日頸さんですか？」

予想は出来ていたが、声の主は狩屋 真一だ。

「ん、何だよこんな時間に」

「聞いてくださいよ！ 俺ついにマスターしたんです！」

少し不機嫌な声の日頸のことなどお構いなしに、嬉々としたテンションで狩屋は声を弾ませる。

「はあ？ 何をマスターしたって？」

当然の疑問を口にした日頸に、狩屋は「いきますよー」と自信に満ち溢れた声で言い返し、続けた。

「あれ、声が、遅れて、聞こえてくるぞー？」

二秒ほどスルーすると、狩屋の声が再び受話器越しに聞こえてくる。

「どうです？」

そのあどけない声に、日頸は頭を抑えながら言い返した。

「ごめん、それ電話じゃ何一つ伝わらない」

以前として真っ黒に塗りつぶされたモニターの画面を見つめながら、連城は思考を回転させた。

このゲーム、鬼役が人役を当てることが出来る確率は、3分の1だと思いがちだが……そうじゃない。もっとだ。もっと難易度は高い。何故なら――

《一分が経過いたしました。一分が経過いたしました》

しかし、その思考を遮って、アナウンスの声は連城にそう告げた。1分間は、彼が思っていたよりも少し早かった。

《これより伊吹 蓬香の部屋に設置されたカメラが再起動する。連城 常夜はそのカメラの映像をモニターから見て、伊吹が何処に隠れているのかを宣言したまえ》

アナウンスの声は、機械的な女性の声から、元の“誰か”の声に

戻っている。

《正誤の判断は、こちらが公平に行うと約束しよう》

その声を最後に、モニター画面に光が灯った。薄暗い教室が、画面の周囲だけ微かに明るくなる。

「……あ？」

その画面を見て、連城は眉間にしわを寄せた。
その反応は、至極当然の物だろう。

画面が明るくなったのだから、連城の部屋のモニターは電源が入ったはずであり、伊吹の部屋のカメラは機能停止を終了したはずである。にも関わらず。

連城の部屋のモニターには、何も映し出されていなかったのだ。
黒色以外の色は、何も。

「……ちつ、そういうことかよ」

怪訝そうに顔を歪ませた連城に対して、モニターに“とある細工”を施した張本人——伊吹は、にやりと口を吊り上げた。

「さーて、どう出るのか、見物だね——連城くん」

1週間前。政府専用機爆破事件の資料を調べていた池神と湊谷は、被害者――すなわち搭乗者のリストを見ていた。

暮方総理大臣を始め、1年前の政府の重役の名前が、画面内にびっしりと表示されている。

――田所らが一般市民にまで名前を知られる様になったのは、この事件が切っ掛けとなっていて、専用機が海に沈んだ時の日本は、絵に描いた様な阿鼻叫喚の地獄絵図だった。

その大事件を引き起こした人間たちが、次々と失踪を遂げている。もしかしたら、この事件に彼らの行方を表すヒントがあるかも知れない――と、池神は考えていたのだが、それらしき物は何も出てこない。

思わずため息をついた、その時。

「池……神、さん……これ……」

池神の背後から、途切れ途切れな湊谷の声が発せられた。その湊谷は、少し震える人差し指をパソコンの画面に突き立てている。

その指先を目で追って、池神は驚愕し、絶句した。

「どういうことだ？　なんで、こいつが……！」

見間違えなどでは無い。搭乗者リストに明記されていたのは、まがつ事なき狩屋　真一の名前だった。

44・中心

一分前、機能を停止したカメラに向けて不敵な笑みを放った伊吹がとった行動は、上のジャージを脱ぐことだった。

黒のタンクトップ姿になった伊吹は、今し方まで身を覆っていたそのジャージを、カメラに向かって放り投げた。

ジャージは軽やかにカメラへと覆い被さり、その視界を封じた。

「回答時間に特に制限は設けないが、出来るだけ早く宣言をしてくれとありがたいな、連城 常夜」

真っ黒な画面の事などお構いなしに、“誰か”は冷静な声でそう告げた。

伊吹が3つある盾のどれに隠れているかが、部屋自体が見れなければ発見の糸口も掴めないだろう。

その途端、フツと連城の目蓋から力が抜け、薄目の状態になる。

「カメラが映っていない——？ 笑わせてくれるな」

ぼそりと呟くその声は、言葉通りに笑っている。

「そんな事が、通用すると思ってるのか？——それよりも、1つだけ解らないことがあるな」

人差し指を下唇へと持つて行くと、連城はその冷たい笑顔を一層と深くした。

「伊吹は——移動出来るのか？」

——調理室のモニターから発せられた連城の声に、伊吹の眉がピクリと動いた。

一週間前、青白く光るモニターを凝視しながら、池神は生唾を飲み込んだ。

件の政府専用機に搭乗していた人間は、全員死亡している。つまり、ここに明記されている“狩屋 真一”が本当に“狩屋 真一”ならば、今までのふざけた“ゲーム”を仕組んだ犯人は、狩屋 真一では無いという事になる。

何故なら、今発覚しているゲームの中で最初に行われたのは、5ヶ月前に行われた“選ぶゲーム”。

その時には既に狩屋 真一は死んでいるということになるからだ。

——しかし、池神の胸中に蠢いた感覚は、落胆等では無かった。

「湊谷！ 前にも聞いたが……今までの“ゲーム”のプレイヤーの……職業は……何だ？」

食い入るように画面を見つめながら、池神は湊谷にそう尋ねた。それを受けて、湊谷はポケットから手帳を取り出す。

「はい、ワーカー電気勤務のプログラマーの佐伯と柊に、その社長の明石 登。空港会社勤務の迎已ら4名と……それから、機械技師です」

「その機械技師の名前は？」

思わぬ返答に、少しどもってから湊谷は再び手帳に顔を下ろす。

「名前、ですか？ えっと——」

「カンザキ シゲル——だったよな？」

一瞬、その場の時が停止した。

「その通りです——神崎 茂。色々な工学の資格を持っているそうで。でも、それが何か？」

「書いてあるんだよ——。この政府専用機の開発担当者。航空工学技師の、神崎 茂って——！」

「え……？」

驚きの声を出すよりも若干早く、湊谷はパソコンの画面へと身を乗り出した。

確かにそこには、神崎 茂の名前がはっきりと表示されている。

「繋がってる——狩屋を中心に、全部！」

4 4 中心（後書き）

3 5 話越しの伏線回収

45・画策

黒に占領された画面を虚ろに見つめながら、連城はたどり着いた疑問をポツポツと呟いていく。

「ただ、そこで1つ分らないことがある」

その視線がモニターからスピーカーへと向けられた。本来ならスピーカーは黒板の上に設置されているのだが、このゲームではその場所にカメラが設置されているため、スピーカーはモニターの真下に取り付けられている。

《質問か？ 答えられる範囲なら答えよう》

“誰か”の声足下から這い上がってきた。

「……俺が伊吹の隠れている場所を宣言したら、お前がその可否を判定する——と言ったが……見ての通り画面は真っ暗だ」

見えない画面の向こうにいる伊吹を追い詰める様に連城は質問を続ける。

「それなら、俺が宣言してからお前が可否を発表するまでの間に、伊吹は移動出来るのか？」

——仮に。仮に伊吹が3つの盾の中で、一番右端の盾の裏側に身を潜めていたとして。

そして連城が「右側の盾に隠れている」と宣言したとする。

この時に、伊吹が右側の盾から真ん中の盾へと堂々と移動したと

しても、連城の部屋のモニターは何も映っていない状態なのだから、連城はそれに気付くことは出来ないのだ。

「——この場合お前はどうか審判するのか、先に聞いておかなくちゃならないな」

《なるほど——まあ、もっともな質問だな》

そう言ってから数秒も経たない内に、“誰か”は次の言葉を吐き出した。

《結論から言えば、それは出来ない。私は1分以内に身を隠せと言った。つまり、1分が経過してからの隠れ場所の変更は認めない》

「つまり今、伊吹は移動出来ないし、しても意味はない——ということの良いんだな？」

《ああ。仮に今、伊吹 蓬香が移動したとしても、その移動は無かったことになり、もともと隠れていた場所が伊吹 蓬香の隠れ場所となる》

その回答に、連城は満足げで冷たい笑みを作った。

「だ、そうだ……俺の声、聞こえてるんだよな、伊吹？」

——伊吹の部屋のモニターから、連城の低い声が響いた。伊吹の頬を、冷たい汗が流れていく。

《さて——もう質問は無いだろう？ そろそろ宣言してもらおうか。

連城 常夜》

急かすような“誰か”の声に、連城は不敵な薄ら笑いと共に返事をした。

「ああ……もう分かってる」

46・宣言

「死んだことも無いクセに——か。じゃあ真一くんは、死んだことでもあるのか？」

未だにザワザワする右腕を左手の平でさすりながら、日頸は至って平常な様に質問をする。

それに対して狩屋はポリポリと頭をかきむしり、曖昧な笑みを浮かべる。

「いいや、無いですよ。でも」

「でも……？」

しかし、その曖昧な笑みは直ぐに姿を潜め、変わりにどこか自信満々な表情が狩屋の顔に現れた。

「俺は死にません。そう簡単には——絶対に——ね」

その表情に、果たして根拠があるのかどうか。

「そうは言っても、分かんない物だぜ？ 人間がいつ死ぬかなんてさ」

「ははっ、そうですね。だったら俺は、死んだら生き返って見せますよ」

果たして、根拠が、あるのか、どうか。

「——ああ、そう。じゃ、せいぜい楽しみにしく」

日頸は狩屋から目を逸らした。

先程はアナウンスに制止された連城の思考が、再びを渦を巻き始めた。

「このゲームは一見すると1/3を当てる運任せな様に見えるが、実際は違う。もっと、もっと難易度は高い」

その目には何か確信に満ちた自信が漂っている。

「何故なら、このゲーム。『三つの盾に隠れる』とは一言も言っていないし、一文も書いてない。ただ『カメラに映らない場所に隠れる』と言っているだけだ」

連城は何も映っていないモニターの向こうにいる伊吹を、切り立った崖の淵へと段々と追いつめていく。

「今、カメラには何も映っていない。つまり——お前は“部屋のどこにでも隠れる事が出来る”んだよ、伊吹——！」

伊吹の頬を伝う冷や汗が、ポツ、という小さい音とともに床へと落ちた。その黒いシミを見つめながら、伊吹はカメラに音を拾われ

ぬように小さく舌を鳴らす。

——こいつ……気付いてる、か？ まさか——

その思考——というよりは、不安——の答えは、すぐに結果として現れる。

「さーて、どう出るかな、連城くん”。だったか——さっきお前が吐いた言葉だが”

伊吹の心情を侵し始めた焦りを加速させるように、連城の舌は止まらない。

「どうやらお前は、人の事を茶化すのが大好きな、そんな性格だろう？ つまり、お前が隠れているのは、安易な場所でありつつ、盲点……。一見には気付けない。そんな場所”

連城は唐突に席を立った。

口は開けたまま。

「宣言だ。あいつの隠れ場所は——」

伊吹の心臓の鼓動音が高まる。

嫌気がさす程の沈黙は、しかし一瞬で終わりを告げた。

「カメラの目の前だ」

伊吹の目が見開き、2粒目の汗が床に落ちた瞬間、“誰か”に代わって、機械的な女性のアナウンスが部屋に響いた。

《連城様の宣言の合否を確認しています。しばらく、お待ちください》

そうして訪れた重苦しい沈黙は、やはり長くは続かない。

《結果が出ました。合否を発表致します》

連城は席を立ったまま、静かにその声に耳を傾けている。

《連城様の宣言された隠れ場所は——不正解です》

その目蓋が、ほんの一瞬だけ痙攣した。

47・死角

「いや、本っ当に焦ったよ。一時はどうなるかと思ったね」

その声と同時にカメラの視界が開かれた。伊吹がカメラに引っかけていたジャージを取っ払ったのだ、と、理解するのは容易いことだったが、伊吹の部屋を映し出したモニターを見て、連城は息を呑んだ。

伊吹の姿が見当たらない。

目隠しをカメラから取り上げたのだから、当然伊吹はカメラの付近にいますだ。

盾の後ろに隠れていたのならば、カメラにかけられたジャージに手は届かない。

しかしそんな疑問の答えも、次の瞬間に判明する。

——現れたのだ。伊吹が、カメラの真下から。

瞬間、連城の口から感嘆の声が漏れ、伊吹はカメラに向かって屈託のない残酷な笑顔を見せた。

《正解は、カメラの真正面じゃなくて『カメラの真下』だったわけだ、
連城 常夜》

その答の意味を理解するのに、一瞬の時間も連城は要さなかった。

——“カメラは首を90度に、盾の真正面を映している”。つまりカメラの真下は死角。カメラはその場所を捕らえることは出来ない。

い。モニターにも、その場所は映らない。

とはいえ、連城の部屋のモニターは伊吹の目隠しにより本来の機能をほとんど失っていたのだが。

しかしそれにも、意味はあった。

「残一念。キミは私がカメラにジャージを引っ掛けた意味を、もうちょっと考えるべきだったね」

「どういう……ことだ」

「簡単なことさ。キミは頭が良さそうだからね。“見せるわけにはいかなかった”んだ」

陽気に饒舌な伊吹の言葉に、より一層眉を潜ませる連城。

——伊吹が最初からカメラの死角に隠れていたのなら、カメラにジャージをかけた理由が連城には解らない。

「私がジャージで目隠しをしなかったら——キミの部屋のモニターがきちんと私の部屋を映していたら、さ。きっとキミは気付いたと思うよ? 『モニターには、カメラの真下が映ってない』——ってね」

長い金髪をくしゃくしゃに掻きむしりながら、にこやかに笑う伊吹の目は、表情とは裏腹に黒く沈んでいる。

「それがバレたら目も当てられないから、とつさにジャージを被せたわけ。急な機転だったけど、吉と出たみたいだね」

返す言葉が、連城には見つからなかった。

《さて、攻守交代だ。連城 常夜、伊吹 蓬香》

足下がざわつく。

——次だ。次で確実に息の根を止めてやる——

鋭い目の奥底でそう決意する連城の意志を見透かしたのか、伊吹はニヤリと微笑した。

「キミは運良く『先攻』っていう無二のチャンスを与えられたのに、それを活かせなかったんだ」

伊吹はまだ笑っている。

「それに、キミはルールの盲点を突いただけで、私がどこに隠れているかを簡単に宣言したね。確証も無いのに。それは『ここで見つけれなくてもまだ大丈夫、次がある』っていう心の表れ——でも」

突然、伊吹はカメラに向かって人差し指を突き出した。

「次は無い」

その表情は最早、無邪気とは呼べないであろう。

画面越しでも伝わる程の狂おしい邪悪な笑顔を眼前にして、連城は歯を食いしばった。

「キミは私が、ここで殺す」

48・奇行

私はただ、楽しみたいだけ。それだけなんだ。楽しそうだから、彼らに協力した。ホントにそれだけ。後悔も反省もしてないよ？でも、正しいことしたとも思っていない。

ま、狩屋くんには悪いことしたかな？

《それではこれより、攻守を交代します。連城様の部屋のカメラとモニターは、機能を停止致しますので、一分間の間に“見つからない場所”へと隠れてください》

再びアナウンスの声に戻った放送がそう告げると同時に、伊吹の部屋のモニターが黒に包まれた。

連城の部屋のモニターも、同じく黒味へと変貌する。

「――さて」

それを確認してから、連城はゆっくりと首を後方へ回転させた。横に並んだ3つの鉄壁――盾が、その沈んだ目に映し出される。

そしてその盾へと近づくと、ゆっくりと触れてみた。

「……思った通りだ」

すり潰した笑い声が、教室に響いた。

《一分間が経過いたしました。一分間が経過いたしました》

伊吹はモニターから真逆の方向に向けていた首を正しい向きに戻した。

そして足下のスピーカーを一見してから、顔を上げる。

《さて、それでは早速だが、連城 常夜のカメラを再起動しよう》

“誰か”のモザイクがかった声が、そのスピーカーから聞こえてきたのを確認してから、伊吹はクスクスと笑って見せた。

モニターが明るくなる。

そこにはきちんと、連城の部屋が映し出されている。

その部屋の様子を見て、伊吹は眉を寄せた。

3つの盾が、全て床に倒れている。

「固定されて無かったのか……あの鉄板」

先ほど自身が隠れた時、伊吹は盾に触れていないので知らぬのも無理は無いが、3つ並んだ盾は床に置かれただけであり、固定されていない。

何故なら、このゲームのプレイヤーは負けると同時に床が開き転落するからである。

固定された盾の上に乗ってしまえば、床が開こうとも落ちようがない。

それを防ぐための、言わば当然の事実。

「……んー？」

数秒考え込んだ後、伊吹は頭を抱えて喉を鳴らした。

3つ並んだ盾は、重なる様にして倒れている。

真ん中の盾は普通に寝かされており、それに両サイドの盾がもたれ掛かる様な状態だ。

つまり真ん中の盾の両脇に、死角ができている。もたれ掛かっている2つの盾と、真ん中の盾の隙間。

連城の体型ならば、寝転べばその隙間にすっぽりと入ることが出来るだろう。

その死角の数は、2つ。

それが伊吹には理解できなかった。

3つ盾を倒さなければ、死角の数はそのまま、3つなのだ。

しかし連城の奇行によって、死角は2つに減少している。

わざわざ盾を倒す必要は、どこにも見当たらないのだ。

——何か、あるのか？　それとも——

余裕の表情が消えた伊吹とは裏腹に、連城はニヤリと顔を歪ませた。

——あの盾はカモフラージュ……！　本当の隠れ場所は、もっと別の場所だったことに、奴は、伊吹は気づいていない！——

49・本当

盲点だ。

カメラの真下？

ああ、確かにそこは——死角。

モニターからは見えない死角だろう。

だが、盲点じゃない。

俺の盲点は、見えないだけじゃ無いんだよ。

カメラは、90度——黒板から上の壁と垂直になるように設置されている。

標準レンズのカメラの画角——つまり視野は、約25度から50度。

仮に50度だとしても、垂直に設置されたカメラの死角——つまり見えない部分は、360から50を引き、310度。

実際には、天井にへばりつくことは出来ないので180から50を引いた130度である。

“カメラの真下”と呼べる範囲を、単純に90度までだとした場合、カメラには捕らえられない40度ほどの“余った空間”が存在するのだ。

連城は、その場所に腰をおろしていた。

このゲームの“宣言”は、自らの口で行わなければならない。

つまり単純に、言い表しづらい場所——盾の後ろでも無ければ、カメラの真下でもない——そんな場所に隠れてしまえば、自身が隠れている本当の居所を宣言されてしまう確率を、大幅に減らすことが出来るのだ。

そして、盾を倒したことによるカモフラージュ。

伊吹の認識を無理矢理に盾の方向へ持っていくことが出来れば、勝率は更に跳ね上がる。

《さて、宣言タイムだ》

“誰か”の声が聞こえているのか否か、伊吹の顔はモニターに向かったまま固まっている。

まるで画面の向こう側の何かを見ようとしている様に——。

《さあ、出来るだけ早く頼むぞ、伊吹 蓬香》

その声にも、伊吹はまるで反応をしない。

り——
——悩め悩め、分かるハズがない。俺の部屋を、見でもない限り

「……ふー」

その時、自信に満ち溢れた連城の思考と重なって、伊吹の声が部屋に響いた。

《さて、もう準備は良いのか？》

「……いやあ、お待たせしたね。もう大丈夫だよ」

額に浮かんだ汗をジャージの袖で拭いながら、“無邪気”な笑顔を つくる。

「見えたからね、連城クンの隠れてる場所が——さ」

真意かどうか解らないその表情から吐き出される言葉に、連城の顔が引きつった。驚愕か、嘲笑か。

——バカが、透視？ そんなもんが出来たら誰も——

そこまで言って、連城は気付いた。自身の犯した、途轍もなく大きなミス。

「あ、まで……」

「宣言だ」

「やめ」

「連城クンの隠れ場所は——」

「やめろっ！」

「少しだけせり出した、カメラの斜め前方——そこに座って、映らないようにしてるね」

《伊吹様の宣言の合否を確認しています。しばらく、お待ちください》

「ぐう……」

《結果が出ました。伊吹様の宣言は——正解です》

49・本当（後書き）

ややこしい……かな……？

50・奈落

「ふざけっ……る、な！」

立ち上がった連城の顔から脂汗が飛散する。

「いやー、私の視力が悪かったら、きっと気付かなかっただろうね
ー」

その様子を可笑しげに眺める伊吹は、『モニターに映ったモニター』を指さした。

——それはつまり、連城の部屋のモニター。

伊吹は自分の部屋に設置されたモニターの画面に映りこんでいる連城の部屋のモニターを目を凝らして見ていたのだ。

隠れている最中、隠れる側のモニターの電源は切れている。

つまり、

「映ってたんだなー、画面に、連城クンの姿がさ」

何も映っていない真っ黒な画面に、反射していたのだ。

連城の姿が。

「もっとも、本来なら映るハズは無かったんだけどね。キミがあんな事をしない限りは」

そう。

本来ならば、この作戦は実行する事は出来ない。

理由は火を見るよりも明らかで、『盾がカメラの視界を塞いでい

るから』である。

しかし、連城が盾を倒したことによりモニターへの視界が開かれてしまったのだ。

「ま、ご愁傷さんだね」

蒼白な顔をした画面の奥の連城に向けて、伊吹はそう吐き捨てる。

「ふざけるな！ たまるかよ、こんな！ こんな所で……死んでたまるか！」

しかしその怒号も虚しく、部屋に響きわたったのは悪魔の笑い声——死刑執行のサイレンだった。

「ぐ……！」

けたたましく鼓膜を揺さぶる甲高い音に、伊吹は思わず耳を塞いだ。

「っ……あれ？」

その瞬間、何かに気づいた様に部屋を見渡す。

——黒板の上には、スピーカーの無くカメラが設置されている。

スピーカーは、モニターの真下にある一つのみ。

「やめろ！」

依然として叫び続ける連城に、ゲームが始まる前の余裕は消え失せている。

「お前は誰だ！ どうしてこんな——」

《斬新な理由なんかありはしない。犯人の動機としてはすっかりおなじみの、ただの復讐だ》

「何を——」

飛び散った汗が床に着陸した瞬間、その足元——地面が、部屋の溝を境目にパツクリと口を開いた。

3つの盾と一緒に、連城は暗闇の底へと姿を消した。

一瞬の間を置いて、少しの地響きと、何かが壊れる音が、床の無くなった部屋に、静かに轟いた。

《ゲーム終了です。ゲーム終了です》

間も空けず部屋に木霊するアナウンスに、伊吹の目尻がぴくりと吊り上がる。

そして壁に設置されたモニターに近付くと、視線を下ろして静止する。

《敗者——連城 常夜様。転落死。勝者——伊吹 蓬香様。第二休憩の後、次のゲームに参加していただきます》

その声を耳に含んでから少しだけ時間を置いて、“誰か”は立ち上がった。

眼前に置かれたノートパソコンのエンターキーに人差し指を持つて行く。

『記憶の復元作業 準備中です……』

画面中央のポップアップにその文字が表示されると、“誰か”は
急ぎ足でその部屋を立ち去った。

ゲーム終了と同時に響く金属音はプレイヤーの記憶を一部だけ復
元する物であり、その際、プレイヤーの脳に刺激を与えるため、猛
烈な睡魔がプレイヤー襲う。

“誰か”の算段では、この行為により伊吹は調理室で気を失って
いる……ハズだった。

数秒後、ポップアップの文字が『error』に切り替わっ
たことに、“誰か”は気付かない。

己の犯した、致命的なミスの存在にも――

50・奈落（後書き）

かくれんぼ編終了……と見せかけて、実はもう少しだけ続きます。

51・脱走

規則正しく敷き詰められた木材で造られた床を軋ませながら歩く
“誰か”は、黒ずんだ鉄塊の前で立ち止まった。

鉄塊の上には、床と同じく古びた木製のプレートに調理室と記されている。

その鉄塊の側面に開いた小さな鍵穴に、“誰か”はポケットから取り出した銀色の鍵を差し込んだ。すると鉄塊は自動的に移動し、教室への扉が現れる。

「……あ？」

その扉を開けた時、本人も驚くくらいに間の抜けたすつとんきょうな声が“誰か”の口から飛び出した。

——いない。

そこで気絶しているハズの伊吹が、いない。

もぬけの殻となった調理室を見渡して、“誰か”は驚愕する。
モニターの下に、粉々になった金属片が散らばっている。

それが破壊されたスピーカーであるということは、言うまでもない。

あの奇妙な音を聞かないために、伊吹が蹴飛ばすなりして粉碎したのだろう。

しかしプレイヤーの手が届く場所にスピーカーを設置したことを後悔する間もなく、“誰か”は再び目を見開いた。

それは、伊吹が部屋を脱出した抜け道。

抜け道、と言っても、取り立て想定していなかった脱出の手立て——というわけでは無い。

窓。

廊下側に取り付けられた窓ガラスを割って、伊吹は外に逃げた。

——しかし、その方法は“誰か”にとって想定内。

窓ガラスがあれば割られるという可能性も、きちんと危惧していたし、何よりも対策は打っていた。

——予期せぬ事態を防ぐために、校舎の窓は全て強化ガラスに差し替え、廊下側に面する窓は開け閉めを不可能にしていたのだ。

しかし、窓は割れている。

その理由は、これまた単純明快。

破壊された窓に、ゲームに使用した『盾』がもたれ掛かっていた。

盾の重さを考えれば、運ぶことなど到底出来ないが、連城がやった様に倒すことなら簡単に実行できる。

窓に向かって、盾を斜めに蹴倒せば、高さ2mの盾ならば余裕を持って窓に届くだろう。

いくら強化ガラスとはいえ、本来力ずくで割られるのを防ぐほどの物しか、“誰か”は用意していない。

鉄の塊である盾の重みを全て窓に激突させれば、ガラスは一溜まりもないだろう。

「——面倒なことになったな」

“誰か”は言葉通りの顔をして、誰も居なくなった調理室を後に

した。

後ろと前を気にしながら続く廊下を走る伊吹は、足音を立てぬように立ち止まった。

一階に向かえば、この建物の玄関があるだろうと、そんな考えでいくつかの階段を降り、これ以上は下へ行く階段が存在しないことを確認してから、伊吹はそのフロアを探索していた。

しかし、ようやく見つけた玄関と思しきその場所には、少し錆びた赤い扉が立ちふさがっていた。

鍵がかかっているのか、錆び付いて開かないのか——恐らく前者だろうが——とにかく扉は開かない。

——まずいな。ここが玄関なら、真っ先に“誰か”が探しに来るハズ——

扉が閉ざされているのを確認した伊吹は、そりを返して玄関から立ち去った。

並ぶ下駄箱を通り抜けて、ひとまずは玄関から離れる。

二階に上がってから、そこに誰も居ないことを確認して、伊吹は小さく呟いた。

「――怪しいのは、あそこかな」

52・侵入（前書き）

大変長らくお待たせしました。

52・侵入

放送室と書かれたプレートを見つけたのは、三階。一番隅の、小さな部屋。

鍵が開いているかどうかという不安は、半分開いた扉を見て頭から吹き飛んでしまった。

半分開いた扉に触れない様に、伊吹は慎重に放送室を覗きこんだ。誰も居ないのを確認してから、部屋の中に入る。扉はそのまま。

四方の壁や、それに合わせるように配置された机の上に、十数台ものモニターが設置されていて、無数のマイクや、山積みになれたカセットテープが整理されて置かれている。

その他にはノートパソコンや、何かの液体が入れられた注射器が数本。

今モニターに映し出されているのは、どこかの教室。

向かい合うように置かれた2つのイスに、首に鎖を巻き付けられた男が座らされている。

自分たちとはまた別のゲームが行われているのか――と、伊吹はモニターから視線をカセットテープへと移動させる。

一番上に置かれたケースの背に『掴み取る』と書かれている。

と、不意に放たれた柔らかい光が伊吹の視界を掠めた。無意識に、そちら側へと首が動く。

それはノートパソコン。

奇妙なことに、画面いっぱいに大きな目玉が映し出されていて、

その中央にポップウィンドウが表示されている。

ノートパソコンの裏から伸びた黒のケーブルが、校舎中のスピーカーに連動している放送機材に接続されていた。その放送機材には、ケーブルとはまた別のカセットテープが回されている。

隣には、恐らくそのテープのケースであろう物が放置されていて、その背表紙に『吊られる』と書き殴られていた。

それを確認した途端、伊吹の顔色が変貌していく。

「……これって……つまり」

——巡りめく思考が、伊吹の反応を遅らせた。

「うああッ!？」

背後の気配に気がついた瞬間は、既に頭に衝撃が走っていた後だった。

“誰か”は手に持っていた鈍器を乱雑に放り投げると、気絶している伊吹の手首に手をやり、脈拍を確認する。

生きていることを確認してから、ふう、とため息をついた。

「顔は見られてないな……。ならこのまま次のゲームに連れていっても大丈夫か……」

伊吹の後頭部の髪の毛を捲って傷を視認すると、“誰か”はゆっくりと立ち上がった。

そして机の上に置かれたノートパソコンに近付き、裏側から伸びたコードを引き抜くと、代わりに引き出しから取り出したヘッドホンを差し込む。

画面上の目をクリックし、何かのパスワードを打ち込むと、ヘッ

ドホンを気絶している伊吹の頭に取り付けた。

「いくら気絶していても……直接耳にぶちこめばどうにかなるだろう」

『記憶の復元を開始致しますか？』

そう表示された文字に、“誰か”はエンターキーで返答した。

すると、ヘッドホンからあの鋭い奇妙な音が鳴り響き、伊吹の目蓋がピクリと反応した。

「まったく……手間かけさせるぜ。この分じゃ、運が悪けりや次のゲームで……」

頭をボリボリと掻きむしりながら視線を移す“誰か”の目に映ったのは、あの注射器だった。

「念には念を……入れとくか……」

52・侵入（後書き）

かくれんぼ編終了

53・彼奴

「色々あつたわけですよ、ねえ」

開口一番。

狩屋はキョトンとしている日頸を置いてけぼりにして1人で話を始めた。

「『あの事故』からもう9年も経つたわけです。アイツには、あの事故の時に救つて貰つたデツカイデツカイ恩がある！ 感謝しきつてもしきれない！」

右腕をポンポンと叩きながら声を弾ませる狩屋に、日頸は怪訝そうに眉を潜ませ、机に置かれた緑茶をすすする。

「さて、これが完成した事、アイツにはまだ言っちゃダメですよ！ 明日は『俺たち』の誕生日！ 今までのお礼として、サプライズで渡すんですから！」

その言葉の直後に日頸が湯呑みを机に叩きつけると、日頸の表情はさっきまでの怪訝なものから一変し、驚いたという様に目を見開いている。

「まさか……あれが完成したのか……？」

驚愕を隠せない日頸の態度に、狩屋はニタリと笑顔を作った。そして、背中に隠していた大きな箱を机の上に持ち上げる。

「3つあります」

「凄いじゃないか！」

狩屋の自慢気な声を遮って、日頸は机に身を乗り出した。
そして箱の中身を確認する。

「おお、リアルに出来てるね。これなら遠目からじゃ絶対に気付かれない！」

「さて、明日が楽しみですよ」

傷んだ畳を擦りながら落ち着かない様子で呟いた狩屋の瞳には、
嬉々とした希望の色が満ちていた。

「今日、日頸さんと呼んだのは、まだ他に理由が有るんですよ」

狩屋はその瞳の色を変えぬまま、未だに箱の中身を凝視している
日頸に向かって話しかける。

「実は、これを開発している途中——人間の脳内構造を研究してる
時に思い付いたんですが」

「何を思い付いたんだ？」

急に改まった態度になった狩屋に、日頸は小首を傾げて畳に座り
直す。

「笑わないでくださいよ。今から話すのは、あくまでも俺の『計画』
の話なんですからね」

その輝いた眼差しに日頸が無言で頷くと、狩屋は箱の置かれた机に身を乗り出して、声を潜めた。

「人の記憶を弄るプログラムを、開発しようと思ってます」

「……記憶……？」

「そうです。記憶を抜いたり、入れたり、覗き見たり——そんな事が出来たら、素晴らしい不是吗？」

「そんな事、可能なのか？」

「一応、構想は出来上がってます。後は何年もかけて、それを形にするだけです」

真剣その物な狩屋の空気に、日頸の頬を汗が伝った。

「そんな物が造られたら——間違いなく、世界が変わるぞ……」

その反応に、狩屋は薄っすらとした笑顔を更に深くして、親指を立てた。

「名前は……そうですねえ……メモリーズ・ノヴァなんて、どうでしょう？」

今から5年前。1999年の話である。

53・彼奴（後書き）

田所 晴広

× 連城 常夜

× 上岡 洋大

伊吹 蓬香

× 鳴島 和彦

× 三奈門 大樹

繰間 圭一

× 永羽 敦

× 中野 太一

× 黄村 征一

× 三笠木 光佑

降旗 真也

× 昼村 京介

予想外のアクシデントが発生しすぎて、隠れるゲームはマジでしんどかった……

さて、やっと終わりが見えてきました！

残すところ、後20話くらいでしょうか？

このままラストまで突っ走りますので、今後ともよろしく願います！

54・確認（前編）（前書き）

PV50・000達成しました！

これも一重に皆さまのお陰でございます！

更なるレベルアップを目指して精進いたしますので、これからも何卒よろしく願います！

54・確認（前編）

良くも悪くも、日本は変わる。俺たちの計画で、変わるんだ。
準備は万端さ！ 後は、時が来るのを待つだけだ……。
爆弾のカウントダウンは、絶対に止まらない。

《只今より15分間、第二休憩を開始いたします。次の第三ゲームが最終ゲームとなりますので、どうかゆっくりとお休み下さいませ》

そんな言葉に降旗は意識を呼び起こされた。

ゆっくりと立ち上がり、そこには自分を含めて4人の人間しか存在していないことを確認する。

「……じ、12人も居たのに……3分の1になっちまった……」

肯定せざるを得ない、しかし信じがたい現実、降旗は歯を食い縛った。

《1人500ミリリットル、水を用意した。教室の隅にある段ボールから各自取り出してくれ。残した分は、次のゲームにも持ち込める。熱中症で倒れられたら、こちらも都合が悪いからな》

スピーカーは、“誰か”のそのアナウンスを最後に無音を決め込む。

「……田所に、伊吹だな。まずは、情報交換をしようか」

繰間が手を叩いて周囲の視線を集めると、窓の向こうの雑踏が少しずつ静かになっていった。

「俺は、その降旗と、中野と一緒に第二ゲームをさせられた」

「じゃあ、死んだのは中野か……」

田所が確信を持った様子でそう言うと、繰間はそれに首を振って応答した。

「俺がやったゲームでは、三笠木に、水奈門、永羽と、上岡が死んだ。生き残ったのは俺だけだ」

その死亡者の人数に、繰間の眉がピクリと揺れる。田所は伊吹に目をやり、声をかけた。

「おい、お前はとうだったんだ？」

部屋の扉に置かれた鉄塊に背をもたれている伊吹は、痛む後頭部を擦りながらゆっくりとその問いに答える。

「私は、連城くんだったよ」

「連城だけか……？」

まるで予想外と言う風に、降旗は口を挟む。

「それなら、鳴島と……黄村は？」

「ああ、あの2人は多分、引き分けか何かで両方死んだんじゃない

かな？」

「なんで、んな事分かるんだよ？」

「そ、今からその説明をしなくちゃならない」

伊吹は降旗の疑問を遮るように人差し指を振り上げた。

そしてうーん、と唸った後、立てた人差し指を下唇に持っていく。

「どこから説明しようかな？ とりあえず、さっき私が挑んだゲームで連城クンが死んだ後、私は一度部屋から脱出したんだよ」

「本当かッ！？」

刹那の早さでその言葉に反応する瞬間。

田所は目を見開いてから、腕を組み直す。

「で、玄関は封鎖されてて出られなかったから、“誰か”の正体を確かめるために放送室に行ってみた」

「“誰か”が居たのか？」

「いや、居なかった。多分私を追って玄関まで行っただけ、居なかったから放送室に戻ってきたんじゃないかな？　そこで私を発見して、鈍器で殴った、と」

後頭部に手を持っていき、伊吹は続ける。

「でも、肝心なのはそこじゃ無くて、私が放送室で見たものなんだ」

時間を気にして居るのか、伊吹の視線が黒板下のタイマーへと移される。

オレンジ色の文字が、12分38秒と時間を刻んでいた。

「鳴嶋クンと黄村クンがゲームに挑んでるのを放送室のモニターで見ただけど、放送機材に、カセットテープが回されてたんだよ」

「カセットテープ……？　それが、どうかしたかよ？」

伊吹の言葉に首をかしげる降旗に、田所がふん、と鼻を鳴らす。

「なるほど。“誰か”がずっと放送室に居たのなら、わざわざテープを用意する理由が無いな。マイク越しに直接喋れば良いんだから」

「そーゆーこと、まあ、多分鳴嶋クン達のゲームは私のゲームと同時進行していたっぽいから、カセットテープが使われていてもオカシクはないんだけど……もう1つだけ、机に置かれてたテープが有ってさ」

一旦、声を整えた後、伊吹はハッキリと口にした。

「掴み取るって書かれてた」

一瞬だけ訪れた静寂を打ち払う様に、伊吹が咳を払う。

「……ようやく繋がったぜ」

それを受けて、田所が笑みを浮かべながら組んでいた両腕を無防備に降り下ろす。

「さっきのゲーム中、ずっと違和感を覚えてた。掴み取るゲームが
終わって、最初に“誰か”の声がした時、奴はこう言ったんだ。『
キミ達に私の声は聞こえるが、私にキミ達の声は聞こえない。つま
り質問には答えられない』ってな」

まるで、それが重大な事実に結び付く話であると言いたげに、田
代は声を徐々に大きく、荒々しくしていく。

「だけど、俺がやったゲームでは、あいつは俺たちの質問にハツキ
リと答えたんだ」

「そう。私のゲームでも、“誰か”は審判を担ってた。それは放送
室でゲームの様子を見てないと出来ないことだよ」

交差する2人の会話に、降旗は頭を掻きむしりながら身を乗り出
した。

「俺達のゲームは、第一と第二ラウンド分かれてたんだけど、第二
ラウンドに進めたかどうかは、“誰か”が見てないと分からなかつ
たハズだ」

その声に、辺りの空気が鈍重な静けさに包まれる。

それが何を指し示しているのか、その場に居た全員が瞬時に理解
した。

休憩時間残り10分を告げるアナウンスが部屋に響き、それが終
わった後、繰間が確認をするかの様に言葉を紡いでいく。

「掴み取るゲームが始まった時点では放送室に居なかった“誰か”
が、12人がバラバラになって挑んださっきのゲームでは放送室に
現れた」

伊吹がそれを引き継いで、辺りを見回しながらぼつぼつと呟いていく。

「これだけ周到な準備をしている“誰か”が、最初のゲームを監視しない、何てのは有り得ないから……」

全員の中で、信じがたい仮説が頭に住み着いた。

「掴み取るゲームが行われた時、あの部屋に居た人間の中に犯人が居た……そう考えるのが、一番つじつまが合うかな」

窓ガラスを打ち付ける風が、不意に強さを増した気がした。

「つまり“14人目の誰か”は、俺たちの中に居る可能性が高いってことだ」

55・確認（後編）

窓から射し込む太陽の光で、窓の形が床に浮かび上がっている。縋間はそれを見て、ガラス越しに見る光が、まだ朝日のそれであることを確認した。

「なあ、それじゃあよ、犯人は……最初に死んだアイツなんじゃないのか……？ 第一ゲームじゃ放送室に居なかった“誰か”が、第二ゲームから現れたんだろ？ それなら、第一ゲームで死んだあの男が……」

降旗がしどろもどろにそう呟くと、縋間が窓から顔を退け、降旗の方へと向き直った。

「その可能性も否定出来ねえけど、あの男が犯人だとしたら、両手が派手に吹き飛んで何で死んでないのか疑問が残るし——それに、部屋の真ん中で死んだふりをしている時に他の人間に触られたら、生きてる事がバレるかも知れない。そんな危ない橋を“誰か”が渡るとは思えないな」

その答えに降旗が押し黙った途端、タイマーから残り5分を告げる音が鳴り響いた。

皆がタイマーへと目を向ける中で、伊吹は一人だけ部屋の中央に置かれた段ボールへと足を伸ばす。

ガムテープを勢い良く剥がすと、段ボールは自身から蓋を開放した。

「“誰か”の言った通りだ」

大して関心が無さそうにそう言うと、伊吹は箱の中身を取り出した。

500ミリリットルの水が入った、ペットボトル。ラベルは取り除かれている。

「4本……ちょうど人数分だね」

「飲んでも大丈夫なのか？」

不安そうな面持ちで降旗が近付くと、伊吹は降旗の分の水も箱から取り出した。

「ここで私たちを殺す意味はないと思うよ」

その言葉だけ返すと、早速と言わんばかりにキャップを捻り始める伊吹。

田所は部屋の隅から、腕を組んだままその様子をジッと見つめている。

キャップを外した伊吹は人差し指をペットボトルに突っ込むと、濡れた指先を加えて見せた。

「……問題なし」

周囲に聞こえる程の声を発したあと、ガブガブとその水を飲み出した。

繰間も箱に歩み寄り、ペットボトルを取り出すと、一口分だけ喉を潤した。

ずっと張り詰めた空気だったから気にも留めなかったが、まとわりつく様な暑さが繰間の額に汗を浮かばせていた。

今は8月だから、当たり前か……と、そこまで思考を働かせた所で、繰間はふと違和感を覚えた。

自分は、何も覚えていない。

この場所に来る前、何をしていたのか。今自分が何歳なのか。職業は何なのか。

しかし、覚えている事も確かに存在する。

初めて目覚めた時に、ここが『教室である』と理解できたのは、自分の脳ミソが『教室』を覚えていたからであろう。

ペットボトルの開け方を、覚えている。そもそも、水が飲み物である、と、覚えている。

覚えている事と、覚えていない事。

この『境界線』が、何か重要な出来事に関与している……そんな予感が繰間の脳裏を過ぎ去った。

田所が水を取り出し、ペットボトルを顔まで近づけた。

窓から射し込んだ朝日が透明な水に反射して眼球に飛び込み、不意にペットボトルを降ろした。

ようやく部屋が静寂に包まれると、ぴっぴつと時間を刻む音が木造の教室に染み渡っていく。

降旗は不安が口から飛び出しそうな、奇妙な錯覚を味わいながら、それを紛らわすように口元でペットボトルを傾けた。

冷たい感覚が喉元を通り抜け、今までの疲労を受け止めた神経が自らの体をその場に座らせた。

残り時間はもう1分をきっている。

“誰か”の言葉を信じるのならば、次の最終ゲームで生き残れるのは、たった1人。

その1人という生還者の座を奪い取らねばならない。

田所から、伊吹から——繰間からも。

《休憩時間、終了です。只今より最終ゲームに突入します》

伊吹がスピーカーの下で背伸びをしながら手を伸ばしている。

再びスピーカーを破壊してやろうと考えてみるが、今回はスピーカーが高い位置に取り付けられているため、手が届かない。

諦めた伊吹が溜め息と共に脱力した瞬間、キーンと、耳障りな金属音が辺り一面を支配した。

とたんに視界が崩れ落ちていく。

やがて何も見えなくなった目蓋の裏側に、重々しい“誰か”の聲が響き渡った。

《独裁者は誰だ？ 制裁者は……？》

答える者は、居ない。

56・道化

1時間と、少し前。

第一ゲーム、“掴み取る”の真っ只中。

全員の恐慌が木霊しあう絵に描いた様な阿鼻叫喚の中で、昼村は目の前で鍵を奪い合っている人間の、その無防備な背中から鍵を手に入れようと腕を伸ばした。

「うぐっ!？」

瞬間、鋭い痛みが後頭部を走る。

自分の背後にいた男に殴られたのだと、そう理解したのも束の間。昼村が掴もうとしていた鍵を、男は急いで奪い取ってしまった。

ここで昼村は、とある違和感を覚えていた。

昼村が目を覚まして、ルールを確認し、そして男に殴られるまで、鍵を奪われていない。

つまり、昼村の背中には鍵があつたハズなのだ。

しかし昼村を殴り付けた男は、何故か昼村から鍵を奪わず、昼村が取るうとしていた鍵を奪い去っていった。

——待てよ。あの男——まさか……

その不自然な行動から導き出された答えは、たった1つだった。

掴み取るゲームで用意された『ジョーカー』というルール。

人数に対して鍵を1つ減らすため、プレイヤーの中に鍵が貼り付けられていない人間がいる。

つまり、あのゲームでの『ジョーカー』は、昼村自身だったのだ。

そして、その時13人のプレイヤーに紛れ込んでいた犯人は、自身の正体に気付く可能性のある昼村に用心し、『ある行動』をとっていた――

“誰か”の頬を汗が伝う。

慌ててそれを拭い取った“誰か”は、歩いてきた道に染みが出来ていないかを確認した。

そして、首を戻す。

「因果応報？ そんな言葉は信じないけど」

気絶している田所に向かって、虚ろな目を据える。

そして田所を乱雑に放り投げると、水の入ったペットボトルを投げ捨てた。

「だけどお前らの現状は、お前らが招いたことなんだ」

その言葉を最後に“誰か”はクルリと半回転すると、“外側”から勢いよく扉を閉めた。

ガラガラと金属音がして、黒い鉄格子が“誰か”と田所の間に壁を作りあげる。

蒸すような暑さが充滿するその場所は、校舎地下。

田所が閉じ込められて居るのは、コンクリートに塗り固められた、質素な『牢獄』。

「さあ、最後のゲームだ」

57・牢獄

「でも、狩屋 真一はもう、死んでるハズじゃ？」

一週間前。

パソコンに映し出されている死亡者リストを見て、湊谷は途切れ途切れに言葉を吐き出した。

「死亡者リストに載ってるんだ……それは間違いないだろう、が」

画面右上のバツ印をクリックして池神はテキストデータを閉じ、パソコンをシャットダウンする。

「とにかく、一連の事件がこの飛行機テロに関係している事は間違いない。連城や三笠木 of 消息を探るぞ。まだ間に合うかも知れん！」

「了解しました！」

立ち上がった池神に、湊谷は勢いよく敬礼した。

湿度の高い、蒸し返す様な暑さに田所は開眼した。

その目は見開かれたまま、呆然と最初に映り込んだ景色を見つめている。

「なんだ、ここ……？」

今まで、目を覚ましたら必ず古びた教室が迎えてくれていた。しかしそこは、何処をどう見ても教室では無かった。

コンクリートで塗り固められた白い天井、床、壁は、所々が黄ばんで亀裂が入っている。

背後には、田所が殺し回るゲームで最後に見た車のマフラーの様な鉄製の円筒が壁から突き出していた。

そして何よりも目を引いたのは、格子。

黒い鉄棒が、いくつも縦に並んで入り口に蓋をしている。

これはまるで……

「牢獄……？」

田所は戸惑いながらも、棒と棒の間から牢獄の外を覗き見る。

牢の向こう側も、白いコンクリートに包まれている。

何処かに扉があるのだろうか、ここからでは見えない位置にあるらしい。

田所の牢獄の中から見える物は、たった1つ。

机だ。

恐らく、部屋の中央。

そこに、古びた木製の机が放置されている。机の裏には、セットでイスも置いてありそうだ。

この場の雰囲気とは明らかに釣り合わないそのインテリアに、田所は不気味な何かを感じ取った。

顔を引っ込め、今度は牢獄の中をもう一度観察してみる。

さっきの休憩時間中に残しておいた分の水が無造作に倒されている。

——そして、もう一つ。

大きなシミの出来た壁に、何か機械が取り付けられていた。妙に思っ て顔を近づけると、それは20cm四方くらいの、小型のタッチパネルだった。

画面は明るい光を発しており、無機質な白の背景に、1〜4の数字が浮かんでいる。

「なんだ、こりゃあ」

立ち上がろうとして、足に何かがぶつかった。

意図せずに目がそちらに向けられる。

そこには、銀色のカセットテープが置いてあった。

“ルール”。

定規を当てて書いたのか、角ばった鉛筆の文字でそれだけ書かれた髪が貼り付けられていた。

それを取っ払って、田所は親指で再生ボタンを押し込んだ。

《さあ、最後のゲームを始めよう》

“誰か”の声が、ノイズに混じって聞こえてくる。

《生き残れるのは1名。培った生温い感情など、捨てざるを得ない》

「くそつたれがッ！」

吐き捨てる様に田所が呟くが、テープは気にせずに話を続ける。

《さて、お前の後ろに金属製の円筒があると思うが——察しのいいお前ならもう気付いているだろう。ゲームの敗者になると同時に……》

田所の視線が円筒に向けられる。

《毒ガスが吹き出す》

それを見計らった様なタイミングで、愉快軽快に“誰か”の声は弾んだ。

《ツイクロンB。かの独裁者アドルフ・ヒトラーがユダヤ人虐殺に使ったとされる毒ガスだ。まあ、その信憑性は定かでは無いが……》

再び訪れたリアルな死の予感に、吹き出るように体を汗が流れ落ちる。

《敗北が決定した瞬間、気体を逃がさない様に格子前のシャッター

が閉まり——同時に毒ガスが噴出される》

小馬鹿にしている様な声の態度が癪に障る。

《——さて、それでは本題に入ろう。何、ややこしいルールではない。名前は……》

田所は、ビリビリと肌を吸い寄せる狂気が、牢獄を——このフロア全体を、覆い隠している様な気がした。

《牛耳るゲーム……！》

牛耳るゲーム

・プレイヤーは死を“潜り抜けた”4名の内、全員。これが最終ゲームとなる。

・プレイヤーは全員、横に並んだ5つの牢獄に閉じ込められている。

・牢獄は5つあるため、一番左端の牢獄には、誰も閉じ込められていない（この牢獄をポケットと呼ぶ）。

・閉じ込められている順番は、プレイヤーに向かって右側から

ポケット 田所 繰間 降旗 伊吹

となっている。

・ゲームスタートから1分間、『選択時間』が開始する。プレイヤーは選択時間内に、牢獄の壁に設置されたタッチパネルの1～4の数字より1つだけ好きな数字を選択しなければならない。

・選択時間内に数字を選ばなかった場合、強制的に1を選んだことになる。

・一度選んだ数字は、次の選択時間から使えない。

・選択できる数字が無くなった場合、1から4の数字はリセットされる。

・選択時間が終了しだい、プレイヤーの選択した数字の合計が発表

される。

・合計の数字の分だけ、『脱出権』が伊吹の牢獄より左に移動する。
・例えば、合計の数字が3だった場合、『脱出権』は伊吹の牢獄より左に3つ移動して、田所が『脱出権』を獲得する。

・合計の数字が5以上の場合、『脱出権』は再び伊吹の牢獄から移動を再開する。

・例えば、合計の数字が7だった場合、『脱出権』は伊吹の牢獄より左に移動して、ポケットを通り越すと、再び伊吹の牢獄に戻り、左に移動する。つまり、『脱出権』を得るのは繰間になる。

・『脱出権』を獲得したプレイヤーは、牢獄から解放される。しかし、フロアからは出られない。

・解放されたプレイヤーは、フロアの中央にある『独裁者の席』を利用できる。

・『独裁者の席』に取り付けられたマイクに向かって、殺害したいプレイヤーのいる牢獄を“コール”すると、気体を逃さないようにシャッターが閉じられ、その牢獄に毒ガスが噴出される。

・コール出来るのは1回の脱出に1回のみ。コールを終えたプレイヤーは速やかに牢獄へと戻らなければならない。

・そして再び選択時間が始まる。これを繰り返し、最後に1人だけ生き残った人間が勝者となる。

・ちなみに、ポケットに『脱出権』が決定された場合、プレイヤーは各自の牢獄を入れ替わることが出来る。

・死亡したプレイヤーの牢獄は、ポケットと同じと見なされる。

さあ、脱落者は誰か。

58・再認（前書き）

台風でまさかの休校。

おかげで予定より早く投下出来ました。

58・再認

「ええ、散歩は彼の日課で、毎朝病院の周りをグルグルと回っていました。勿論、その時は彼に手錠をして、2人の警備員を監視役としてつけていましたよ」

前日。

連城の入院していた病院の、連城の担当医である神保^{じんぼ}は、挙動不審に辺りを見回しながらそう答えた。

恐らく神保自身は既に他の刑事から聞き込みを終えているであろう。

しかし、あれから6日間。連城の失踪について何のヒントも出て来ない現状を打破するには、もう1度全てを洗い直すしかない。そして連城の行方を探るヒントは、この病院において他にないだろう。

「それ以前に、何か変わった事はありませんでしたか？」

湊谷が手帳とペンを片手に再度質問する。

神保は何かを思い出そうとするかのように、薄い頭髪のコメカミに人差し指をつけて喉を鳴らす。

「変わった事ですか……」

しばらく間を置いて、ようやくコメカミから手を離す。

「そう言えば彼が失踪する前日に、誰かが面会に来ていましたよ」

「面会？」

神保の返答に、池神が怪訝そうな声を上げる。

「ええ。面会に来た人は病室に案内してくれと言ってきましたが、何分彼は凶悪犯ですから……安全のために見張りをつけた状態で、個室にて話をしてほしい、と頼むと、その日は帰られたんですが、後日改めてここに来ましてね」

「それで面会を……？」

「はい。何でも彼の遠い親戚だとかで」

ポケットから取り出したハンカチで、うつすらと浮かび上がった額の汗を拭う神保。

「それは、どんな人物でしたか？」

湊谷は手帳を開き、真っ直ぐな目を神保に向ける。

「マスクとフードを深く被っていましたので顔はよく分からなかったのですが、声を聞く限りは恐らく男性かと……」

「名前は？」

「名前は確か……」

そこで再び神保の記憶が途切れ、コメカミと人差し指が再会する。

「……………あ、そうだ、思い出しましたよ!」

その声と共に、神保はポン、と、右手の拳を上に向けた左手の平に叩きつけた。

「ヒクビ……………日頸 握雄です!」

59・選択

聞いてくれよ。永羽の奴、変なこと言っただがった。

永羽は昨日、中央病院に向かった狩屋を尾行してたらしいんだが

……。

そこで見たんだってよ。

狩屋が、笑ってるのを。

え？ 別におかしくないって？ それが違っただよ黄村。

——2人居たって言うんだ。

狩屋が、2人、おんなじ顔で。

《さて、全員がルールの説明を聞いたようだな。それでは——》

「待て！」

現状を完璧に把握できていないのであろう、不安定な怒声を繰返は張り上げた。

「ここは何処だ！？ これはどう見ても——校舎じゃない！」

その主張の通り、一面に広がる無機質なこの世界は、確かに以前までの空間とは一線を画している。

木製の古びた校舎から、コンクリートで塗りかためられた威圧的な牢獄。

《言ったハズだ。ここは対戦時に兵士たちを収容した、謂わば隠れ家。敵国の捕虜を幽閉する施設があっても、何ら不思議ではないだろう？》

“誰か”の返答に閉口した繰間は、何かを諦めたかの様にゆっくりと腰を下ろした。

そして、少しだけの確信を得る。

自身の質問に返事をしたという事はつまり、“誰か”は今ゲームを強要されているこの4人の中には存在しないということだ。

《もういいな？ それでは、ゲームスタートだ》

反論する人間が居ないことにより、その声によって血にまみれた幕が切つて落とされた。

自分の生死を分かち選択。

それに与えられた時間は、60秒。

繰間は出来る限りの高速で思考を働かせた。

現在『脱出権』が有るのは、伊吹の牢獄。

これからの60秒間で行われる選択によって、その『脱出権』が移動する。

選べる数字は1〜4で、プレイヤーは4人だから、最大の合計数

は16になる。

逆に、最小は4。

今、繰間は5つの牢獄の内、真ん中の牢獄にいる。

伊吹の牢獄から、2つ隣。

つまり、繰間が『脱出権』を得られる合計の数は、

2、7、12のどれか。

だが、さっきも言った様に今の時点では最小の合計数は『4』のため、『2』という数字はあり得ない。

そのため、繰間が牢獄を脱出するには、合計数『7』か『12』じゃ無ければならない。

同じ様に考えると、

降旗が脱出できる合計数は『6』か『11』か『16』。

田所が脱出できる合計数は『8』か『13』。

そして伊吹は、『5』『10』『15』。

この状況下で、出来ること。
出来ることは何か。

繰間がそれを思いつき、提案しようとした、その瞬間だった。

「良いアイデアがあるんだ！」

伊吹の声が響いた。

「アイデア……？」

それに反応して、降旗は声が聞き取りやすい様に鉄格子へと近づく。

「そう。色々考えたんだけどね」

田所から一番離れた場所にいる降旗は、何とか届いてくる伊吹の声を、集中して聞いている。

「今回は『脱出権』を、ポケットに持っていこうと思う」

その言葉に、思わず繰間が立ち上がった。

「俺もだ！俺もそう思ってた！」

ポケットに『脱出権』を与える。

その行為についてルールには、『ポケットに脱出権が移動した場合、プレイヤーは牢獄を入れ替われる』とあった。

「つまり、一度だけ、全員が牢獄から出られるんだ！」

繰間が全員に伝わる様に、大きな声を張り上げた。
それに同調して、伊吹も続ける。

「それなら、一度外に出て、全員で作戦を考えることが出来るよ」

段々と、その声に弾みがついていく。

「この牢獄、幅が4 mくらいあるんだ。プレイヤーは4人だから、私から田所くんまで16 mも距離があるって事になる。これじゃ、1分間で作戦なんて伝えられない」

「だが、牢獄から出られたら距離も時間も関係ないだろ？ どうだ？ 良い案だと思うんだが」

締めくくる様に繰間が言い切ると、辺りは沈黙に包まれる。その沈黙を破ったのは、田所だった。

「裏切りの可能性は？」

ピクリと、繰間の眉が反応する。

しかし、その反論は想定済みなのであろう。伊吹は素早く返答した。

「ここで裏切って誰か1人を殺したら、残った2人に狙われちゃうよ？ 裏切るメリットは無いね」

ハキハキと断言する伊吹の声に、田所は少しだけ考えた後、顔を上げた。

「まあ確かに、このまま膠着していても良いことは無いな」

その肯定的な言葉に、繰間は小さくガッツポーズをする。

「それなら……俺も乗っかるっ」

田所に後押しされて、降旗も伊吹たちのアイデアに同意した。

「よし、決まりだね」

それから少しの間を置いて、伊吹が口を開く。

「それなら、皆で『1』を選択しようか」

——ポケットは伊吹の牢獄から一番離れた、左端にある。

つまりポケットに『脱出権』を移動させるには、合計数を『4』

『9』『14』のどれかにしなければならぬ。

それならば、4人全員が『1』を選択すれば合計数は自ずと『4』になる。

「ああ、それでいい」

田所が同意した瞬間、フロアの何処かに設置されているのである。うすピーカーから、アナウンスが鳴り響いた。

《選択時間、残り10秒です。お早めに、決断を》

ちつ、と舌を鳴らしてから、降旗はタッチパネルに近付き、手早く『1』を選択した。

伊吹も、人指し指の腹をタッチパネルに押し付ける。

《選択時間、終了です》

そして、合計数が発表される。

《プレイヤーの皆様が選択した数字の合計は》

ポケットに移動させるため、全員が『1』を選択した。つまり、
合計数は『4』になる――

《『5』となりました》

……ハズだった。

60・断末

啞然とするプレイヤーを差し置いて、アナウンスは続ける。

《『脱出権』は伊吹様の牢獄から5つ移動します。今回、脱出権を得るのは……》

合計数は、『5』。

つまり、『脱出権』を得る人物——裏切りの張本人は……

《伊吹様となります》

「てめえ……！」

田所の怒号が響く。

しかしそれを掻き消すように、大きな笑い声が木霊した。

「あつははは！」

当然、その声の主は、伊吹。

「いやあ、笑わせてくれるねえ！　馬鹿ばかり！」

ガシャガシャと金属音がして、伊吹の牢獄が開かれる。

それを受けて伊吹は立ち上がると、颯爽と牢獄から飛び出した。

「あの野郎！　ふざけやがって！」

その姿を見て、降旗が鉄格子を揺らしながら叫び声を上げる。

伊吹はしばらくフロア全体を調べていたが、たった1つだけある鉄の扉が開かない事を確かめると、フロア中央に置かれた古びた机へと歩き出した。

「おい、伊吹！ お前……どうやって裏切った？」

机に両手を置いた伊吹に向けて、繰間が問いかける。

「どうやって……て、そんなの決まってるじゃないか。皆が『1』を押す中で、私は1人だけ『2』を押した。たったのこれだけで、合計数は『5』に出来るよ」

勝ち誇った顔で返答する伊吹に、繰間は首を横に降る。

「もし他の奴らも同じ考えで……裏切るつもりをしてたら……どうするつもりで……」

「その時はそれで良いと思ってたよ？ だって、私以外の誰かが『脱出権』を得たんなら、裏切ったと疑われるのは『脱出権』を得た人間だけ。私は疑われない。このゲーム、『誰が何の数字を選択したのか』は発表されないし」

机の上に置かれたマイクを持ち上げながら、伊吹は続ける。

「それに……誰が脱出権を得たとしても、全員で協力する提案をした私と繰間くんは、きっと殺されにくいだろうしね」

伊吹がマイクのスイッチを入れるとブツツという電子音が響いた。

《それでは、『独裁者』の伊吹様、コールして下さい。誰を殺しますか？》

牢獄に閉じ込められている3人の顔が、一斉に青ざめる。

その様子を楽しそうに眺めた後、伊吹はゆっくりと口を開いた。

「それじゃあ……」

3人の恐怖心を煽るように、伊吹は笑顔を壊さずに間を空ける。

嫌気が差すほどの沈黙。

その狂気に満ちた静寂が、じわじわとプレイヤーの精神を破壊していく。

長い、長い、だが、恐らくは時間にして10秒にも充たないだろう、その沈黙は、伊吹の一言で呆気なく崩壊した。

「……降旗くん」

一瞬にして、3人の時間が停止する。

「じゅーしょーさん、だね」

伊吹のその声に、止まっていた時間が動き出す。

「降旗ッ！」

繰返しが叫ぶ。

降旗は、降旗の脳は、訪れた『死』を理解出来ずに、声を上げさせた。

「なんで……？　なん、で……」

齒がガチガチと音を立てる。

「何で俺なんだよオオオオッ！！」

その絶叫をも遮るように、無情に、非情に、鋼鉄のシャッターが、鉄格子の前に降ろされた。

牢獄の中で噴出される毒ガスが漏れないように、隙間なく降ろされたシャッター。

その向こう側から聞こえてくる1人の男のくぐもった断末魔は、それほどの時間を用さずに、途絶えた。

60・断末（後書き）

・第一回戦

独裁者……伊吹

死亡？……降旗

『脱出権』は伊吹の牢獄。

・現在、残っている数字

田所、繰間……2、3、4

伊吹……1、3、4

61・解放

前日。8月25日、午後10時。

「その事……他の刑事には？」

神保の発言を受けて、池神は訝しげに眉を潜める。

「勿論、お話しました！」

神保は髪の薄い頭に汗を浮かべている。

「警部……日頸 握雄って……確か、明石が殺された工場を借りていた人間じゃ……」

湊谷が小さな声が呟くと、池神は微笑と共にコクリと頷いた。

やはり、一連の事件と連城の失踪は繋がっている。その確証が出来たのだ。

「でも、日頸 握雄の正体を掴むとなると、かなり骨が折れますよ……？ 奴の手掛かりは無いに等しいんですから。一週間も有ったら、遠くに逃げることでだって可能ですし」

その言葉に、池神はハツとして顔を上げた。

「そうだ……奴が失踪したのは一週間……正確には6日前だ」

池神は見開いた目を、そのまま神保に向けた。

「日頸 握雄は、『見張りを付けないと面会出来ない』と言ったら、日を改めてやって来た、と言いましたね？」

「え、ええ」

その鋭い眼光に、神保は遠慮がちな返事をする。
しかし、そんな事はお構い無しに、池神はハッキリとした声で質問を続ける。

「6日前の『ゴミ』は……まだ残ってますか？」

そこで、湊谷も何かに気付いた様に顔を上げた。
神保はその様子に小首を傾げながら、思い出すように答える。

「はあ、ウチの病院は一週間分のゴミを月曜日に纏めて廃棄しますので……今日は日曜日だから、6日前なら裏手のゴミ置き場に残っているとありますが」

自信無さげなその言葉に、池神の微笑が不敵な笑みへと変貌した。

《コールを終えた『独裁者』は、直ちに元の牢獄へとお戻り下さい》

アナウンスが終わると、伊吹はもう一度だけ扉が開かないのを確認してから、素直に牢獄へと戻った。

「くそっ！」

繰間の声が響く。

——ここで裏切ったら、残りのプレイヤーを敵に回す事になる——

他ならぬ伊吹が、田所の裏切りを抑制するために放った言葉。

ここで気付くべきだったのかも知れない。

回りを敵に回す事を屁とも思わない、伊吹の人格に。

《それでは、只今より60秒間、選択時間です》

そのアナウンスと同時に、繰間、田所のタッチパネルから、さつき選択した『1』が消失していた。

残るは、『2』『3』『4』。

この時点で、田所と繰間の頭の中には次に取るべき行動が浮かび上がっていた。

現在、『脱出権』の位置は先ほどと変わらず伊吹の牢獄である。

つまり、伊吹が『脱出権』を得るのに必要な合計数は『5』か『10』か『15』。

だが、降旗が死亡した事でプレイヤーは3人になった為、最大の合計数は『12』となった。

これにより、伊吹が脱出できる合計数は、『5』か『10』に限られる。

しかし、伊吹はさっきの選択時間、皆を裏切るために『2』を選択した。

その為、伊吹は『2』を選択出来ない状態にある。

ならば、田所と繰間が取るべき行動は1つ。

『4』を選択する事。

田所と繰間が『4』を選択すれば、2人の『4』を合わせて『8』になる。

この状況で伊吹が『脱出権』を得るには、合計数を『10』にするしか無いが、先ほど言った通り伊吹は『2』を使えない。

つまり、田所と繰間が『4』を選択すれば、少なくとも伊吹に『脱出権』が渡ることは無くなるのだ。

田所と繰間は、迷うことなくタッチパネルの『4』を選択した。

当然、伊吹もそんな事は承知の上。

2人が『4』を選択するのならば、伊吹は『1』を選択すれば、合計数は『9』になる。

つまり、『脱出権』は今度こそポケットに移動するのだ。

《選択時間、終了です。プレイヤーの皆様が選択した数字の合計は、『9』となりました》

予定調和のアナウンスに、繰間は胸を撫で下ろす。

《『脱出権』は伊吹様の牢獄より9つ移動します。今回『脱出権』を得るのは、ポケットです》

その機械的な声が終わるか否か、3人の牢獄の鉄格子が、地面へと下にスライドして消えていった。

《よって、プレイヤー全員を一時解放します。この間に、各々の牢獄を入れ替わっても構いません。しかし、暴力行為は認められませんのでご注意ください》

田所は右手をついて立ち上がり、牢獄の中に置かれた水とテープを抱えてから外に出る。

それとほぼ同じタイミングで、繰間も牢獄から飛び出した。

「お疲れー」

伊吹が繰間の肩をポン、と叩いてから、真ん中の、さっきまで繰間が居た牢獄へと入っていく。

思わず拳を握るも、暴力禁止と念を押されたことを思い出し、肩の力を抜いた。

「おい」

そんな繰間の背中を、田所は軽く押し飛ばした。

そして、伊吹から様子を伺われない様に、一番右端の牢獄の前ま

で行くと、これまた伊吹に聞かれない様に、小さな声で呟いた。

「お前と手を組みたい」

62・共謀

「良いか、1つだけ、俺に考えがある」

威圧感の混じった静かな声に、繰間は小さく頷いた。

「それには、お前の協力が必要不可欠だ。どっちが生き残るかとか、そんな考えは、今は捨てる」

田所は立ち上がると、目の前にある牢獄を指さした。

そこは右端。つまり、さっきまで伊吹が居た牢獄である。

「とにかく伊吹を倒さねえと、俺たちは2人とも殺される。それだけは確かだ」

右端の牢獄に入った繰間に、田所は後頭部を掻きながら開口した。

「とりあえず、お前の持つてる水をくれ」

「あの……」コシを調べて何をするつもりですか?」

前日。

神保は黒目を左右に移動させながら尋ねる。しきりに辺りを気にするのは、何かの癖だろうか。

「日頸 握雄は『見張りがつく』と言われたら、日を改めて面会に来た……これ、どういう事だと思います？」

池神の言葉に、神保は一層首を傾げた。

その様子を見てから、池神はキツパリと言い切った。

「“手紙”ですよ」

手紙。

そのワードで、神保の目尻がつり上がる。

「状況から考えて、日頸 握雄が連城の失踪に関係しているのは明らかでしょう。そして、連城の仲間であったテロリスト達のリーダー格も、同時期に失踪している……」

それに加え、明石殺害の事件では実行犯として日頸 握雄の名前が上がっている。

それはつまり、日頸 握雄と田所たちテロリストの関連性を示唆している事に他ならない。

池神は無精髭を擦ると、上がっていた口角を元に戻した。

「『見張り』がついていたら、日頸は連城に伝言なんて出来ないが……手紙を渡すくらいなら造作もないだろう？」

「なるほど！ その手紙で連城に病院を脱走させて、指定した場所

に呼び出せば……」

「ああ、連城の失踪は、仕組まれたものだったんだ」

後半、湊谷と池神の会話を黙って聞いていた神保の顔は、段々と青ざめていく。

「直ぐに、ゴミを調べましょう！」

そして、神保は案内するように走り出した。

「湊谷！ 署に連絡して、こっちに人員を寄越してくれ！」

神保の後に続きながら、池神は湊谷にそう命令する。

「了解しました！」

走っていく池神の背中を見ながら、湊谷は携帯電話を取り出した。

「無茶だ……」

田所の作戦を聞いた繰間は、その心中を言葉にして吐き出した。
一歩間違えたら、田所に確実な死が訪れる。

しかし、成功したら、確実に伊吹の息の根を止められる。

ハイリスク・ハイリターン

手垢にまみれたそんな表現が、繰間の頭をぐるぐると回っていた。

その後、田所は一番左端の牢獄に入った。繰間は一番右端の牢獄。

そして肝心の伊吹は、移動が始まると同時に真ん中の牢獄に入っていくのを、繰間と田所が目撃している。

繰間は小刻みに震え始めた自分の身体を、忌まわしい様な目付きで睨み付けた。

しかし、震えは止まらない。

「くそ……」

やり場のない不安と、それを隠せない自分自身。苛立ちから飛び出した声が消えると同時に、ピー、と電子音が鳴り響いて、鉄格子が地面から勢いよく飛び出した。大袈裟な金属音と共に、牢獄に蓋が閉じられる。

《それでは、只今より3回目の選択時間を開始します》

以前として無機質なアナウンスの声で、闘いの再開は訪れた。

62・共謀（後書き）

プレイヤーは4人なのに牢獄が5つある理由は、吊られるゲームにて黄村と鳴嶋が両方死んだからです。

“誰か”の計算では、黄村か鳴嶋のどちらかが牛耳るゲームに参加していたハズだったんでしょう。

今、

「黄村？ 鳴嶋？ ああ、そんな奴ら居たなww」

って思った人、表へ出てください。

63・再乱

くそ、あいつ……死んじまいやった。

罪の重さに耐えきれなくなっただとよ。

みんなに迷惑かけたくないからって、専用機を爆破した事は黙って……。

……。

なあ、田所さん。

俺たちがやった事は……本当に正義なんだよな？

繰間が目覚めと共に聞いた声は、それだった。

そして、先ほど田所に作戦を伝えた時、お互いが聞いた声の情報を交換した。

——専用機を、爆破した。

確かに、無意識の中に響いた声はそう言っていた。

それは他ならぬ繰間自身の声。

「俺は、人を殺した？」

しかし、そんな記憶はない。

「俺がここにいる理由は……」

ヒクヒクと自分の顔が痙攣していくのが、繰間にも分かった。

降旗が言っていた、狩屋という名前。

中野が言っていた、狩屋の死により打ち上げられる花火。

花火が、専用機のことだとしたら――。

「俺は……」

繰間の右手が震える。

その震えを左手で強引に抑えると、タッチパネルに向き合った。

自分が何者であろうと、何をしたのであると、とにかく今は生き残るしかないのだ。

そのためには、考えるしかない。

そして出来る限り田所の作戦を成功させる。

「そのためには――」

繰間は迷わず、『3』を選択した。

無論、考えあつての行動である。

さっきの選択時間で、『脱出権』は左端のポケットに移動した。
そして、その左端の牢獄に田所が移動したため、『脱出権』は左
端——田所の牢獄にある。

田所と繰間が使える数字は、残り『2』と『3』。
そして伊吹は『3』と『4』。

つまり、真ん中の牢獄にいる伊吹が脱出権を得られる合計数は『
3』か『8』か『13』となる。

田所と繰間が『3』を選択すれば、伊吹は合計数を『9』か『1
0』にしか出来ない。

さっきの選択時間と同じ方法で、伊吹が『脱出権』を得るのを防
ぐことが出来るのだ。

《選択時間、終了です》

アナウンスが聞こえると、繰間の思考に拍車がかかる。

——だが、合計数を『10』にしたら『脱出権』は田所の牢獄に
移動してしまう。

伊吹にとって、それは最悪の事態。伊吹はそれを避けるために合
計数を『9』にし、ポケットへと『脱出権』を移動させるハズ——

《プレイヤーの皆様が選択した数字の合計数は》

——つまり、伊吹は俺たちと同じ『3』を選択し、合計数は『9』
になる——

《『9』となりました》

「よし！」

アナウンスが自身の考えと重なり、繰間は歓喜の声をあげる。

《『脱出権』は田所様の牢獄より9つ移動します。今回、脱出権を得るのは……》

——田所から9つ移動した牢獄は、ポケット。『脱出権』はポケットに——

《——伊吹様となりました》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7743o/>

MEMORY GAME

2011年10月19日02時03分発行